德田秋聲
正宗白鳥
上司小劍
宇野浩二
監修

第二卷

近松秋江傑作選集

中央公論社刊

第二卷目次

二人の獨り者

東京のある雜誌社の用を帶びて、もう去年の十一月の末から京都の方に來てゐた鶴岡は一月の半ば過ぎてもまだ東京へ歸らうともしないで、やつぱり京都と大阪との間を轉々して到る處を飮み歩いてゐた。

大抵の人間が京都大阪で酒を飮みはじめる癖が付いたが最後そのまゝ根が生えてしまつて、容易に東京へは戻られなくなつてしまふのであるが、まして鶴岡のやうな、あと、もう二三年で四十にならうとする獨り者で、何處といつて一定の棲家さへ持たぬ氣樂者が、京都や大阪の酒の飮み心地のいゝことを覺え出したら、とても馬鹿らしくつて東京へ歸つてゆく氣にはなれなかつた。

彼は去年の十一月、東京の雜誌社が何處でもそろ〳〵新年物の支度に取りかゝらうとする時分、彼が外交員といふ名目の下に勤めてゐる雜誌社の爲に京都大學の教授連の原稿を取るつもりで、關西の方に出張したのであつたが、元來彼は三十七八の今日まで、學校を卒業してから十三四年といふもの、常に何かの雜誌社に籍を置いて生活してゐるが、几帳面な事務繁雜な編輯の仕事などには極めて不向きな男であつた。そ

の代りに雜誌なり雜誌の仕事に執着して、其社で自分の權勢を張らうとか、忠勤ぶりをして社主の御機嫌を買はうなどといふ俗慾は少しも無かつた。いつも几帳面で、そして精勵でなければやつてゆけないやうな編輯事務には携はらないで、何處へいつても、時日の制限から超越した、至つて自由な、のんきな役廻りの外交がゝりといふ名目で遊んでゐるのやら仕事をしてゐるのやら分らない用事を足してゐるのであつた。

鶴岡のやうな新聞雜誌記者は、今日から二十年ぐらゐ前まではまだよくあつた型で、當節の樣に、定期刊行物の仕事が全く產業化した時代には、彼のやうに時日の制限を超越した、仕事嫌ひの人間では、とても勤まらないのであるが、鶴岡といへばもう文壇でも大抵知らぬ者はない位の通りもので、そろ〳〵四十が來ようといふのに、女房を持たうとする氣もなく金さへ持てば、そこら中を飮んで步いたり不見轉を買つたりする。尤も彼は金がなくなつても何とかして飮んだり買つたりするくらゐのことにさう不自由をしなかつた。そんな譯で慾氣のないのが第一。それから、たゞそれだけならば怠け者で格別取り所のない人間であるが、彼がまれに見る讀書家で、何處へ行くにも、酒を飮んでゐる時でも殆ど手から書籍を放さなかつた。それはいつも大抵

外國の書籍であつた、誰を養はなければならぬといふ必至の責任を有たぬ彼は、どんな貧乏をしてゐる時でも――いつでも大抵貧乏であつたが――酒を飲むことゝ外國の書を讀んでゐることゝは止めなかつた。それが彼の一徳で、何處へ轉がつても扶持にだけは離れなかつた。

今、鶴岡が籍を置いてゐることになつてゐる雜誌社でも、そんな譯で、彼が京都大學の教授から、いよ〳〵どれだけの原稿を新年物の間に合ふやうに取つて來るかは、あんまり當てにもしてゐなかつたが、京都の方に遊びに行く旅費をやるつもりで、「往つて來てくれたまへ。」と、出張さしたのであつた。

京都の方の原稿さへ取つて送れば、いつまで居たつて、滯在費ぐらゐは、要求に應じて東京の社から送金してくれるのであるが、新年物の論文を三つ四つ博士達から書いてもらつた後は、頼む方でも頼まれる方でも互ひにだらけた氣分になつて、はかばかしく好ましい原稿が取れなかつた。初め東京を立つ時には、無論相當な旅費を受取つて出て來たのだが、それが、かす〳〵になる時分になつて丁度年末に又、原稿を取つた慰勞として何がしかの纒まつた金を送つてくれた。それつきり原稿を取つて送ら

ないのに、金ばかり送つてくれともいへず、社の方では、もう〳〵二月の雜誌が出來上る時分であるのに、とうに戻つて來てもいゝのに、あゝしてゐるのは、どうせ鶴岡のことだから何處かでずぼつてゐるのであらうと、そのまゝ放擲つて置いた。彼はその間に段々金が無くなると、何かの關係を手繰つて、京都と大阪の知人の處を訪ねて往つて、二十圓三十圓の金を借りて、今晩にも東京に歸るやうなことをいつては、その金が手に入るとすぐ難波新地や、宮川町へいつて泊つたり、道頓堀の法善寺裏や京極の路地の中へ往つて口腹の慾を滿たしてゐた。さうして到る處で金を借り貰ひにしては飮んだり買つたりしてゐると、酒は東京で飮む酒とちがつて甘いし、女は柔かいし、いつまでたつても切り上げがつかなかつた。實際また東京では、さすがの鶴岡もたゞ何でもなく、金を貸せとはいつて往けないのだが、京都や大阪にいつてゐると何といふこともなく、それが臆面なく云へるのであつた。偶〻東京から來てゐるやうな人間だと、對手が、旅先で旅費に窮してはさぞ難儀であらうと思つて、すぐ紙入から快く十圓札を二枚か三枚は譯なく出してくれるし、又對手が京都や大阪の人間である場合だと一層都合がよかつた。

「あそこへ往つたら、きつと貸してくれるであらう。」と、彼が目星を付ける人間は土地でも幾らか文筆の事に興味を持つて雜誌氣のある人間で、常に多少東京のそんな方面に憧憬して無論鶴岡の名を知つてゐるところから、その東京の鶴岡に、金の無心をいはれて、まさか否ともいはれなかつた。どうせ對手が鶴岡のことだから、貸す方でも、後で返してもらはうと思つてはゐなかつたが、彼の無慾で、率直で、厭味のない態度は每度さうしてちびちびした小遣錢を借りることに成功した。彼はその點に於てはよく骨を心得てゐて、出來さうもない五十圓と纏まつた金の話は初めからいひ出さなかつた。貸せといはれて、それを貸さなかつたら、貸してもらひたいといつた方よりも、貸さなかつた方が恥になる程度の二十圓か、多くつて高々三十圓の金を到る處で借りて步いた。そして、それを一つ所で二度とはいひ出さなかつたから、あんまり厭な思ひをしないでも濟んだ。

彼はさうして去年の暮からこの一月一ぱい四五十日を、十幾人と借り步いて過してゐた。

鶴岡は、京都では、大學の教授室へ通ふのに近い處を選んで、吉田の大學病院前

の、病人などの泊まる安宿に止宿を定めてゐた。

で、一月のもう二十日過ぎ。彼はいつものとほり九時頃に床の中で一寸眼を覺ましたが、昨夜京極の路地の中で遲くまで飲んで來たので、熟睡の快さを覺えながら、枕の上で頭を一つ向き返したまゝ又うと／＼と寢入つてしまつた。

女中なども初めのうちは「とほもない朝寢をおしやす人」と呆れてゐたが、この頃ではいつも十二時が來なくつては起きぬ人と定めてしまつてゐるので、いつまで寢ようと、そのまゝ放棄らかして置いた。それでも先のうちは、どんなに長く寢てゐても朝の時分時がくれば、必ずおちよぼが十能に火を入れて、そつと座敷に入つてきて火箸の尖で火鉢の中の煙草の吸殻だの、紙屑だの、鶴岡が唾を吐いて團子になつてゐる灰の固まりなどを挾みとつて、綺麗に灰を搔きならしたり、鐵瓶にもしやん／＼いふほど一杯湯を煮沸らして、洗つた茶道具まで添へて、何時起きてもいゝやうにして置いたのであつたが、そんなにして置いても、鶴岡が眼を覺ます時分には、いつも炭火は婆さんの頭のやうに眞白になり、湯はおほかた吹き溢れて、冷たくなつてしまひ折角女中が綺麗に拭いて持つて來た鐵瓶が霜の降りかゝつたやうに灰まみれになつてゐ

た。

それと、……それよりももつと有力なる理由は、去年の暮から大分滯つてゐる宿料を入れぬので再三再四「どうぞ一ぺん綺麗にしていたゞきたうおす。」と、やんはり帳場から催促されてゐるのを、さういふことにはもう馴れてゐる鶴岡は、飽くまで不然として「大丈夫だよ。」といはぬばかりの鷹揚な顏をして、

「あゝ四五日のうちに……」と、餘計口數も利かずに體よく撃退してゐるのであつた

京阪の番頭は又何處までも辛抱が強くつて、腰が低かつた。それに初めのうちは、此方の顏を尊重して、たゞ默つて女中に書附を持たして寄越すだけであつたが、容易に勘定を下げてくれさうもないので、この頃では番頭がちよく〳〵鶴岡の座敷に顏を差し出すのであつた。

「いいえ、あなた樣を御心配申すのではござりませんが、手前共でも一寸こゝの處いろいろ差支へがごはりまして、まことに困つて居りますので。……又餘り嵩まりますると、お互さまに荷が重うなりますので、どうぞ一つ何とか御心配下されますやうにおねがひ仕りまする。」

番頭に、膝の上で揉み手をしながら、さういはれると、さすがの鶴岡も、もともと彼は氣の好い、正直な男なので、さうなくてさへ、酒に照れて林檎のやうに眞紅になつた頬を一層赤くして、まご〳〵するやうな口をしながら、案外子供つぽい調子で、吃り〳〵「えゝえゝ」と飲込むやうにいつて、「東京の社の方へさういつてやつてあるのだから、もう近々送つて寄越す筈なのだが、來次第今度は必ず君の處に入れますよ。」と、いつて、近眼の眼鏡ごしにジロリと番頭の方を見た。

「へえ〳〵。どうぞさういふことにおねがひいたします。」番頭は幾つも低頭した。

鶴岡は、口の先ではそんなことをいつてゐても、東京からも何處からも差當り金の入つてくる當てはなかつた。綺麗に勘定を下げたのは、去年の十一月の末の一度だけで一年の大勘定日といふ十二月の末には東京の社から宿へ拂へるくらゐの金は送つて寄越したのであつたが、彼は、もうその頃はすつかり京都のうまい酒の味を飲み覺えた時だつたので、百何十圓といふ勘定を綺麗に拂つてしまへば、後に殘る處は幾らもなくなつて、外に出て使ふ小遣にも不自由をせねばならぬと思ふと、身を殺ぐやうな寂しい心持がするので、その金が入るとすぐ、宿へは「ちよつと大阪の方に往く。」とい

つて出掛けていつたきり、十日ばかりも京都へは歸らなかつた。そして、やう〳〵松の取れる頃になつて野良猫のやうな樣子をして飄然と戻つて來た時には、もう懷中には京阪電車で天滿の終點から三條までの電車賃が、やつとあるくらゐのものであつた。

今度戻つて來てからの待遇は眼に見えて變つた。朝も、今までとちがつて、彼が十二時頃になつて眼を覺まして呼ぶまでは女中も上がつて來なかつた。それでも向うもやつぱり商賣の弱味でさうまでぎす〳〵いつて催促するやうなこともせず、呼べばおとなしい女中が用きゝにも來るし、時分時には食膳も運んで來た。

それには一つはよく京都大阪の旅館やお茶屋が東京の者にかゝつて手を燒く寸法で、最初の布令出しがちよつと大きかつたので、彼方では商人處とて、そんな種類の人間が少いのと、あつても大抵信用の置けるところから新聞社や雜誌社の人間といへば少しも險呑がらず安心してゐる風であつた。鶴岡は又そこを附け目に何處までも泰然と構へてゐるのであつた

それに、も一つ彼の容貌が何處となく强らしいのが宿の者や女中達に對して非常に有利な結果を持ち來たらしめた。底冷えのする寒中にシヤツをも著ず、いつも開いた

襦袢の襟元から酒に照れた赤い胸が露れて、背こそさう高くはないが、でつぷり肉の付いた體の容態から圓く二重顎に括れてゐる頬から喉頸のまはりの髭を剃つたあとが青々としてゐて、强度の近眼鏡の底にぎろ／＼光つてゐる眼尻のあたりに、もし一つ氣に入らぬことでもあつたら、それこそどんなことでも仕出すか分らないやうなおつかない表情が鶴岡の身邊に溢れてゐるのであつた

鶴岡は、自分でもそれをよく知つてゐて、どうかすると、ひとりでくす／＼可笑しくなることさへあつた。自分をよく知つてゐる者は、だれでも自分を氣の好い男としてゐる。それにもかゝはらず、自分のこの容貌や體の樣子が何處となく一癖も二癖もあるらしいので、つい買ひ被つて餘計に遠慮せられたり恐がられたり、それを自ら知つてゐる彼は又その點を利用することをもよく知つてゐた。そして、そんな恐い人と思つてゐた鶴岡がどうかした際があつて、案外思つたほど恐い人間でなかつたことが女中などに飲込まれると、そこが又一層附け目にもなるのであつた。

それでこの頃では、勘定の少しも下らぬには困つたものだが、鶴岡さんは惡い人ぢやない、恐い人でもないといふことに相場は定つてゐるのであつた。

彼はあんまり寢過ぎて、ぐつたりとなつた頭が次第に正氣づいてくるのを快い氣持で味はひながら、床の中で大きな欠伸を三つ四つつゞけさまにした。眼から流れ出る涙が兩頰を傳うて落ちるのを拭かうともせず、いつまでも寢床の中でもぐ／＼してゐた。座敷は八疊の座敷であつたが、木口の粗末な安普請で、下宿屋といつてもよいくらゐ荒凉としてゐたが、それでも南を受けた緣側から靜かな冬の陽が明るく障子越しに射しかけてゐる。鶴岡は睡り足つた氣持と、その座敷の日蔭とで、大抵何時頃であるといふ見當はついたが、これから起き出てみても、差當つてどうしてみようといふ好い考へも浮ばぬので、綿々としてひとりでに湧いて來る淡い雜念に頭を任かせて時刻を移してゐた。

それに、これから起き上がつて顏を洗つたり、食膳を運ばしたりしてゐると、もう今日あたりは定つて番頭か主人かゞ又上がつて來て眞綿で頸を締めるやうなことをいふにちがひないと思ふと、一層寢床を離れるのが大儀になつて、彼は手を伸ばして枕頭にあつた敷島の袋から一本拔きとつて、横向きに仰いたまゝマッチを擦つて、ぷかり／＼煙草を吹かした。そして、二た息三息煙草の煙を好い心地で鼻の孔から天井の

方に向けて吐き出して暫く無念無想の境に心を遊ばしてゐたが、ふつと思出したやうに又手を伸ばして、今度は又枕頭に投げてあつた、酒屋の掛取りの持つ樣な大きな皮の合切袋を、不精らしい恰好で取り寄せて、その中から赤い表紙の小型の洋書を拔き出して、横向きに寢たまゝ、誰かの名刺の一枚挿入してある處を披いて、前からの讀みさしを讀みはじめた。それは、ハヴァロック・エリスの性の研究に關した本であつた。

そして一時間ばかり惹きつけられるやうな興味で眼を通してゐたが、だん〳〵空腹を感じて來た。時計を持たないので正確な時間は分らないが、頭の向うの廊下にさし込む日當りの具合で、かれこれもう二時頃らしい。さう思ひながら倘ほ木の上に眼を向けてゐると、階下の帳場の時計と思はれて、ボン〳〵と二つ鳴る音が靜かに響いた。京都らしい冬の午後のひつそりとした氣配が家の居まはりを取り卷いて、いつも騷々しい話し聲の聞えてくる廊下のすぐ下になつてゐる南隣の路地長屋も今は靜まり返つてゐる。

鶴岡は空腹を覺えるのが一層强くなつてくるにつれて、ふつとずるい事を考へついた。今時分は誰でもみんな一寸午過ぎで氣の拔けたやうな心持のしてゐる時分であ

る。今からだつたら起きて、冷くなつた食膳を運んで來させても何だかもう今日一日の間が拔けてしまつてゐるので、番頭も主人も厭な話を持つて上つては來はしないであらう。

さう思ふと、急に起き上る氣になつて、手にしてゐたエリスの本をそこに投げ出して、又敷島を一本啣へながら、仰向いたまゝパチ／＼手を鳴らした。呼鈴は柱の中程に取付けてあつたが、遠くつて立つて行くのが大儀であつた。

やがて階段をギシ／＼と踏む足音がして、女中が廊下の處から膝を突いて、そうつと障子を開け、

「お呼びやしたんどすか」と、靜かに訊いた。

鶴岡は、横になつたまゝ鼻をかんでゐたが、くるりとそちらへ頭を向けて、

「あゝ、もう起きようかねえ、おかつさん」と、鼻の詰つたやうな聲を出して微笑しながらいふと、おかつといふ二十ばかりのおとなしさうな女中もそれと一緒に笑つて、

「ほんまに鶴岡さん、あんたはんようお寢やすこと。もう三時どすわ。」

鶴岡はそんなことには驚きもしないといふやうに、

「うむ、よく寢た。まだ、もつと寢てゐたいんだが、そろ〳〵腹が減つて來た。」
するど女中は仰山に呆れた顏をして、
「まあ、ようおいひやす。……ほんなら、もつと寢々しとゐやすな。日の暮るのは、もう直きどつせ。ほしたら、お腹も減らいで宜しいやろ。」
「戯談をいふない、おい。腹の中が空になつてしまつたら寢ようたつて寢られやしない。」
「そやかて、あんたはんが勝手に何時までも寢とゐやすのやおへんか。今時分おつ起しやしたかて、もうみんな冷たうなつてしもてゐますがな。」
「冷たくなつてゐても、それは俺の勝手だから構はない。おかつさん濟まないがねえ、ぢや、これから、御飯の支度をしてくれ。何でも構はん。」
鶴岡は鼻に病があるので、そんな他愛のないことをいつて女中と戯談口をきゝながら、横になつたまゝ、長い間かゝつて鼻をかんでゐたが、やがて鼻のまはりを眞赤にして鼻をかんでしまふと、
「さあ、起きるよ。」といふ掛聲と一緒に思ひ切つて寢床を離れた。

年中貧乏をしてゐながら、酒を飲むせゐか、この頃またひどく體に肉の附いて來た鶴岡は、そんな寒中にでもシヤツを着るのが嫌ひで、便々と赤肥りに肥つた腹を露出して、寢卷の浴衣をすぽりと脫いで、夜具のうへに廣げて載せておいた着物を取つて肌襦袢も重ねてゐない襦袢を直のまゝ着物と一緒に體に纏うた。着物はそれでも高貴織の節絲の二枚重ねで、羽織もそれと對の物であつたが、去年の十一月の初め東京を出る時新調したのを一枚看板に着て來たつきり、襦袢もそれから地肌に着通しにしてゐるので、さうなくてさへ脂肪分の多い體では堪まらない。肌も襟も垢に汚れて着ると惡くひやつとするやつを、彼は格別氣にせずに着てゐるのであつた。着物も襟頸のまはりが脂光りがして、膝前のあたりも妙に小皺が寄つたやうになつて汚れが眼についたが、鶴岡はそんなことには一向無頓着であつた。その上から綴れ織りの角帶なんか締めてゐるのは、思つたより鶴岡にも色氣はあつた。

女中はそれから起ち上つて、火鉢に火を運んで來たり寢床を片付けたりして、鶴岡が洗面所にいつてゐる間に、ざつと座敷を掃き出した。

鶴岡は顏を洗つて座敷に戾り火鉢の傍に寄つて煙草をぽかり〳〵と吹かしてゐた

が、「さてこれから飯を食べてからどうしようか。」と考へた。これから夜までこの薄穢い座敷にゐて、別嬪でもない女中の顔を見て靜と内に引籠つてゐる我慢はとてもなかつた。さうかといつて、出て歩いてみたところで、懷中が缺乏してゐては面白くも何ともない。

どこか今までの氣の付かなかつた處で錢を貸してくれさうな人間は居らぬであらうかと、そんなことを考へながら女中の淹れていつた不味い茶をとつて呑んでゐるところへ、今度は女中が重い足踏みで食膳を運んで來た。見ると、それでも膳の上には白味噌に鰆の切身の入つた汁だの、芋鱘の煮付けなどが載つてゐた。

女中は小脇にお鉢を控へて盆を持ちそへ、

「どうぞお上りやして。お腹がすきましたやろ。」と云つて、茶碗に飯をよそひながら

「えらい御飯が冷うなつてまして、濟みまへん。」といつて、差出す茶碗を手に取つて食べて見ながら、

「いや、これくらゐが丁度いゝ、僕は餘り飯の熱いやつは好かない。」

さういつて、鶴岡はちう〳〵音を立てゝ汁を啜り、箸を働かして空腹にしたゝか詰

め込んだ。そして快く食慾が滿足されてくると、彼は何となしに早く何とかして此處の家へも勘定をしてやらねば濟まないやうな正直な氣持が湧くやうに起つて來るのであつたが、さてその金の分別は差當りつきさうもない。

やがて飯を濟まして、女中が膳を下げていつてしまふと、啣へ楊枝を口の中で弄びながら何處かこれからいつて小遣錢を借りる處はないかと、思ふともなく自然考へはそんな方に向いていつた。錢を貸してくれる者がなければ、奢つてくれるものでもよかつた。奢つて貰ふのは食べる物でもいゝし、女ならば一層御馳走であつた。女といへば、あのやと女はどうしてゐるであらう。彼奴も暫く見ないが、いつそ今晩彼奴を呼んで今日はもう何處へも行くのは止めようかと思つて見たが、ふと又考へ直すと、此處の家へ去年の暮の勘定も拂つてやらないで、やと女を泊め込んだりするといふ譯にもいかない。それに彼はそのやと女にもその前大阪に往く時小遣を五圓借りて、まだそれつきり拂つてやらない。その後一二度招んだけれど、借りた金のことは何ともいはなかつた。

そのやと女は、吉田の大學病院近くの下宿屋や宿屋のある邊に大分集くつてゐるの

であつた。鶴岡は、はじめ、宿屋の女中から雇女が招べるといふことを聞くと、早速招んで來さした。不斷はそこらの珈琲店に女給をしてゐるといふその女は初めて來た時から鶴岡の男らしい、いかつい容貌や、それでゐて案外子供のやうな氣さくな氣合に大分惹きつけられてゐるのであつた。

彼はやゝ暫く、考へるともなくその女のことを思ひ出してゐたが、彼女の顔や調子の何處やらが、以前自分が戀してゐた女にちよつと似てゐるのが興を惹いたのである。それは色の白い、平面の、眼のまはりに少し雀斑のある女で、ハイカラにした頭髪の形、廣い額、殊に強い熱情の籠つた瞳などに一見知識的な女性といふ表情を持つてゐた。そして今の雇女もいくらかさうであるが、昔し戀したその女は女子としては高等普通教育もあり、物の理解力も發達してゐて、何處に出しても一人前の女性として決して耻かしからぬ女でありながら、どこか世間普通の婦人らしい德性といふべき點に缺陥があつた。といつて、金錢で貞操を賣り物にしたらしい形跡もなかつたが、異性に對する情操は極めて放縱であつた。鶴岡の方でもまたそんな自由な女の氣持が氣に入つてゐた。その女とは四五年前まで一年ばかり同棲してゐたこともあつたが、彼の

生活が餘りに不規則で且つ貧乏であるために、終に彼に愛想を盡かしてしまひ、今では大阪あたりにゐて、ある才幹のある工學士と夫婦になつてゐた。一見木強漢の如く見えて、その實熱情家の鶴岡にもさうしたローマンスは、そればかりでもなく、まだまだあるのであつた。わけてその女には最も強い愛着を持つてゐたのであつた。鶴岡も本心を叩けば、今の歳になるまで、決して好んで放浪生活をしてゐるのではなかつたが、落着いた生活をするに好い對手の女が見附からぬので止むを得ずやつぱり漂浪生活を續けてゐる外はなかつた。今まで關係のあつた大抵の女が初めは彼を好いてくれるのであつたが、どんなに好いてゐる女でも、彼が餘りに貧乏で、怠惰漢であるのに、終ひには定つて愛想を盡かして遁げ出してしまつた。

「今日は、あのやとなを久し振りに呼んでやらうか、あの女なら、先に五圓を借りてそのまゝになつてゐても、持つてさへゐれば又貸せといへば五圓や十圓貸さないことはあるまい。」と、さう思つて、そのつもりに心を決めかけたが、ふいと降つて湧いて來たやうに別な妙案が頭に浮んで來た。

「あゝ、さうだつた〳〵！」と、そこに思ひつくと、こんな妙案があつたのに、どう

して今になつてそこに氣が付いたであらうと思つた。今朝から寢床の中で、今の場合ありつたけの智慧を絞つても思ひ出せなかつたことを、やつと飛んだところに氣がついた。

しかし、それは、彼自身には、それが、どうして其處へ氣がついたか意識の表には、その理由を思ひ出してみようともしなかつたけれど、その瞬間の彼の聯想心理が、不知不識にそこへ彼の頭を持つていつたのであつた。彼は今までとちがつて、妙に蘇つたやうな活躍とした心機の轉換を感じた。

田原がもう疾うから京都に來てゐるのを、すつかり忘れてゐた。しかも、彼はすぐそこから加茂川を一つ向うへ越したばかりの處にゐる筈であつた。

田原もやつぱり鶴岡と同じやうに獨身者であつたが、年は鶴岡よりもまだ六つか七つ上であつた。その田原とは、東京にゐても、もう何年になく會つたことがないやうな氣がするが、可なり古くからの知合であつた。東京にゐる時誰からともなく、ちよい〳〵噂に聞いてゐるところによると、田原はもう疾うからこの京都に好い女があつて、それにひどく入れ上げてゐるといふことであつたが、いつ頃此方に來たか、何で

もう一年ぐらゐは、ずつと京都に滯在してゐるらしかつた。田原は、女の事では、これまでもよく噂の種を蒔く人間で、彼の容貌風姿から云つても、又その書く小説の種類――風趣からいつても、田原が昔から崇拜してゐるといふ近松の心中物の主人公のやうな感じがするのであつた。さういふと田原は、突つ轉ばしの、芝居の色男のやうであるが、それでゐて、腕力などは成るほど無さゝうであるが、幾ら年を取つてもいつまでも何處か書生肌の議論家で、話好きで、殊に、そんな近松物にあるやうな、艶物の小説を得意としてゐるに拘らず、以前からなか〳〵政治趣味などのある人間で、鶴岡がまだ學生時分から、早稻田の文學部に籍を置いてゐながら、常に政治經濟や社會主義などに興味を持つて、その方面の色彩の勝つた硬派の人間として通つてゐるにかゝはらず、田原は、會へば、鶴岡などとも相應に調子の合つた談話をするのであつた。それに田原も、若い時鶴岡と同じ學校で學んだことがあるので、時代こそ十年ばかりも違つてゐるが同窓といふ誼もあり、鶴岡の厭味のない、それでめづらしい讀書子であるといふやうな所に田原は夙から價値を置いてゐるのであつた。

けれども一方は軟文學を以て立つてゐるし、一方は社會主義の色彩を持つた硬派の

であるので、彼等の平素は何につけ殆ど互に沒交渉の生活であつた。

が、さういふ譯で、鶴岡は之から田原の處へ訪ねて往つてみようとするには、可なりフレッシュな興味を促されたのであつた。そこへ思ひつくと、彼は早速起ち上がつてトンビを引掛けて二階座敷を下りていつた。そして彼の部屋である裏二階の段梯子を下りて長い廊下をつたひ、帳場脇から玄關口の方へ出て來ながら、鶴岡は誰か宿の者が背後から「ちよつと」といつて、呼びかけはしないであらうかと變に危ぶむやうな氣味の惡い心持がしたが、そうつと何氣なく靜かに疊を踏んで沓脱ぎの處に降り立つと、帳場の横の奥の臺所の方から女中のおかつが彼の出てゆく姿を認めて、

「おでましどつか。」といひながら、玄關に膝を突いて、

「どうぞお早うおかへりやす。」と、何事もなさゝうに送り出した。

彼は庭から閾を外に跨ぐと、もう伸々として深い路地の中から廣い通りへ濶歩して出て來た。

そこは吉田の大學病院前の廣い通りであつた。不斷から餘り人通りのない處で、冬

の最中のもう夕暮前とて、寂然と往交絶えた廣い道路には乾いた砂塵に凍るやうな冷い夕風が動いてゐた。それでも空は好く晴れて、堅く乾燥した大空は淡蒼く何處までも澄み渡つて、骨までも滲み徹るやうな外氣の寒さの中にも、何となく東京では見られぬ靜かに落着いた京都特有の冬の心地がしみ〴〵と味はれるのであつた。鶴岡はさういふ詩人的の感興にはあまり敏感な方ではなかつたが、それでも先刻まで侘しい部屋の中で、薄穢い蒲團に寢爛れてゐたものが、俄に澄み切つた冷い外氣に肌を觸れてみると、何ともいへない氣の晴れたやうな清々しい心地がするので、道を加茂川べりの方に歩いて來ながら、それとなく頭を上げて西河岸の方を見やると、向岸の家並の上の方には、遠く晩靄の彼方に愛宕の山は夕陽を全山に浴びて黒く西北の空にたそがれそめてゐる。山の襞の處には先日來の雪が消え殘つてゐると思はれて、丁度斑牛の背のやうに見えてゐる。彼は何となくうすら寂しいやうな、そして又懐かしいやうな山の姿や色に見惚れながら、なほよく凝乎とそつちを見てゐると、山頂の眞黒な木立の中から、晃々と折々一點の燈火が明滅してゐるのが仄かに望まれた。

「あゝ、あんな處にもこの眞冬の最中に人がゐるのだな。」と、そんなことを一寸思つ

てみたりしながら、彼は加茂川の東岸に添うた道を丸太橋の方へ下つていつた。川の水面から頬を切るやうな冷いつめたい夕風がひそ〳〵と湧いて來た。

「田原がゐるのは東三本木だとこの間新聞の消息で見てゐたから、たしかにあの邊の見當だ。」と思つて、丁度川の眞向うの處を眺めると、そのあたりらしい川ぞひの座敷のそつちこつちに軒を並べて續いた處にもうぽつり〳〵電燈が點つて來た。

やがて丸太橋を渡つて、すこし行つた處の横丁を右に入つて狹い通りを二三町、軒の標札をたづね〳〵往くと、古ぼけた門があつて、それに田原の居る旅館の名前が、小さく出てゐた。その門を入つて敷石をした路地を奥深く入つて行くと、門と同じやうに古ぼけた、薄穢い玄關があつた。鶴岡は、そこまで入つて來て、何だか此處はいつかずつと前に一遍來たことのある家のやうに思はれた。そんなことの記憶を考へ出しながら、

「ごめん。」と訪ふと、すぐ玄關脇のお勝手の方から人の氣配がして、色氣のない小づくりな婦人が出て來た。

田原の在否を訊づねると、

「えゝ、おいでになります。」といふので、鶴岡だといつてくれといつて取次ぎを頼むと、その婦人はそのまゝ玄關から眞すぐに狹い廊下を傳うて奥に入つていつたが、間もなく又出て來て、

「どうぞ、これからずつと奥へお通りやしておくれやす。」といつて、案內をした。

鶴岡はその後に蹤いて、肥つた身體には、やう〳〵通れるやうな薄暗い狹い廊下をみしみしと踏み鳴らしながら、ずつと突き當ると、そこは一寸離れになつた、茶室めいた四疊半の小座敷で、障子を明けて入ると、

「やあ！」と、田原が笑顏で火鉢に凭りかゝりながら、此方を振向いた。

鶴岡は、

「やあ暫く」といつて、無造作に、そこに敷かれた座蒲團の上に坐りながら、ちよつと座敷の中を見廻して、障子の腰のガラスから外の加茂川の方を覗くやうにしながら、

「さすがに君だ。なか〳〵好い處にゐるねえ。」

「いや、格別好い處でもないがね。……しかし、隨分暫くだつたなあ。」と、田原は、それでも懷かしさうに鶴岡の顏をじろ〳〵見守りながらいふのであつた。

「君とは何時逢つて會はないかなあ。」と、彼は小頸を傾けるやうにして、

「いつ會つて逢はないか、あんまり長く會はないので、忘れてしまつた。」と考へるやうにいふ。

鶴岡は、そんなことは深くも氣にも留めぬといふやうに、

「さあ、いつ會つたか。隨分長く會はない。」

「君は何時此方に來たんだ？」

「去年の十一月から來てゐる。」

田原はちよつと驚いたやうな顏をしながら、

「去年の十一月から……何をしてゐるんだ？」

「雜誌の『自由』の用事で來てゐるんだ。去年の十一月の初めに京都大學の教授に新年物の原稿を書いてもらふ爲に出張したんだが、その方の用はもう疾くに濟んだんだけれど、それつきりずつと東京へ歸らないでゐるんだ。」と、終ひの方を苦笑するやうにしていふ。

田原もそれにつれて笑ひながら、

「相變らず、ずぼつてゐるわけだな。しかし雜誌社の用では、『改造』あたりでも、何時も此方に一人ぐらゐ出張員を常置してゐるやうだから、その社でも一人京都に置いといてもいゝな。」

田原が調子を合はしたやうにいふと、鶴岡も、

「うむ、さうなんだ。僕もそのつもりで初めはやつて來たんだが、なに、僕の事だから怠けてばかりゐるんで社の方でも、きつと困つてゐるだらうと思つてゐるんだ。」

「そいつはいけないなあ。……大學敎授の處へ原稿を賴みに行くくらゐ譯のない事ぢやないか、少し本氣になつて原稿を取つてやつたらいゝだらう。」

「うむ、それは、いくら怠けてゐるといつても一日に一度はきつと誰かの處へ行くさ。今日も今一寸いつて來たところなのだ。」鶴岡は、自分の氣が咎めてゐるので、往きもせぬのに、いつたやうなことを話した。

「さうか。ぢや、君も暫く京都に居て此方で遊ぶさ。」

「うむ、そのつもりでゐるんだ。」

「そして宿は何處だ。」

「宿はすぐそこだ。非常に近いんだ。」
「すぐ其處つて、どこ？」
鶴岡は障子の腰ガラスから川向うの方をさし覗くやうにしながら、
「丁度この眞向うあたりの處になるだらう。大學病院の前に宿屋が四五軒あるだらう、あそこだ。」
「あゝ、ぢや、此處からは橋を一つ渡るだけだ。」さう云つて田原は、何かしらひどく懷かしさうに又つく〴〵と鶴岡の顏を見守つた。
鶴岡は、又しても障子の腰ガラスから川原の方を覗くやうにしながら頻りに、
「好い處だなあ、こゝは。」といつてゐたが、後には立ち上がつて障子を開いて狹い廻り緣に出て向うの方をあつち此方見渡してゐた。田原も鶴岡に並んで緣の手摺りに凭れて立つた。丁度今が日の入り際と思はれて川原から向岸の家並、その家並の彼方に遠く連互してゐる東山一帶、南禪寺の山から如意嶽、それから左の方にくつきりと浮き出たやうに鮮かな姿を見せてゐる比叡山などが茜色に染められて靜かにしづかに暮れかけてゐる。殊に比叡の際だつて秀でた形と美しく澄んだ色とには、不斷あまり、

そんな自然の美趣などに氣を惹かれない鶴岡も稍暫くうつとりと眼を奪はれてゐた。
彼は無言のまゝ緣に突立つてゐたが、
「うむ！」と感心したやうに一つ肯づいて、「好い景色だなあ。」と獨り言をいつて、又もとの座に戻つた。そして、田原の方を向いて、
「君は隨分長いなあ。何時から京都に來てゐるんだつたかな。」
「僕は去年の四月からだ。」
「そして、去年の四月から此處にずつとゐるの？」
「いや、さうでもない。此處にはつい去年の、さうだなあ、十一月の末からゐるんだ。」
田原は陽氣らしうさう答へたが、二た月ばかりの日月の推移を思つただけでも、すぐその十一月の末から、ずつと現在眼前に起つてゐる悲痛な靈の問題に傷き衰へた胸の痛みに堪へかねて、そうつとそれを人に押隱さうとするやうな痛ましい、沈んだ心持になつて來るのであつた。
　鶴岡は、田原の、そんな心の奥の方のことには氣が付かなかつたが、前から田原のはしやいだやうなところがあるかと思ふと、又ひどく沈み込んだ氣持のする人間であ

ることは知つてゐるので、――尤も、それは彼の健康にも可なり關係を持つてゐたが、――今田原が口だけではいかにも屈托などのなささうな調子で物をいひながら、その笑ふ顏にも何だか曇りがかゝつてゐるのは、眼に見えた。
「何か長い物でも書いてゐるの？」鶴岡は訊いてみた。
田原はやつぱり笑顏のまゝ、
「いや、何にも書いてやしない。」
「そりや羨ましいなあ。何にも仕事をしないでこんな好い處に居つて遊んでゐるのはいゝぢやないか。」
「うむ。」と田原は口の中でいつて、そのまゝ沈み切つたやうに暫く無言のまゝでゐたが、强ひて威勢を付けるやうにしながら、
「格別好くもないがね。……たゞ、しかし、じつとして獨りで考へたり思つたりしてゐるのは東京にゐるよりも京都にゐて、こんな處にかうしてゐる方がいゝかも知れない。」彼は何の事やら要領を得ないやうなことを、それでも、はつきりした言葉の調子でいふのであつた。

「うむ、それがいゝのさ。」と、鶴岡も輕く調子を合はしたが、彼は又彼で、今自分の泊つてゐる荒凉とした殺風景の高等下宿に比べて、田原がそんな氣の晴れた、數寄な茶座敷のやうな處に落着いてゐるのを一寸羨ましく思つたのである。

田原は、丁度重い石を縛り附けられて深い淵の底にでも沈んでゐるやうな現在の心持を、强ひて浮立たすやうに自ら努めながら、

「こゝはそんなに好い處でもないさ。」

といつて、まだ今のやうに失望の淵に沈まぬ以前よくいつてゐた、この古都の溫かく柔かな樂しみの場所を心の中で數へてゐた。それは鶴岡などの大抵知つてゐさうもない處ばかりであつた。

「まだあるさ、こんな處よりも好い處は幾らもある。」といつて、顏を上げて微笑しながら又鶴岡の顏を見た。

鶴岡は、そんな好い處があるなら、何處か、その好い處へ行きたいやうな氣持で、

「君は京都の好い處は大抵みんな知つてゐるだらう。」

「そんなことはない。知らぬ處の方が多いが、しかし好い處も相應には知つてゐる。」

田原は、東京から來た人間の必ず遊ばねばならぬことになつてゐるこの古く美しい都會に來てゐて、互に久し振りの鶴岡に訪ねてこられたのであつてみれば、出來ることなら、丁度時間もこれから、そろ／＼遊びを唆る氣分になる時刻なので、暫く肩の張らぬ、雜談をしたうへで、

「どつかへ行つてみようか。」と樂しく誘ひ出すところなのだが、今の彼にはとてもそんな金も持つてゐなかつたし、又そんな處へ行つてみようとする氣にもなれないのであつた。けれども、鶴岡に、うつかり好い處を知つてゐるといつたので、そんな好い處を知つてゐるのに、久し振りにめづらしく京都の土地で遭ひながら、何處へも伴れてゆかぬのは吝だと思はれるのが氣を咎めた。田原はそれで一層浮かぬ顏をしてゐた。

鶴岡の方でも、田原の處へ往つたら、あの人間のことだから餘裕のある錢などは、まあ大抵持つてゐないかも知れぬが、何しろ京都の土地は隨分長いのだから、たとひ懷中に錢の持合はせなどなくとも、何處か外へ出さへすれば愉快な處へ伴れていつてくれるだらうぐらゐには思つて、甘い唾を呑込む樣な氣で訪ねて來たのであつた。然るに期待は妙に裏切られて、田原は何だか折々ひどく沈んで氣の晴れぬことでもある

らしい。それで自分の方から、
「どうです、何處かへ出てみようぢやないか。」
と、誘ひをかけてみた。それは、しかし、もう田原には面白い處へ伴れていつてもらふといふ考へではなく、自分の常に行きつけてゐる、どつか京極邊の酒場へでもいつてみようといふ氣であつた。
鶴岡の方からさういはれると、田原は、ちよつと慌てたやうな、當惑した調子になつて、
「うむ、僕こそ、久し振りに遭つたのだから何處か面白い處へ案內したいんだが、一寸今具合がわるいんだ。」と微笑しながらいつた。
すると鶴岡は、氣輕な調子で、
「なに、そんなことはどうでもいゝさ。それより何處かへ出てみようぢやないか。」強ひて誘ふやうにいふ。
「うむ、……折角いつてくれるのは有難いが、今日はよさうぢやないか。それよりも久し振りに會つたのだから、今晚はこゝで飯を食つて、ゆつくり話をしようよ。」田原

はやさしくいふ。

鶴岡とても懷中が裕かな譯でもないので、

「うむ、それでもいゝ。」といつた。

田原は、それから廊下の方に立つていつて、遠い勝手の方まで響くやうに、ぱちぱち手を鳴らして宿の者を呼び、客膳を命じた。自分では、殊にこの頃一滴もやらないのだが、鶴岡は好きと知つてゐるので酒もさういつた。

そして、又元の座に戻つてくると今度は氣を換へたやうに、鶴岡の方を向いて、

「それで君は、東京の自由社の方から月々金でももらつてやつてゐるのか。」何にも鶴岡の事情を知らない彼はさういつて訊ねた。

すると鶴岡は、そんなことを訊かれても格別困つた顏もせず、

「うむ……まあさういふ約束で、東京を立つ時には出て來たのだが、なに、僕が怠けてゐるから、この頃ぢや金も送つて寄越さない。」彼は苦笑しながら强ひて元氣づいたやうにいつた。

田原も笑ひながら、

「僕も隨分怠ける方だが、君は又僕の上をいつてゐるからな。少し何か書いたら好いぢやないか。此方に一人でゐると、書かうと思へば書けるよ。」
「ところが僕はどうしても書く氣になれない。書いて金を取るといふことが、どういふものか出來ない。」鶴岡は心から、とても物を書くといふ氣のないやうにいふ。
「だつて君、東京から金も送つて寄越さないで、原稿も書かないし、どうしてやつてゐる？」
田原が眞面目な表情をして不思議さうにさういふと、鶴岡は、
「そんなことは何でもないさ。金なんぞ持つてゐなくつても、ちつとも困りやしない。僕は金に困つたことなどはこれまで一度もありやしない。」といつて、それから、不斷東京にゐる時でも、又京都大阪の方に來てからでも、自分で持つてゐる金のなくなつた時には方々知合ひをたづねて借りて歩いてゐることなどを滔々と語つた。
「僕は自分で持つてゐる金だつて、決してこれは自分の金だと思つたことは一度だつてない。それと同じやうに人の金だつてその人間が決して私有すべきものではないと信じてゐる。こゝに今金の必要があつて、金の持ち合せのない者がゐるとする。そし

て、ほかの人間が使ひ途のないのに金を餘計に持つてゐるとした場合に、その金を、金の必要に迫つてゐる人間が借りて使ふのは何等の不合理でもない。」
鶴岡は極めて簡單明瞭な事理のやうに云ふのである。
田原はそれを聞いて破顔しながら、
「さう考へてゐれば譯はないがね。…併し持つてゐる對手は此方で思ふやうにその金を貸してくれなかつた場合に、無理に奪ひ取るといふことも出來ないだらう。」
「うむ、それはいけない。そんな時にはよく事情を話して向うの承諾を得て金を借りるんだ。そして此方にその金が出來た時には返せばいゝ。返す金が出來なければ、出來ないんだから出來ないものは、どうしたつて仕様がありやしないさ。」彼は其處に、一點の疑ひを容れる餘地のないかのやうにいふ。
田原は、
「はゝゝゝ。」と大きな聲で笑つた。
そこへ廊下からお膳を運び込んだ。
田原は心の中で、鶴岡が、暫く會はなかつた間に、妙な荒んだやうな氣持になつて

ゐるのを情なく感じながら、――尤もそれは、鶴岡などの如き思想的傾向の人間にとつては、近ごろの世界的思潮の背景も自ら手傳つて、勢ひさういふ風になつて來るの、も止むを得ぬことであつたかも知れぬが、それを餘りに卑近な實行に移して、自分一己の放縱の欲望を滿足せしむる手段に是認を與へようとするのは困つたものだと思つた。――彼が以前からの思想の傾向として、その方面の書籍を耽讀したり、又、一家の說としてそんなことを主張するのは、それに贊成すると、しないに拘らず立派なことで、田原が、彼自身とは大分思想的傾向を異にしてゐると知りながら、彼に對して夙に好感と、幾分の敬意とを持してゐたのも畢竟それであつた。然るに今の鶴岡の、自然と外に露れてゐる樣子なり、言ふことなどに、段々思想的の高尙といふ感じが失はれて、たゞその日〳〵の飮食や漁色の快樂を貪る爲の口實に用ゐられてゐるのが苦苦しくも思はれた。田原はそれでも、彼自身にも隨分いろんな體驗を持つてゐる人間なので、それがために、膠着した世間並の常識道德の立場から鶴岡を卑むとか、又は體好く遠ざけるとかいふやうな心には少しもならなかつた。

やがて運び込まれた膳は二人の前に行儀よく並べられ、酒もすぐ後から持つて來

た。そして持つて來る物が殘りなく運ばれると、宿の者は背後の障子際の方へちよつと、あと退りしながら、此方を向いて、

「えらい濟みまへんどけど、ついてゐてお給仕しますのがほんまどすけど、一寸あちらが急がしうして居りますよつて、どうぞご自由にご緩りお上がりやしとくれやす。……御用がござりましたら、どうぞお手をお鳴らしやしとくれやす。」

「えゝ、もう構ひませんから、打棄つといて下さい。」

宿の者がさういつて置いて退つてゆくと、田原は、

「さあ、一つ熱いところを」

といつて、德利を取上げて鶴岡に差した。

鶴岡は酒盃を取つてそれを受け、甘さうに一と口きゆつと飮みながら、

「うむ、この酒もなか〳〵好い酒だ。」と口の中で味しめるやうにいつて、「東京から來て京阪の酒を飮むと、とてももう東京の酒は不味くつて飮む氣になれないなあ。」

「あゝ酒は好いねえ。僕等のやうな下戸でさへ、しみ〴〵うまいと思ふよ。」

田原はそんなことをいつて鶴岡の對手をしながら、風雅な陶物の水こん爐に掛けた

鍋の中で、ぐつ〳〵音を立てゝうまさうに煮えてきた雞の肉や靑い物を箸の先で鹽梅してゐた。それは見ただけでもいかにも柔かさうな色をした肉であつた。淸らかな芹から何ともいへない食慾をそゝる香ばしい匂ひが溫かい湯氣とともに、もや〳〵と立ち騰つた。

「さあ、これも煮えてきた。やりたまへ。」

「うむ。」と、鶴岡はもう、すつかり好い氣持になつて、手酌でちびり〳〵腰を据ゑて飮みはじめた。

鶴岡はやがて四五杯手酌で酒盃を飮み乾した時分、

「どうだ？　此處は女は招べないのか。」といつて、訊いた。

「うむ、此處は招べないのだ。」

「さうかねえ。そりや不自由だなあ。……何だか招べさうな處だがなあ。」

「うむ、招べさうな處でも此家は招べないのだ。」

「でもこの邊に招べる處があるのだらう。旅館で女が招べるのは京都の好い所だ。東京などはそこになると駄目だよ。……木屋町といふのは此處から遠いのか」

「あゝ、木屋町といふのは、こゝから、もう一寸下の方だ。あそこは女を招ぶのが寧ろ本業で、旅館といふのは附けたりのやうなものだ。」
「君は遊ぶ時には大抵何處へ行くんだ。祇園か。」
「さうだなあ。まあ祇園だなあ。」
田原はさり氣なくさういつたが、その祇園の女の爲に、今差當つて、實に死病よりもひどい苦患を甞めつゝある最中なのであつた。
鶴岡は熱い方のお銚子を取つて波々と注ぎながら、
「宮川町の方へは?……あんまり行かないか。」
田原はもう、ぽつ〳〵對手になるのが、懶さうな調子になつて、
「うむ、彼處へは、こんなに長く京都にゐても殆どいつたことがないなあ。」
「さうかねえ。宮川町は安いなあ。僕驚いたよ。五圓持つて十二時頃から行くと、好い加減酒も飲ましてくれて、そのうへ實に歡待してくれるんだ。」
「さうかねえ。」
「こゝらは藝者でない奴が招べさうなもんだがなあ。」鶴岡は見る見る瑞々と熟れてく

る顔に無限の野趣を漲らしながらいふのであつた。
　田原は、故意と呑み込めぬといふ顔をしながら、
「藝者でない奴とは何だ？」と、とぼけて見せた。
「やとなさ。」
「はゝあん、それか。」と田原は笑つた。
「この邊にはそれが多いんだ。」
「さうかねえ。或はさうかも知れないが、僕は遂に聞いたことがない。」
「きいて見たまへ。きつと招べるよ。そこは、僕の家の方が便利だな。」
「君、宿へ招ぶのか。」
「うむ時々招ぶ。五圓で宵から來てあくる日の一寸晝頃まで遊んでゐる。その女はすぐ近い處の珈琲店にゐる女だが、そんな奴を知つてゐると、時々珈琲店などへ行つた時にも優待してくれていゝよ。」
　田原は、鶴岡のそんな話に大分うだつて來たので、ぐつ〳〵煮え過ぎて來た鳥鍋の中を氣にしながら、

「どうだ君、酒も酒だが少しこつちの方をやらないか。僕は失敬してお先へ飯にするぞ。」

といつて、さつと飯を食ひはじめた。

「あゝ、どうぞやつてくれたまへ。僕は一人でゆつくりやるから。」と、鶴岡は自分でぱち〳〵と手を打ち鳴らして宿の者を呼び、

「お銚子を。……熱くして。」と四本目の銚子からは自分で命令した。

初めのうちは田原も辛抱して、鶴岡のいふことに、いゝ加減の合槌を打ちながら主人役をつとめて、食べる物の世話を燒いたりなどしてゐたが仕舞には氣疲れがしたやうになつて、彼は無暗と續けさまに出て來る生欠伸をしながら、

「失敬だが、君どうぞ勝手に好きなほどやつてくれたまへ。」

といつて、佃煮のやうに煮詰まつた鳥鍋の方を氣にして、いゝ〳〵わりしたの無くなつてしまつたあとは鐵瓶の湯を差し〳〵、

「鳥をもつとさういはうか。」と、さういふと、鶴岡は、

「いや、もう肴はこれで澤山だ。……」と、水こん爐の脇に置いてある膳部の方をちよつと眺めた。

高脚の膳の上には黒ぬりのお椀だの、白醤油で煮た柔かさうな、八頭や、赤いうまい色をした人蔘などを盛つた皿が載つてゐた。

「食ひ物も僕の處などよりずつと好い。此家は幾らで泊めてくれる。」

鶴岡は眞赤に火照つて來た顏に、横から見てゐると妙に意地の惡さうに見える近視眼を眼鏡の下できよろつかせながら、倍々頻繁に徳利の首ねつこを握つては、注いでは飲み乾してゐた。

「あゝ、小便がしたくなつた。君此處の便所は何處だ？」

田原はもう先刻から肱枕をして置炬燵の中に横になつてゐたが、

「あツ、便所かね。こゝの便所は遠いんだ。そこの廊下をずつと玄關の方に出ていつて、構はず、左の方にゆくと、すぐ左側にある。汚い便所だよ。」

田原は片肱突いて起き上りながら教へた。

「あゝさうか。わかつた。」といひつゝ鶴岡は大趺坐をしてゐた體を、重さうにやつとこさと持ち上げて、よろ〳〵とよろけさうにしながら、どしん〳〵と、根太の朽ちた廊下の板敷を踏み鳴らして便所に立つていつた。

便所から戻つて來て、又どかりと、もとの座蒲團の上に尻を落すと、

「これをみんな入れつちまへ。」と、ひとり語のやうにいつて、大皿に殘つてゐた芹だの、青葱だの、麩などを皿から箸で鍋の中へ掻き入れた。鳥鍋の中は二切れ三きれ、食べのこつた鷄の肉が、じい〳〵音を立てゝ黒く焦げついてゐた。

やがて五本目か六本目の德利が輕くなつた時分に、もうすつかりうで章魚のやうな好い色に染まつた鶴岡は、頻りに鼻の頭や額のまはりの汗を拭いて、

「あゝツ、暑くつて耐らない。どこか其處らを少し開けても君寒くないか。すこしあけよう。」

と、いつて、手を伸ばして緣側の障子を一枚押した。そして、

「あゝ又小便が出さうになつた。」といつて、立ち上がつた。

田原は暖い炬燵に腰までずり込んで肱枕に好い氣持になつてゐたが、ついと又頭を

擡げて、
「うむ君、小便なら、そこの縁側からやれ。僕は毎晩そこからやるんだ。」といつて、頭で指示した。
「むゝさうか。」と、鶴岡は、狭い縁側の雨戸を一枚繰つた。夜ふけた加茂の川面から氷のやうな冷い夜氣が颯と流れ込んだ。
「あゝ好い心持だ。」彼はさも快さゝうに火照つた顏を夜氣に吹かれながら、手摺の上から、じゆう〳〵水のうへに放尿した。
川に架け出した縁側のすぐ下は加茂の水を堰き分けた淸い支流が潺湲たる瀨音を立てながら一刻の小止みもなく流れ落ちてゆくのである。鶴岡の放つ長い尿の音がその水の上に丁度雨の降る音のやうに暫く聽えてゐた。田原は肘枕の耳を立てゝ、それを聽くともなく、じつと外の物音に心を澄ましてゐると、鶴岡の用を足すのがをはるとともに、雨戸の外は、又もとの如く靜かになつて、座敷の下を流れ落ちてゆく潺流の音のみが、つぶやくやうに枕にひゞくほかは、そこから少し下流の方の丸太橋を軋る電車の音が夜の靜けさを破るのであつた。さうしてゐるところへ、思ひがけなく向う

の河原の方で暗に喰入るやうな千鳥の啼く聲が、ぴい〳〵、ぴい〳〵ッと響きわたつた。

「あゝ、いゝ氣持だ。」鶴岡は又雨戸を鎖して座敷の中に入り、もう靑いものばかりになつた鍋の中を箸で散々につゝいて、たうとう一莖の葱も殘さぬやうに綺麗に浚へてしまつた。そして最後の德利もきれいに傾け盡すと、今度は自分の箸を兩手に廣く持つて鍋の耳に掛けて、それを廣蓋の上に取りおろし、焙じ茶の入つた大きな土瓶を引寄せて一寸持ち上げて見て、

「もう湯がないな。」とひとり言のやうにいつて、そこに趺坐をかいたまゝ、ぱち〳〵と、けたゝましく手を打ち鳴らした。しかし、そこから宿の者の居る臺所までは幾つも部屋を隔てゝゐるので、とても向うまでは聞えなかつた。もう夜も十一時を過ぎてゐた。

田原は覺めてゐても、そうつと微睡(うとうと)となつた風を裝つてゐたが、ふと、手を打つ物音に氣が付いた恰好をして、

「あツ、お茶か……さあ、もう隨分遲いから、あちらでも沸いてゐるかな。君、あち

らの、もつと廊下の方に出て手を叩かないと聞えないよ。」

「さうか。」と鶴岡は又立ち上がつて、廊下に出て宿の者を呼び、土瓶に湯を差して持つて來させ、それを焜爐に掛けて、ぐた〳〵出濫らしながら、お膳を引寄せて此度は膳の上の物に箸を持つていつた。そして飯櫃を小脇に取つて手盛りで、さもうまさうにぱく〳〵飯を食ひはじめた。黑塗りのお椀の蓋をとつて、氷水の樣に冷えきつた汁を、ちゆう〳〵音を立てゝ啜つた。そしてお茶もすつかり平げてしまふと、今度は又香ばしいにほひを立てゝ沸えくり返つてゐる番茶を注いで、ふう〳〵吹きながらお茶漬にして、それから一番最後に殘つた、小皿の中の、纖細く長めの角に切つて、行儀よく並べた香の物を、こり〳〵いゝ齒音をさせて嚙みながら、

「君、漬物は東京に限ると思つてゐたが京阪の香々にも、なか〳〵うまいのがあるねえ。これもそんなにまづかあないが、何時か大阪の宗右衞門町の何とかいつた料理屋で食べた香々は、やつぱりこんなやつだつたが、それは實にうまかつた。」

彼はそこまで來てもまだ食ひ物のことをいひながら、やつと箸を置いた。さうして鱈腹食つたあとの鶴岡は、御馳走であつたといふのも大儀さうに、顏の光澤を一層艶

艶さして、生氣を增してきた。

口腹の慾が滿たされたあとの鶴岡は、かのモウパツサンの短篇小說にある漂泊者のやうに、その次の、もつと刺戟的の快樂に渴してゐながら、それが今意の如くたちどころに充たされ得ないといつたやうな、物足りない顏をして、食ひ疲れたところもあつて、箸を置いた後は暫く無言のまゝでゐた。

田原は、この宿が、同じ旅館とはいひながら、只管金儲けを目當てに營業をしてゐるのではなく、維新前まだ此方に皇居のあつた當時からの、古い昔馴染の懇意先を定客にして、女中も使はず、幾らか病身の女主人が遊び仕事に營んでゐるといふやうな事情を知つてゐるので、もう先刻から、鶴岡が餘りに無遠慮に何時までも醉ひ喰つてゐるのを氣にして、これでは後を片づけるのに、さぞ迷惑することであらうと察してゐた。

その宿は、家屋などももう隨分老い朽ちて、いかにも古い時代の京都を偲ばすやうな因循な氣持に覆ひ被された家であつたが、京都の市中の目拔きの處々に地所や家作などを所有して、至つて內福な、物堅い一點張りの家であつた。

田原はさすがに、鶴岡の食ひ意地の汚さに鮮からず辟易してゐたのであるが、それでも、宿の迷惑などゝいふことに一向察しの利かなささうな彼に向つて、そんなことを云ふと、たゞ一途に、自分が、餘計に飲食をさすのを吝んでいふかと誤解されるのを憚つて、消防夫も手を著けかねた火事を、自然に火力が衰へるのを、手を束ねて見てゐるといつたやうに、田原は、打棄らかして、鶴岡が腹一杯飽滿するまで待つてゐた。

やがて田原は、ほつと氣の付いたやうに、肱枕の頭を擡げて、

「おう、もう濟んだのか。ぢや、これを一つ引かさう。」

といつて炬燵から起き出で、廊下の處から、又ぱち〳〵手を打ち鳴した。それがお勝手の方に聞えたか、どうであつたか、そのまゝ誰もやつて來なかつた。ものゝ小一時間も經つてもう一遍廊下の先の方まで出て行つて、ぱち〳〵手を鳴らすと、此度は遠くの方から「へえゝ」と、寢呆けたやうな微かな返事がして、やがて、宿の者が、半分微睡んでゐるやうな眼を、しを〳〵させて出て來た。

「つい、ちよつと假寢をしてゐまして、えらい濟まんことどした。これ、もう引きま

してよろしいおすか。」
「え〻どうぞ。大變遲くまで、まことにお氣の毒さまです。」
田原はさういつて、ちよつと鶴岡の方を見たが、彼は飽くまでも平然として、あたりまへの樣な顏をして、岩のやうな大趺坐をかいたま〻小微動もしさうにない。田原はもう、いつもならば疾くに寢る時間なのであるが、
「今座敷を片付けに來た時に寢支度をしてもらつて置かなければ、家の者は、これを引いて去つてしまつたら、もうそれから寢てしまふであらう。鶴岡が、時間の過ぎてゐるのを、故意にかどうか、また宵の口かなんぞのやうに、すこしも氣の付かぬ風をしてゐるのは、このま〻、とてもの序に、鱈腹飮食した揚句、まだそのうへに、此處へ寢て行かうといふ、ずるい料簡だな、泊めてやらうか、どうしたものであらうか。」
と心の中で思つてゐた。
宿の者は、それから、遠い廊下を、冷氣の骨身にまで滲み徹るやうな夜更に三四度も往復りして、食べ荒した膳や椀などをだん〳〵持ち運んでゐたが、田原は心の中で、
「散ざぱら飮んだり食つたりしたうへに、まだこの上に好い顏をしてゐたら、どこま

で押しが強いかわからない。」と思ひながら、尚ほそうつと、それとなく鶴岡の様子を見ながら、考へてゐた。

でも鶴岡も、さすがに、後には餘程思案して來たらしく、夜の闌けるとともに、いくらか酒の醉ひも醒めてくるに伴れて、もう女を抱きたいなどゝいふ贅澤な欲望は、一仕切り火焔を上げて燃えてゐた炭火が、次第に小さく消えてゆくと同じやうに微かなものになつて來て、それよりも今晩たゞ寢るだけでも、何處へ寢ようかといふことの方が焦眉の急を告げて來た。それで、稍しばらく悄然として沈吟してゐたが、さうかと云つて、散々田原に御馳走になつたうへに――尤も高が夕飯一食くらゐの御馳走には、誰にも振舞はれつけてゐるので、格別そのために氣の毒だとも、又恩に著てもゐなかつたが――田原の方から「泊つてゆけ。」といひ出さないのに、自分から「とめてくれ」といふことが、何うしても、いひ出せなかつた。そして、じつと座敷の中から、戸外の深夜の物音や、すこし川下の丸太橋の上を軋る電車の響にきゝ耳をたてゝひとり言のやうに、

「もう大分遲いな。」と、いつてゐるかと思ふと、「うむ、まだ電車があるにはある。」と

いつて居る。

田原の方では、宿の者が三四遍廊下を往つたり來たりしてゐるうちに、座敷も殆ど片づいてしまつたので、思ひ切つて鶴岡を泊めてやらうか、やらぬか、泊めるにすれば、もう今のうちに、そのことをいつて、夜具の用意をさせて置かねばならぬ。斷の一字を右にしようか左にすべきか、最後の決定は刻むやうに迫つて來た。

一體田原が、たつた一晩くらゐ、しかも久振に旅先の京都でめぐり會つた鶴岡を、自分の宿に泊めようか、とめまいかといつて迷ふほどのことでもなかつたが、その晩一晩泊めたが最後、それを機會にこれから先も必ず時々泊りに押掛けて來るのは、その晩の鶴岡の押しの强い、そして零落れた樣子に明かに見えてゐた。田原が決斷に迷つたのはそれも一つの理由であつたが、彼自身にとつて、まだもつとそれよりも重大なる理由は、彼が今眼前に差迫つて、死ぬほど頭を痛めてゐる彼の女の搠著であつた。田原は、その事について、種々の行動を取るには、誰にも前からの知人に會はぬことを何よりも欲してゐた。そして、その爲にいかなる苦みを嘗めようとも、それを凝乎と自分の獨りの胸に溜めて、暗い隱忍の底から、首尾よく明るみの方へ出られるか、

それとも無謀短慮な人間のする、一層暗黒な方に向つて進むべきか。どちらにしても何人にも妨げられず、その薄暗い宿屋の一室に閉籠つて、たゞ孤り寂しく靜かに考へ沈んでゐたかつたのだ。

今晩泊める、とめないに拘らず、これに味をしめて、きつと、今後も鶴岡がうるさく遣つてくるにちがひない。

「飛んだ奴に隱れ場所を嗅ぎ出されたものだ。」と、田原は、腹の中で歎息してゐた。

二人は兩方で、思ひおもひの考へに沈みながら、又暫く沈默のうちに過したが、鶴岡は何と思つたか、ふと口を切つて、沈吟するやうに、

「もう餘ぽど遲いなあ。僕の家ぢやもう寢てしまつたらうな。」と獨り言をいつた。

田原は、それを機會に炬燵から起上つて火鉢の傍に來て坐りながら、

「うゝ遲い。しかし、寢てゐても、歸つて起せば起きて開けてくれるだらう。」

「あゝ、そりや開けてくれないことはないが。あんまり遲く歸つて叩き起すのは氣の毒だから……こんなに遲くなつて歸つたことは今までに一度もないんだ。そんな時には大抵宮川町へいつて泊るから。」

田原は、鶴岡に、宿の者を氣の毒に思つたりするやうな、そんな殊勝な心掛けがあるかどうだかと、心の内では可笑さを堪へながら、默つてゐると、鶴岡はどう思つたか、

「どうだ君、これから宮川町へ行く勇氣はないか。」といふ。

それをきくと、田原は、呆れたやうな眼をして、對手の顏をちよつと見直すやうにしながら、破顏して、

「これから宮川町へ。」

「さうさ。」鶴岡は定つたことよといふやうに云ふ。

「よさうよ。……島村抱月のやうに風邪でも引いて死ぬとつまらないから。」

田原にも鶴岡にも、同窓の先輩であつた抱月は、去年の十一月の五日にスペイン風邪が原因で死んだのであつた。そして、つい三四日前に彼の愛妾であつた松井須磨子が又彼の後を慕うて藝術座の樂屋裏で縊死を遂げた。その晩も、久しぶりに出會つた彼等の話題の中には無論そんなことも語られたのであつた。

「これから宮川町へ往くたつて、君、金を持つてゐるのかい?」

田原は無論いく氣は少しもなかつたが、さういつて戯談のやうに問ふてみた。
「うむ、金なんぞは持つてゐなくつても構はない。いつもいつてゐる家だから。」
鶴岡は大丈夫信用のあるらしいことを云つてゐたが、田原の推量では、正直に、「今晩こゝへ泊めてくれ。」といふことが何としても咽喉に引掛つたやうで、いひ切れなかつたから、それでそんな體の好いことをいつて、一寸田原に氣を持たせたのであらうと思つた。
さうしてゐるところへ、宿の者は、もうすつかり下げてゆく物を下げてしまつて、障子際に膝まづき、
「あの、お蒲團の方は、どない致しまへう。お客様は今晩お泊りますんでござりますやろか。」
宿の者が、鶴岡の居る處でさういひ出したのであつてみれば、田原も、まさか、それをいや泊らないのだとも云ひかねたし、それに、このくらゐ、容易に泊めてやりさうにないことを鶴岡に見せて置いてやれば、今晩一晩くらゐ泊めたつて、今後もさうのめ／＼と轉げ込む氣づかひはあるまいと、最後の思案を定め、

「えゝ、どうぞ。どうも遲くなつて濟みませんですが、おねがひします。」と、さう云つて、田原は又鶴岡の方に向ひ、
「君、今晚此處に泊つて、明日の朝ゆきたまへ。」
田原がはじめてさういふと、鶴岡は、それでやつと救はれたやうに、
「あゝ。」と、わざとらしく平氣な顏をしていつたが、彼がほつと安心したのがその色に表れた。
そこへ泊ることに定まると、鶴岡は、とにかく今晚だけは大平樂に足を踏みのばして寢ることが出來るので、又俄かに彈んだやうな愉快な氣持になつて、口も自づと輕くなつた。
田原も、さすがに押しの强い鶴岡が、初め盛んに飮んだり食つたりしてゐた時分のふてぶてしい元氣に似ず、たつた一夜の宿のためにこんなにまで悄氣たかと思ふと、又何となく急に彼が可哀さうなやうな氣の毒な氣持が湧いて來た。鶴岡はやつぱり十四五年前はじめて知つた時分の正直で質樸な鶴岡であると思つた。
「それで君はその主義に從つて今借金をしてやつてゐるのか。」

田原は先刻の、鶴岡の借金生活のことを又思ひ出して訊いてみた。すると鶴岡は、それをさも〳〵成功せる渡世術であるかのやうに、

「あゝ、ずつと借金でやつてゐる。僕は東京にゐたつてさうだ。」

「しかし京阪(こちら)ではさう自由が利くまい。」

「いゝや。」と、頭振(かぶ)りをふつて「決してさうでない。京阪の方が東京より借金をするには遙かに都合がいゝ。東京では知つた人間だからといつて、誰にでも貸してくれるといふ譯にはゆかないが、京阪では、知つた人間であつたら大抵いひ出すと成功する。」

田原は笑ひながら解つたといふやうにうなづいて、

「うむ〳〵。やつぱり東京から來てゐるとねえ……」

「……さうだらう。東京から來てゐる人間はお互に東京の人間であるといふ關係で貸してくれるし、京阪の人間は又吾々東京の人間だと思つてゐるから……」

鶴岡は、何と巧い骨(こつ)を捉(つか)んでゐるだらうぢやないかと云つたやうに田原の方を見ていふのであつた。

「ぢや隨分借りたらう。」

「あゝ隨分借りたなあ。……さうだなあ。一ケ月にどうしたつて二百圓は必ず要るから、それだけどうしたつて借りてやるよりほかに仕方がないもの。」

彼は「あそこであれだけ。彼處であれだけ。」と、ひとり言をいつて指を折つてみながら、借りた金と貸してもらつた人間の名などを胸の中で勘定してみたりしてゐた。

それから、何處か三條の寺町邊のある商店の主人が京都の人間には珍しい、過激な新思想家であつて、その男が自分達同志の者だけで今ある雜誌を發行してゐる。それで彼にも大いに援助してくれといつてゐるから、そこへ殆ど毎日遊びかたがた出掛けていつて、此方は顧問といふ名目で相談對手になつてやつてゐる。その人間は地所や家作なども相應に持つてゐて金の融通も利くし、よく譯の解つた人間で、それから時時借りてゐるといふやうなことだの、また大阪のある新聞社の編輯長にも大分借りたし、奈良の方にゐる、ある金持の畫家の家へもこの正月からずつと一週間ばかり泊り込んでゐて、そこではひどく歡待されて、出て戻る時には、

「君、小遣が不自由なやうだから、これを持つてゆきたまへ。」といつて、金まで借りて來たことなどを、それからそれへと得意さうに話した。

田原は感心したやうな呆れたやうな顏をして、

「ふうむ！」と對手の顏を見ながら云つてゐるところへ、何をしてゐたのか、あれから隨分手間を取つた夜具の用意が出來たと思はれて、遠い、寒い廊下をやつとこさ宿の者が運んできた。

狹い四疊半の處へ大の男が二人寢ようといふので、床を延べてゐる間二人は一寸緣側に身を交はしてゐた。おつぱつて營業してゐないくらゐであるから、夜具なども綿の粗惡な、木綿皮の蒲團で、襟あてのところの白い布が半分鼠色に汚れてゐた。

宿の者は、寢床を二つ並べて敷き終ると、「どうぞお休みやす。」といつて、冷い遠い廊下を又退つていつた。

もうその時夜はかれこれ二時に近かつた。少し川下の丸太橋にも電車の軋る音は疾うに途絶えて、戶外の夜は深沈として更けてゆくのであつたが、緣側の眞下を流れ落ちる潺流の音のみ高く枕に響いた。

彼等は妙に頭が冴えて來て、まだ床には入らず、大きな、海鼠の支那火鉢を挾んで對坐しながら、尙ほ話し耽つてゐた、その火鉢は、田原が去年の暮に暫時そこに落著

いて居ることに定めた時寺町の方の骨董屋を見て歩いて買つて來た物であつた。東京に居る時でも京都の方に放浪してゐる時でも、何處といつて定住のない田原は、暫くでも此處に落着かうと思ふ場處を見出した時には、必ず定つて大きな火鉢を買つて來る習慣（くせ）があつた。それは、一定の場處に落著いてゐられない田原にでも、寒い冬の間だけは何處へも動き廻ることが出來なかつたからであつた。そして、火鉢の傍がこひしく懐かしくなる時分は晩秋から初冬にかけてのことで、一年中の放浪に疲れた彼がそろ〳〵冬籠りの支度に、やう〳〵恰好の落著き場所を見出した時分の頃であつた。
田原が特に大きな火鉢を好んだのは、その、どつしりと落着いた重味を、彼自身の常に安定し得られない心に持つていつて、重い〳〵風鎮の用を爲さうとするのであつた。
それで彼は、東京にも京都にも到る所に大きな陶物（すゑもの）の火鉢を四つも五つも持つてゐた。所持の家は固より、四十の上を三つ四つ越してゐながら妻も子供も、箪笥も何にも持つてゐないのだが、火鉢だけはそんなに餘計に持つてゐた。重い破損物であるから、それを、一處不定の旅先へ持ち廻ることは出來なかつたが、方々にそれを置いてゐた。
そして又不思議に、他に何がなくとも、まづその好きな火鉢さへあれば、それを朝夕

愛撫抱擁して以て女房に代へ、子供に代へて果敢ない假の住居にも、稍安定な夢の世界を結ぶことが出來たのである。

何を爲る事はなくても夜を更かすことを常とする鶴岡は、

「今夜もう寢ないでこれから明日の朝まで話さうか。」といふ。

「いや、とてもそんなことは出來ない。」田原は又眞面目な顏をしていつた。

その時田原のみ少しも氣づかない事が、宿の玄關に出來てゐた。

その晩田原は、加茂川添ひの離れ座敷に宵のうちから閉ぢ籠つたまゝ、鶴岡が訪ねて來てから後も一度も宿の玄關の方へは出てゆかなかつたから少しも知るよしはなかつたが、鶴岡が夕刻此處へ來る時一丁ばかり離れた後の方から彼の行く方へそつと尾行して來る一人の男があつた。それは、年の頃鶴岡よりは三つ四つはまだ若さうに見える、質素といふよりはつまらない身裝をしてゐる平服の男であつたが、彼は川端警察署の刑事であつた。

鶴岡には、去年の十一月彼が東京から京阪に來て暫くたつと刑事が蹤いて歩いてゐた。それは、東京の其筋から京都府の警察へ通告があつたからで、鶴岡は、夜更けて宮川町へ遊びにゆくにも、新京極の路地裏へ食道樂に出掛けてゆくにも、何處へ行くにも必ず影の形に伴ふやうに後に附き從うて來る。それを、うるさいとも思つたが、ずつと前から、東京にゐる時でも、彼の身邊に刑事の附いてゐたことは度々であるので、今に始まつたことでもなく格別驚きもしなかつた。それどころではない。刑事が附いてゐるといふのを、鶴岡はどうかすると、やゝ誇らかに、外見にして、それを利用してゐるところがあつた。彼の宿の者をはじめ、誰でも知らぬ者は、彼が晝間京都大學の教授の處へ『自由社』の原稿を依賴に行くにも、夜遲く市中へ物慾を滿たしに出かけて行くにも、いつも刑事が尾行してゐるといふので、殊に東京とちがつて、一般に人間の順溫しい京都の者等は、どんな恐しい犯罪でも犯した人間かと思つて、最初は鶴岡をひどく恐がつてゐたが、段々事情が解つてみると、

「鶴岡さんは何も惡い事しやはつたのやなうて、えらい企計のある人やよつて、ほて刑事さんが、あないに附いて警護してはるんや。」と合點するやうになつた。

鶴岡はそれを、いつそ好いことにして、白晝公然、京都大阪の市中を後に刑事を從へて、堂々とふん反り返つて濶步してゐた。尤も其筋の注意があつて、理由なくして餘り當人の行動の自由を妨げたり、迷惑になるやうなことをしてはならぬ、といふことになつてゐるので、刑事は氣を利かして、晝間人の見てゐる處などでは、刑事が尾行してゐるといふことに氣が付かぬやうに、通行人に交つて稍後方に間を置いて蹤いてゐたが、人通りの少い裏町に差しかゝると、ぴつたり寄り添うて、彼は刑事と肩を並べて話しながら步いた。鶴岡がもし共同便所に入れば、刑事もそのついでに便所に入つて一緒に用を足した。しかし鶴岡の方では、却つて晝間三條通や四條通の繁華な處を、俺には護衞刑事が附いてゐるぞといつた風な樣子をして步きたいのであつた。

そして、每日々々朝から夜まで、ご苦勞さまもお厭ひなく、刑事は誰かしら一日彼に附いてゐるが、夜吉田の自分の定宿に歸つて寢るか、それとも宮川町の妓樓などにいつて泊るか、どこへでも、鶴岡が、今晚は此處に泊るといふことを突き留めて置くまでは、たとひ十二時が來ても、一時が二時でも、行つた先の入り口に番犬の如くにじつと待つて居るのであつた。

それで、その晩も川端署の刑事は鶴岡の後に尾行して田原の宿まで來たが、一足先に鶴岡が宿の玄關に立つて訪うてゐる間、門の外に待つて樣子を見てゐた。すると鶴岡が訪ねて來た人間は在宿したと思はれて、彼は通されて奥へ入つていつたので、刑事は一寸間を置いてから同じやうに宿の玄關に立つた。そして、川端警察署何某と記した名刺を宿の者に示して簡單に來意を告げ、

「暫く此處を借りて居ります。」

と、そのまゝ玄關の低い式臺に腰をおろした。

宿の者は、殊にさういふ隱居仕事に只何事も勿れかしに營業してゐる家であつてみれば、刑事と聞いただけでも、はつとするやうに厭はしく思つたが、寒い吹きさらしの玄關に打棄つても置かれないので、火鉢に火を取つて來たり、座蒲團を出したり、茶を運んだりして、

「どうぞ、お寒うざりますよつて、お手をお焙りやしとくれやす。」と鄭重に扱つてゐた。

刑事はもうそんなことには馴れてゐるので、

「はあ、どうぞもう構はんと置いとくれやす」と、いひながら座蒲團を引寄せて敷き、手焙りのうへに兩手を翳した。そして茶碗を取つて一口呑みながら、
「こちらに泊つてゐる人は何といふ人ですか？」と訊ねた。
立ちかけた宿の者は、又一寸そこに前膝をついたまゝ、
「わたしの方へお泊りになつてゐるお方は田原春愁とおつしやる方でござります」
「あゝさうですか。」と、刑事は懷から手帳を取出して、田原春愁といふ名前を書き留めながら、
「やつぱり東京ですなあ。」
「へえ、宿帳には何やお國元の方を書いてあるやうでござりましたよつて、派出所へはそのとほりに書いてお屆けいたしましたけど、やつぱり東京にお居やすお方でござります。」
「そして職業は？」
「へえ、あの、職業もそれには農としてござりましたが、小說をお書きになりますお方でござります。」

「あゝさうか。」といひつゝ、刑事は一通り聞いたゞけを手帳に記して、
「こちらへは、たしか今日が初めてですな。」
「へえ、あの、只今お見えになりましたお方さんでございますか……へえ／＼左樣でございます。今日初めてお見受けいたしました方のやうでございます。」
「あゝ、さうですか。おほけに。」といつて、刑事は手帳を懷中に仕舞ひ、
「あゝ、それから一寸御注意して置きますが、私が此處に來てゐることは、本人は大抵知つてゐますが、その田原といふ人には、向うで氣が付かない限り、貴方の方では成るべく默つて居るやうにして下さい。」
「へえ、よう承知いたしましてございます。」と、ちよつと肯くやうにして、やゝ訝しさうな眼をしながら、
「あの、何事かご心配でもございまして？」
「いや／＼。何にも氣づかひな事ではありません。」と、刑事は、宿の者には安心するやうに云つてゐた。
川端署の刑事は、それから寒い、辛氣くさい玄關の板敷に腰を掛けたまゝ、ものゝ

一時間くらゐも待つてゐたが、鶴岡は奥へ通つたきり何時まで經つても出て來さうになかつた。

宿の者も、來客が思ひのほか長居になつて、たうとう田原から夕飯の客膳を命ぜられてから、刑事を玄關に腰掛けさせて置くのが氣の毒になり、

「あの、お客様がこれからお夕飯をお上りになりますよつて、一寸まだお手間が掛りますやろ思うてます。あんたはん、そこは餘り冷たうおすよつて、此方へお上がりやしてお待ちやしたら、どうでござります。ほんまに、えらい、ご苦勞さんでござります。」

といつて、式臺を上がつてすぐ取付きの一段小高くなつた薄暗い座敷に座蒲團を備へて案內した。

大分待ちくたびれてゐた刑事は、渡りにと、

「あゝ、さよか。ほんなら遠慮せんと。」と、妙な訛のある京言葉を使つていひながら、自分で火鉢を持つて座敷に上がつて來た。

それから又やゝ暫くそこに趺坐をかいて何か知ら速成の法律講義錄のやうな物を繙

いて見ながら待つてゐたが、彼もぼつ〳〵空腹を覺えて來たので、宿の者が丁度そこを通り合はせた時こゝの家に電話があるかと訊くと、自分の處には電話はないけれど、すぐ此處から二三軒置いた上の浪花亭といふ西洋料理屋へ行くとある。そこが毎時自分の處で借りつけになつてゐる電話であるから御用があるなら遠慮なしに其方へ行つてもらひたいといふ。刑事は、浪花亭と聞くと、

「あゝ、そこやつたらよう知つてゐます。」

といつて、それから浪花亭に往つて川端警察署へ電話を掛け、同僚を呼び出して、今鶴岡の尾行で、これ〳〵の次第だから、一寸署へ歸つて夕飯を食べたいと思ふから暫時交代にしてもらひたいと通じた。

そして歸つてゐるところへ、そこからは直ぐ丸太橋を一つ川向うへ越したばかりの、橋の東詰を一寸下つた處にある川端署から他の刑事が交代にやつて來た。前からゐた刑事は、彼に、鶴岡が今來訪してゐる、此處に滯在の客の姓名、原籍、職業などを先刻宿の者から訊き取つた通り報告して置いて自分は歸つていつた。後から來た刑事も懐中から講談本を取り出して、火鉢の上に翳しながら、探偵奇譚などを讀んでゐた。

さうしてゐるところへ、鶴岡が廊下を出て來て、玄關脇の便所へ入つた。そして引返す時、彼と刑事とは偶然顏を見合はしたが、不斷から知合ひなので、互に、

「やあ！」「やあ！」といつたが、そのまゝ鶴岡は又奧へ入つた。そして彼は、田原には、その事はなんにも云はなかつた。

やがて十時頃になつて又先の刑事がやつて來たが、鶴岡がまだそこを立ち去らないで奧で飮んでゐると聞いて、二人はそのまゝ其處へ腰を据ゑて宿にさういつて、かつかつするほど火鉢に炭火をおこさせ、いよ〳〵鶴岡がその晩は此家へ泊ることにきまつた夜更けの二時ちよつと前になつてから、やつとそこを引揚げていつた。

その頃丁度一月の二十日過ぎ、東京では帝國議會開會中で、露西亞あたりの過激思想の風潮にかぶれた社會主義運動や、それに關聯して勞働問題などが次第に惡化する。それと相應呼して普通選擧運動が全國を風靡して起るといふ時であつた。常にはそんな政治運動などは、そつちのけにして平和な生業にいそしんでゐる閑雅なこの古都に

も時代の風潮はひた〱と押寄せて來て、柄にもないその市の人民のある者が夜な夜な圓山公園に集會して不穩な野外演説をしたり、淺黃の洋服を著た勞働者が、隊伍を作つて勞働歌をうたつて練り歩いたり、櫻花につけ、紅葉につけ、美しい友禪の著物を著飾つた藝妓や舞妓が、客に連れられて甘えたり遊んだりする風流の場處が苦々しい殺風景な巷と化してしまつた。

さういふ環境の中へ、東京の其筋では注意人物の一人である鶴岡が長く足を逗めてゐるといふので京都府の警察部へ通告があり、それから刑事を尾行さすることになつたのである。

彼が京都と大阪との間を轉々して飲み歩いてゐる際に偶〻その方面の人間と顏を合はすやうな場合があれば無論共產主義とか無政府主義とか又は私有財產沒收とか資本制度の打破とかいつたやうな急激な經濟組織や社會組織の改革について痛快なことをいつて隨分熱情的な議論を吐くこともあるが、彼が共產主義や無政府主義を唱へたりするのは畢竟それつきりのことであつた。そんな思想に興味を持つてゐるからといつて、それを實現するがために一貫した意志を以て計畫的に遂行するといふやうな實際

的な考へは鵜の毛ほども持つてゐるのではなかつた。まるで暢氣者の煙草の煙のやうなものであつた。やゝ奇警な比喩を用ひていへば、鶴岡の共産主義や無政府主義は、書畫骨董の好きな者がそれの話を肴にして酒を飲むのと同じであつた。彼はさういふ痛快な革命思想を肴にして好きな酒を一層うまく飲むといふに過ぎなかつたのである。それでも、國庫に收入の有り餘つてゐる時の政府は、彼の如き、少しの恐るべき意思も持合はしてゐない過激思想家に對しても、手數と費用とを惜しまず念の入つた刑事を附けて置いた。

やゝあつて田原は一寸氣を變へたやうに鶴岡に向ひ、

「君も隨分古くから政治問題や社會主義に興味を持つてゐる人間だが、その方面の連中とよく交際してゐるやうだが、警察へ拘束せられたり、暴動をして監獄へ打込まれたりしたことは一度もないな。不思議だな。」

「うむ、それは一度もない。あいつは怖い。あそこへ行くのは厭だ。」鶴岡は監獄に行くのだけは、さすがに怖いといふやうにいふ。

「それが當前(あたりまへ)さ。何も、社會主義を唱へるからといつて、監獄の飯を食つて來た者で

なければ、それを唱へる資格がないといふ譯でもない。君はあの、何だつたつけ、ああさう〳〵赤旗運動とかの時なんぞにはどうしたのだ。」
「あの時も現場へ行つてゐたが、一番先に逃げ出したのさ。僕がまだ學校へ行つてゐる時分のことだ。」
田原は笑つて、
「うふ、それが利巧さ。」
暫くそんな話をしてゐたが、鶴岡は、それには餘り興味のなささうに、
「君、京都の女といふのはどうした？」
田原には思ひがけないことを、鶴岡が訊ねた。
田原はもう、鶴岡が今日自分の處へ突如に訪ねて來たさへ、今目前、失望落膽のどん底に沈んでゐる、その女の問題について、靜思默考を妨げるものとして、實は内心一刻も早く鶴岡が歸つてくれゝばいゝと思つて、誰かに頼んでそこらで箒を立てゝ呪でもして貰ひたい位に思つてゐた矢先へ、さういつて「京都の女はどうした？」と訊かれたので、ぎつくり胸を突かれたやうな氣がした。そして、それにしても鶴岡がよ

く、自分に京都に魂を打ち込んだ女のあることを知つてゐるものだと、田原は思つた。あれほど大事を取つて隱すやうにして置いたのだけれど、東京にゐてももう何年になく會つたことのない鶴岡がそれを知つてゐるくらゐだから、もう、おほかた自分を知つてゐる人間といふ人間には、誰にも知れ渡つてゐる事かも知れぬ。しかし、鶴岡にした處で、今現に差迫つて起つてゐる委しい事情まで知つてゐる筈はないのだ。

「どうしたものだらう？　何にも話さないで、いゝ加減な返事をして置かうか。」と一寸の間思案をして見たが、去年の十一月の終から五十日ばかりの間、まるで濃霧に鎖されてゐたやうな、その女の事について、丁度その前日あたりから、やつと少しの光明を認めた場合であつたので、陰鬱に滅入りがちであつた田原もいくらか心が輕くなつてゐた。それで、對手が對手で、氣持のさつぱりした鶴岡のことであるから、「いつそいつてしまへ。」と思つて、

「うむ、その事で今ちやうど苦心慘澹たる處だ。」といつて、田原の性分として、今まで祕して語らなかつたことも、一旦口を切つてしまふと、自分から氣の濟むまで、來歷を精細に話してしまはねば居られなかつた。

田原が、その京都の女といふのに深く入れ上げたのは、もう隨分古いことで、四五年も前からのことであつた。それは祇園町の太夫であつた。一口に太夫といへば、聞いただけでは、いかにも昔の吉野とか夕霧とかいつたやうな名妓らしい氣がするのに、事實は全くそれと反對で、いづれを見ても子守女か紡績工場の女工に衣裝を着けたやうな女ばかりの中に、田原の女といふのは、めづらしく流石に生粋の京育ちの女だけあつて、どことなく古風な感じのする、優雅な物腰姿態(とりなし)の女であつた。さうして彼はその女にこの四五年この方まるで西鶴の浮世草紙の中に書いてある昔の蕩兒のとほりに、すつかり精神も身上も入れ揚げてしまつたのであつた。尤も身上といつたところで、初めから妻も子供もない、身すがらの獨り者で、尻の下もない無產者の、わづかに筆一本を生命の綱に、下らぬ小說を書いてやう〳〵一人口を養つてゐるだけのことであつたから、その點では紙屋治兵衛のやうに妻子の義理に堰かれて戀を思ひ斷たねばならぬといふ不如意もなかつたが、しかし田原のその女に對する戀著は飽くまで眞劍であつて、中年過ぎての戀とは、どうしても思はれないほど純淸なものであつた。それは戀といふことが、たとひ年取つた者であつたにしても既に人間の體內にある若

い血を沸かすことなのであつたからだ。西行法師もかういふ歌を讀んでゐる、

今更にいとゞ心のをさなびて
身をちぎらるゝ戀をするかな

すると、田原がそれほど戀ひ逆せてゐた女は去年の十月から十一月にかけて全國に流行したスペイン風邪に罹つて、風邪は一旦癒つたがその後が精神消耗から幾らか氣も狂れたやうな狀態になり、到頭商賣を廢めて、たつた一人きりの母親の處に歸つて專ら靜養をしてゐた。女は、田原とは、以前からの約束で、商賣を止めたら眞實彼の處に身を寄せる氣でゐたのであつたが、無論田原の他にも、かなり馴染の深い客が二人三人あつて、その方は日頃贔屓になつてゐる茶屋からの手が廻つたり、又强慾で狡猾な彼女の母親の意思がそつちに傾いてゐたりして、元來溫順しいかはりに因循で、何につけ、てきぱきと埒の明かない彼女が不決斷のうちに一日延ばしに日を送つてゐるうちに、どつとさういふ病氣に患ひついたのであつた。田原は始終京都の土地に居着いてゐる譯でもなく、彼の知らぬ間に、——彼の方では知らなかつたが向うでは田

原といふ者が、その女に附いてゐるといふことをよく知てゐて、常に鵜の眼鷹の眼で彼女の身のまはりを見張つてゐた馴染の男の一人が、女の病中を好機逸すべからずと、茶屋を仲に入れて巧く母親を抱込み、まんまと女を手中に入れてしまつた。

田原は丁度さういふ事の起つてゐる時に生憎京都を不在にして、そんなことは夢にも知らなかつたが、一月ばかりして又京都に戻つて來て、はじめて女が病氣で商賣を廢めたことを知つて、まるで狂氣のやうになつて騷ぎ出したが、たゞ、多少精神に異狀があつて、勤めを退き、親元へ歸つて、今はもう出てゐた土地には居ないといふばかりで、皆目何處にどうしてゐるのか、探ねる術もなかつた。そこで彼は、廣い京都市中はいふまでもなく、遠く府下の、山城國の郡部にまで、去年の十二月の初めからこの一月の二十日頃まで、心當りといふ心あたりを苦心慘澹をして探ね歩いてゐたのであつた。

無論田原自身では、女にさういふ保護者が附いてゐることは、はつきりと分らなかつたが、いろ〳〵な關係を手繰つて訊き合はしたところによると、いづれ何者かゞ附いてゐることは想像することが出來た。けれども、なにしろ肝腎の本人である女は、

さういふ自己判定の無能力の場合に親元へ引取られたのであつたことを思ふと、いまだ俄かに自分と彼女との間の氣脈が全然斷絶したものと早合點する譯にはゆかない。否々、この四五年來、たゞ彼女一人を得たいばかりに、殆ど臥薪嘗膽の苦しみといってもよいくらゐに眞心を傾け盡して來たことを思へば、そしてそれが先の女に通じてゐる筈を思へば、女は必ず、自分でも妙な破滅に立ち到つた運命を、さぞ本意なく思つてゐるにちがひない。彼はさう思ふと、もう一刻一瞬の間も待てないやうに焦りにあせつて、女の居處を探ね出すに肝膽を碎いてゐたのであつたが、それが、鶴岡の訪問に接した、丁度その日の午後に、やつと確かな手懸りを得た。

「實は、それが今日、多少光明を認めたところなんだ。」

田原は、風邪がもとで多少精神に故障を呈してゐるといふその女が、何處か京都府下の郡部の山の中か、或はずつと遠くの方へ靜養かた〴〵一時身を隱してゐるかも知れぬと誤想してゐたが、やつぱり最初の鑑定のとほり、京都の市中も市中、もとの古巣の祇園町からつい目と鼻との間なる安井の金毘羅の境内の一廓の奥の方にじつと世間を避けて身を隱してゐるとは。惡性のスペイン風邪の流行する嚴冬五十日の間、日

夜寒風に一命を的に賭け、眼の色を變へて尋ねあぐんでゐたのが、それは徒勞に歸してしまつたけれど、ふとしたことから、女の居處を突留めたのは、今の彼に取つてはどんなに嬉しかつたか知れなかつた。

その日も田原は、散々鬱結の揚句、外は霙まじりの時雨がして寒かつたけれど、散歩かたぐ\市中を歩いて、自然と、足は、女が先に母親と一緒に住んでゐた、安井の金毘羅の境内に向つてぶら／\歩いてゆくと、丁度午少し過ぎた頃、人通りの跡絶えがちな安井の北門通りの横丁を、向うの建仁寺の裏門の方から此方を向いてやつて來るのは女の母親であつた。

母親にもうかれこれ四十日ばかり會はぬが、娘の事の經緯で去年の十一月から十二月の初めにかけて時々會つて話してゐた。母親は終に自分の方のいふことに道理が立たなくなると、まるで無智蒙昧なる者のいふ自暴糞な惡態を吐いて田原に喰つてかかるのであつた。それでも田原は、その女戀しさの餘り、何と口汚くいひ罵られても隨分無念を忍んで、母親に對して我慢をしたのであつたが、さうして無理無體に彼から娘を遠ざけようとすればするほど、層一層と田原の女に對する執着は募り、興味を

刺戟され、丁度昔の敵討を志す者が親の敵の在處(ありか)を探ねるやうに緊張してゐたのである。

田原は眼ざとくも遠くの方からやつて來る母親の姿を見ると、

「あツ、母親の奴め、やつて來る。うまい處で出會したが百年目、先頃から、娘はもう京都には居ない、遠くの方へ往つてゐるといつてゐながら自分だけがまだ、うろうろとこの邊を歩いてゐる筈はない。母親の奴めがこの邊に居るからには、きつと肝腎の本人もやつぱりこの邊に居るにきまつた。きつと、先に居た處に、何處へも往かずにゐるにちがひない。母親の奴何方へ往くか、そうつと後から蹤いていつてやらう。」

彼はさう思つて、母親の氣付かぬ間に、そつと、此方の湯屋の板塀の物蔭にぴたりと身をひそませて、手前の横丁を何方へ往くかと窺つてゐると、果して向うの廻り角の處を右に折れた。

それで田原は獨り心の中でうなづいた。

「はゝあん、やつぱり先の處にゐやがるな。」

その道を右に折れて往く安井の金毘羅の境内は、つい四五年前までは竹藪の一ぱい

生ひ茂つた叢林であつたが、開けてゆく京の都の繁華に、以前は狐狸の棲み荒した一廓に、小意氣な家が建ち、今では近所の祇園町育ちの化粧の者が、猫と小婢と三人きり、不斷は男氣なしに住んでゐるのが多い處である。

湯屋の横丁を右に折れた母親を五六間先へ遣り過して置いて、田原はそうつと其後から尾けてゆくと、道は一と筋で、間もなく左に折れる。そして四五間東に向いて往き、今度は又右に折れる、それから少しいつて、又も一つ左に曲がる。田原は、先にゆく母親に氣付かれてはならぬと、可なりの間隔を置いて尾けてゆくので、その間にも、兩側に建ち並ぶ家の中に入つてしまつて、何處の入口へ姿が消えたか見失つては一大事と、曲り角の處まで往くと、俄に急いで、母親とは五六尺くらゐの距離に追ひ付いた。しかし、もう何處かそこらの家へ這入つてゆきはしないかと思ひながら後を追うてゐたが、なか〳〵這入りさうにない。その邊は金毘羅の境内をずつと取卷いてその外廓に小意氣な二階造りの家が建つてゐるので、境内の繪馬堂の處まで行くと、普通の人家は道の右側ばかりになつて、左手は空地が多く、向うはすぐ東山の高臺寺から八坂の塔が見晴らされた。田原は身を隱すに都合のいゝ物蔭がないので、片側に

建つた家の軒にぴつたり平蜘蛛のやうに身を附着けながら、何處までも母親の歩いて行くのを追うてゐると、最初感づいたとほりに、果して、去年の十一月の末探ねあてていつた、もとの路地の中に入つていつた。

彼は雀躍りして喜んだ。去年あの時、現にそこに居るのに、居ないといつて、うまうまと人を欺いてゐたのであつた。そのいふことに手もなく乘つて、眞實と思ひ込み、とてつもない遠くの方ばかり探し廻つてゐた此方の愚直さが馬鹿らしいやら、自分ながらに愛想が盡きるやら、又騙されてゐた悔しさやらが一緒になつて、田原は何とも口にいひやうのない、こみ上げるやうな胸の動悸を覺えた。

「うぬ、畜生め！　まさか背に眼がなければ、かうして自分が今尾けてゐるとは、よも知るまい。」さう思ひつゝ、妙に昂ぶつて、ぶる／＼慄へる掌先に心臟の處を抑へるやうにして、石疊に足音を立てぬやうに、そうつと大事をとりつゝ、尚ほその路地に入つてゆくのをつけてゐると、表の通りから一側裏になつた路地の中にも六七軒、二階建やら平家の棟割造りが建つてゐて、小廣く取つた路地は曲尺なりに右にずつと折れ曲がつてゐる。彼はその曲り角に一寸身を忍ばせて母親の下駄の足音に耳を澄ませ

てゐると、やがて歩く音が止まつて、がら〳〵と潛戶を開ける音が聞えた。
「はゝあ、もう這入るな。」
と思つて、姿の消えてしまはぬ內にと、つゝと曲り角から身を離しながら、後姿を眼で追掛けると、やつぱり三軒建の平家の、中央の家の入口を這入つて、今丁度腰から下の方が半分ばかり斜めに戶口の外に殘つてゐるところであつた。
田原は、ちやうど敵の在所を突留めたやうな嬉しさに、そのまゝ直ぐ追掛けて家の中に這入りこんでやらうかと戶口の前まで、つか〳〵と進み寄つたが、その時先では傷持つ脚に餘程人を用心してゐると思はれて、內からがら〳〵と潛戶を閉めると同時にごとりと猿をおろす音が聞えた。
「はゝあん、內からあのとほり猿をおろしやあがつた。晝間でさへ入口を閉込んで、隨分世間の狹い思ひをしてゐるな。」
田原はさう思ひながら一瞬時そこに突立つて考へたが、
「よし〳〵、かうして、姿は見たくつても女の此處に居ることが分りさへすりや、これから先の仕事は何も急ぐには及ばぬ。」と、ひとり心にうなづきつゝ、そこにぐづ〳〵

してゐても見付けられてはならぬと、そのまゝそうつと足音させぬやうに急いで路地を出て來た。そして、その日は漁に出ていつて大きな獲物があつた時のやうな悅びに滿ちて宿に戾り、それから一日、夜遲くまでこれから先取るべき方法について妙計を案じながら寛いで安眠した。

それから翌日、彼は丁度また敵討に出掛けて行く者のやうな緊張した興味を持つて、いゝ時刻を見計らつて女の隱れ家に出向いた。そして例の潛戶に手をかけて引張つてみたが、開かない。どうしたものであらうと思案しつゝ、ふと入口の左手に一間の出窓があるのに氣が付き、そこから何とか好い工夫はあるまいかと思つてよく見ると、出窓は一尺幅ばかり、外は竹と木との荒い格子づくりで、內に四尺のガラス障子を二枚閉め、下の方の枠が二段だけ擦りガラスになつてゐる。それで、上の方からだけすぐ出窓の內側の座敷の模樣が覗かれるが、外から見えるのは天井の方ばかりである。少し後に身を退いて、尙ほよく見ようとすると、六疊ばかりの部屋の向うの壁際に二枚折の金屛風を立てゝゐるのが、その上の方だけ微かに見える。

「はゝあ！　金屛風などを置いてゐるな。」

と思ひながら、その荒い格子の間に手を入れて試みにガラス障子をそうつと押すと、五六寸はかり、すうつと滑るやうに開いたが、どうしたのか、それだけ開いただけではたと動かなくなつた。はて、と思つたが、それはどうも釘など打ちつけてあつて、それに差支へて動かないのとは手應へがちがふ。ぐいと、今度は指先に力を入れて押すと、又する／＼と三四寸開いたが、中からも一生懸命に動かすまいと押へてゐるらしい。

こちらは一層いたづら氣分も手傳つて、此度は二枚の障子の、そつちの方は打遣つておいて、早速左の方の戸の端の方に廻つて、力一杯にぎゆうと反對に押すと、中の抑へてゐる手にすかさず喰はして、すうつと一尺ばかり手もなく開いた。

そこから斜に障子の內側を差覗くと、そこには、思ひがけもなく、肱掛窓の直ぐ下に寄り添うて、置炬燵をして、顔だけ急の逃げばに困つたやうにガラス戸にぴつたりと押しつけて、小首をやゝ傾げながら、嫣然と此方を見ながら微笑んでゐるのは、探ねにたづねてゐたその女であつた。

「あ、嬉しや！」と、飛び立つやうな胸を鎮め、早速には口も利けないで、じいつと

女の顔をよく見ると、一つは病後のせゐもあつて、長い間見なかつた間に顔の容姿が前といくらかちがつてゐるやうに思はれる。母親には、あれから後も時々會つてゐるが、女とは去年の夏の初め、一月ばかり彼女の處に逗留してゐて、それから七月の初め高野山に登るといつて出立したきり、ずつと相見ないのであつた。

女は平素から蒼いほど色の白い顔が、病氣揚句のために、いくらか腫んでゐるのではないかと思はれるやうに青白く肥えて、その日洗つたのか、洗つて油氣のなくなつた頭髮をぱさ〳〵と櫛卷にしてゐる。そして、小形のメリンス友禪の炬燵蒲團のうへから絲玉を轉がしながら、右の手に絹刺を持つたまゝ、左の手先で一生懸命に、肱掛窓に凭掛るやうにしてガラス障子の枠を押してゐる。

田原は、ちやうど河庄の格子先に覗いて、「可愛や小春は燈火にそむけた顔の、あの痩せたことわい……」といふ紙治と同じ氣持で涙聲になり、

「お柳。」と、たつた一と聲四邊を憚るやうに云つた。

襖の次の間には母親か誰かゞゐるにちがひない。

思ひがけもない田原が格子の外から顔を覗けたので、女はちよつと吃驚したが、も

ともと男の心の中はよく解つてゐるので、自然と微笑んだその顏には少しの邪氣も混つてゐなかつた。彼女は何とかそれに應へようかと思ひながら、何と口に出していゝか、これも早速には言葉を發しかねて、笑つたまゝ尙ほしばらく默つてゐるところへ表の樣子を聞きつけて、何事かと、境の襖を開いて、奧の火鉢を置いてゐる處から母親が立ち出た。

そして、この樣子を一眼見るや否や、母親は、丁度泥坊に踏込まれてゐるところで眼を覺ました時のやうに、驚き慌てゝ、

「何やいな。早う、こつちいお來いんか。そんなとこに出てるからや。」と、小言をいひつゝ、娘の傍に寄つて來ながら、格子の間から、じいつと家の中を差し覗いてゐる田原と、眼と眼をはたと見交はした。

そして、見たくもない物を見たといふやうな顏をしながら、すぐ他へ眼をそらして、

「さあ、早う、こつちいお入りな。」

といつて、また炬燵に入つたまゝ身動きもせずにゐた娘の手頸を握つて引立てた。

娘はさうせられるまゝに自分から身體を持ち上げて炬燵の傍を離れて、しんなりと

立つた。
　母親は自分の體で娘を押隱さうとするやうに、急いでこちらへ廻はつて、絲織の長羽織を著た娘の背のところを、ずん〳〵背後から押した。そして、格子の方を一寸振返つて見て、
「何や、人の家の內を窓から覗いて見て。さつ〳〵と失せい！」と、まるで犬を追拂ふやうにいつた。
　女は力なげに立ち上がつた後姿を、母親の手に無理おしに押されながらなよ〳〵と襖の奧に入つてしまつた。

　そして田原の、宿まで歸つて來て、やつと一息入れてゐるところへ鶴岡が訪ねて來たのであつた。
　彼は、ざつと搔い摘んで、それだけの話を鶴岡にして聞かせ、自分の痴愚を自分で嗤ふやうに、
「まあ、とても、こんな話を正氣の沙汰で出來るものぢやないが、知らぬ土地だから、

今いつたやうなこともしてゐられるのさ。しかし、自分は何處までも眞劍なんだよ、いゝ年をしてゐろくせに。…みんな渡世に急がしい世の中に、僕のやうな、こんな馬鹿げたことをしてゐる者があるだらうか。」と、彼は自分ながら、愛想が盡きたやうにいふのであつた。

田原の長い戀物語を、始めから終りまで非常な熱心を以て默つて聽いてゐた鶴岡は一通り聽きをはると、言葉を發する前に先づ頭振りを一つ振つて、

「ちつとも馬鹿な話ぢやない。當然のことだ。そんなことにかけては君より僕の方が遙かに熱烈だ。」

田原はそれを聽いて、一寸不思議さうな顏をして、

「僕より熱心だつて。君にもそんな經驗があるのか。」

「あるどころぢやない、大ありだ。しかも幾度もある。」

「幾度もある！…それは不思議だ。僕もこんな經驗は、ずつと先にもあつたのだ。…君も知つてゐるだらう、それ、あの時分のことを。」

「うむ、別れたあれだらう。」

「あれはまだ若い時分のことだつたから、今となつてみれば笑つてでも恥は隱されるのだが、もうこの好い年をして、女を取りそこなつた話でもないからなあ。」

田原は、今まで鶴岡に話して聞かせた戀物語の中の主人公とは思はれぬくらゐ、今度は全く常識道德の立場から、自己の行爲を耻ぢるやうな、又冷笑するやうな調子で弱いことをいふのであつた。

すると鶴岡はその反對に、飽くまでも眞面目な調子で、

「そんな馬鹿なことがあるものか。幾歳になつたつて、それは吾々の生命だもの、戀愛をしてはいけないといふ道理はない。俺なんぞは、嫁を持つて子ばかり生せてゐるよりも、一生戀愛をしてゐる方が、どんなに自己の生活に直接な必要があるか知れないのだ。」と、いひ切つて、暫くして彼は又「……それが又吾々の興味でもある。」と意味を强めていつた。

さういはれると田原もまた、自分とてもその點に於ては決して鶴岡の背後に下る者ではないといふやうな顏をして、大きくうなづきながら、

「うむ、それは僕も同感なのだ。何も子供を產み擴げることばかりが道德行爲であつ

て、戀愛をすることが不道德ではないからな。」
「無論さうさ。僕、今丁度ハヴァロック・エリスの性の研究を讀んでゐるが大いに同感の點がある。」
といつて、鶴岡はその本の話などをしてゐたが、又話題を田原の女のことに戻して、
「その女はまだ大いに望みがあるよ。決して失望するには當らない。」彼は確信の面持を以て田原を慰めるやうにいふ。
「さうだらうかねえ。僕も何だか、女自身には望みを繋いでゐても敢て自惚とは思はれないやうな氣もするのだ。」
「無論、今の話では、女は大いに君と會つて話をしたがつてゐるにちがひない。その嫣然笑つてゐたといふのが明かな證據だ。」
鶴岡は、彼の嚴つい顔にめづらしい優し味を浮べて笑ひながらいふ。
田原は、鶴岡のその顔を、やゝ不思議さうにじつと見守つてゐたが、
「君とは東京にゐても偶にしか遭つたことがないから、こんな女の話なんか打融けてしたことは一度もなかつたが、かうして話してみると、君は、その思想的傾向や、職

業の方面が硬派であるところから推して女の事にかけても全くの硬派かと思つてゐたら、案外情事にも通じてゐるんだなあ。」
といふと、鶴岡は大いに得意さうに、言下に、
「うむ！」と、大きく一つ頭振りをふつて「僕はから見えても大々的の軟派なのだ。僕の知つてゐる人間は一人君ばかりぢやない、誰でもそれをいつて不思議がるんだ。」
「さうかねえ。」と、田原も妙に神經が冴えてしまつて、夜はもう三時もとうに過ぎてしまつてゐるのに、まんじりともしたくなくなつた。
「だつて、僕のやうに斯ういつも女に引懸かつて、その後ばかり探ねて歩いてゐるやうな馬鹿げた經驗は君にはないだらう……。」
田原がさういふのを、鶴岡は仕舞まではいはせも果てずに引取つて、
「ところが、それは、僕の方がまだひどいんだ。僕はまだ君以上のことをやつてゐる。」
「ふむ。……さうかねえ、君にもそんなことがあるのか。どんなことがあるんだ。」
「いろんなことがあるから一々いへないが、その中で最も僕の頭に深い記憶を留めてゐるのは二三人ある。……」

といつて、鶴岡が眞面目な顔をして語り出したのは、からであつた。

夫は鶴岡がまだ京橋の方のある新聞社に勤めて居た時分のことであつたから、もう七八年にもなる。その頃彼は、やつとまだ三十を出たか出ぬくらゐの時で、今ほどだらしのない生活もして居らず、讀んだり書いたりすることも相應に努力してやつてゐた。鶴岡の名を文壇に廣めたのもその時分のことで、まだ學生時代の眞面目な、そして初心な氣持も今のやうに荒んではゐなかつた。人の心の中の氣持や、その時の生活狀態といふものは不思議に又その外見に顯れるもので、鶴岡も學生時代からまだ四五年くらゐ隔たらぬ間は、一目見ても好個の青年といふ感じを人に與へたものである。

丁度その頃のこと、ある春の宵であつた。小石川と牛込の境を流れる江戸川端の櫻花が宵々ごとに雪洞などを點火して、そゞろ歩きの觀櫻の群衆を呼んでゐる時分であつた。彼は京橋の方から電車に乘つて、途中江戸川行きに乘換へ、ずつと車掌臺の方の入口に寄つたドアの處に腰を掛けて、いつものとほり小型の洋書を披いて脇目も振らずに讀んでゐた。その間に大勢の客が出たり入つたりしてゐたが、初めは割にすいてゐた電車が、段々滿員になつて、一心に書を讀み耽つてゐる鶴岡の膝脇を、自分も

向うから壓されながら、雪崩のやうに押し寄せて來た一人の若い女があつた。
鶴岡は、まるで電車の中にそんなに大勢の人がゐるのか、居ないのか氣の付かぬくらゐの熱心をもつて、近視眼の眼鏡ごしに、じつと洋書の上に眼を釘付けにしてゐたが膝の處が餘りに柔かい、暖かみのある壓力を感じて來たので、そつと、本の上から眼を放して、ちらりとそちらを見ると、それは十九か二十ばかりの、學生とも普通の娘とも見える女であつた。派手な銘仙か何かのあまり目立たぬ、物堅さうな、小ざつぱりした風俗をしてゐるのが何となく鶴岡の興味を惹いた。何處へ行くのか、小さいメリンスの小包みを膝のうへに載せてゐる。
電車の中は人で一杯であるが、それでももう暖かい時分なので窓を悉く開放つてゐるので、そこから好い心地の風が、顏を撫でるやうに吹いた。そして、街路に沿うた邸宅の塀の傍や土手についた線路の上を駛せてゆく時にそこらに咲いてゐる、花樹の匂とも靑草の萠える香とも附かぬ、たゞ何となく春の氣持をそゝるやうな懷かしい薰が鼻に通うてきた。鶴岡はそれから、洋書は今までのとほりに披いて、やつぱり餘念なく讀んでゐる風に裝つてゐたが、折々そうつと橫眼をつかつて、その女の方を盜み

見てゐた。襟頸のまはりに附けてある白粉が、白い襟脚の生へ際に粉を吹いてゐる處が、すぐ自分の鼻の先五六寸の間近に見えてゐる。藤紫にところ〴〵赤い花瓣を散らした襦袢の襟が、白粉と髮油とに大分汚れて黑ずんでゐる、その下から淡紅色(ときいろ)の肌襦袢の端が少し覗いてゐる。毛性の好い艶々した束髮の頭髮からか、その襟筋のところからか、クリームの匂とも髮油の香ともつかぬ甘酸ぱいやうな、床しいにほひが窓を吹く風につれて、ちやうど優しい溜息のやうに鶴岡の鼻を打つた。

　その女は一體何處から乘つたか、はつきり覺えてゐなかつたが、たしか駿河臺下あたりから乘つたやうに思ふ。

　どこへ行くのであらう。どこで降りるか？」

と、彼は腹の中で考へつゝ、どうか何時までも乘つてゐでくれゝばいゝがと思つてゐると、幾つも停留場を通り過ぎたけれど、容易に降りさうにもない。そして九段下から、ずつと飯田橋を過ぎて江戸川に沿ひ大曲まで來ても、その女はやつぱり乘つてゐる。いろんな客が乘つたり降りたりしてゐる間に、鶴岡とその女の處は、群衆にまぎれて、何となく二人きり他と懸隔(かけはな)れてゐるやうな具合になつた。彼は幾度か躊躇つた

擧句、何氣なく、
「あなた、何處まで行きます？」と、低聲に訊いて見た。すると、向うも、
「わたしこの先の江戶川橋で降ります」といふ。
それで彼は、本當は早稻田の終點まで乘る氣であつたのを、
「あゝさうですか。僕もあそこまで乘ります。」といつた。
それつきり後は何にもいはなかつたが、やがて電車が、江戶川の櫻花が今丁度滿開の最中の處を通つてゆく時、車內の客は、いひ合はしたやうにみんな窓からそつちの方へ氣を取られてしまつた。櫻花の下の水の上では小さい舟が幾つも遊んでゐた。
鶴岡は、その時、そうつと、その女の手を握つた。
女の手をそうつと握りながら、鶴岡は、もし、人込みの中で出し拔けに大きな聲でも發しられはせぬかと、腹の中ではひどく危んでゐたが、しかし、自分の樣子を省みて、まさか掏摸と間違へられようとは思はなかつた。
すると、案ずるよりも產むが易いといふのは、この事か、女は手を握られたまゝぢいつとして、その手を脇へ動かさうともしない。鶴岡の胸には忽ち、劇しい動悸の躍

り出すやうな確信が生じた。そして、尙もそうつと握つたまゝでゐると、何ともいへない溫味のある、滑々した、柔かな手首の處が、若い彈力性を帶びた肉の力で鶴岡の指と指との間からはち切れさうな壓力を感じさする。やゝ暫くさうしたまゝで電車は駛つてゐた。若い異性の肉と肉との溫味のために鶴岡の手の內側には、ねと〳〵するやうな、惱ましい、堪へられない脂汗が流れた。

やがて電車が五軒町、石切橋と二つの停留場を過ぎて、ぼつ〳〵そこらで下車する者が多くなつて來たので、彼はそうつと、外方を向いたまゝその手を放した。

女の方でも何をせられてゐたのか、少しも知らぬ風にしてゐる。彼はいよ〳〵自信を堅くした。

間もなく江戶川橋まで來ると、女は、向うからはじめて口をきいて、

「わたし此處で降ります。」

と、低聲にいつて膝に載せてゐたメリンスの小い包を左の小脇に抱へて、さつと立ち上がつた。そして、右の手に吊り革を捉へて前を向いて立つてゐる姿を背後から見ると、羽織や、着物や、長襦袢などの振り口が幾重にも重なつて、紅い友禪の袂裡が匂

ふやうに溢れてゐる。

鶴岡は、それを見ると、「いづれは、何處の男の手に渡るのか、これを逸してはならぬ。」

といふ氣がむら〳〵と猪突の勇氣を鼓した。彼は遂に女のすぐ後から電車を降りた。

往來の大地は、一日二日前に降つた雨上りの、しつとりとした地濕りが、春の日に照されて、丁度步き加減に乾いてゐる。戶外を喜ぶ大勢の人脚繁く往き交ふ中を、鶴岡は、前を行く女を一寸後から追ひ越すやうにして、擦れ〳〵になつた時、耳に近い處で、

「一寸そこの江戶川公園に入つて見ませう。」

といつたまゝ、自分は颯々と前に行き過ぎて、江戶川橋を向うに渡ると、すぐ左側にある公園の入口を入つていつた。そして、とある木立ちの蔭に一寸立佇つて、女の步いて來る方を、不安に滿たされながら見てゐると、彼女は公園の入口を、素知らぬ顏して行き過ぎるかと思ひの外、すうつと、彼の來た後を趁ふやうに公園の入口を入つて來たではないか。鶴岡は、それをみて、胸の中で「日本國の色男は俺一人かなあ。」

といひたい氣になつて、無暗に乾く口から唾をぐつと嚥み込んだ。
そこで、女が木立の處まで來かゝるのを待つて、
「もつと、あつちの奥の方へ行つて見ませう。」
と、それからは、もう公然(おほつぴら)で少し前後に離れながら、深い木蔭のある方へと歩いていつた。

其處は舊の神田上水の堰の邊(あたり)の、ちよつとした涵養林のやうな具合になつてゐる、古くからある場處を巧に利用して加工を施し、附近の住民のために設けた子供などの遊び場であつたが、入つて見ると、思つたよりも奥が深くつて幽邃であつた。

大瀧から流れ落ちる江戸川の水路と、片つ方目白臺の高地の懸崖との中間に挾まれた狹隘地が何處までも細く續いて、それに欅だの楢などの老樹が鬱蒼として繁茂してゐた。そして熊笹や川楊などの雜木のこんもりと生え茂つた間を分けて、滔々と渦を卷いて流れる神田上水の堀割りの水は物凄いほどの勢ひであつた。公園の入口に近い一寸した廣場では大勢の子供が追驅けつこして遊んでゐたり、休息臺に凭掛つて憩うてゐる老人や、子供の守をしてゐる女などがあつた。

長い春の日は今日も又一日が漸く暮れようとして、向うの早稻田の森の彼方に佇いた太陽は、かつと一しきり夕映えながら、こちらの公園の樹林に金色の光線を輻の矢のやうに差込んでゐる。木立のところ〴〵に今丁度眞盛りに滿開してゐる櫻花が、陽の翳つたのとともに一層鮮かに浮き出でゝ見えた。それに夕暮れの薄ら寒い風がどこからともなくそよ〳〵と動いてゐる。

若い女學生が二三人並んで茂みの奥から出て來たり、書生が行き過ぎて通つたりした。鶴岡はそんな人間に出會ふと、自分一人だけで散歩してゐるものゝやうに、さつさつと足を速くして歩いた。そして、何處か小がくれた處に腰を休めて話すやうな處はないかと思ひながら、ずん〳〵樹蔭の一筋を進んでいつたが、休み石などの置いてある處には定つて誰かゞ腰を掛けてゐた。

尙ほも用水の急流に沿うた危道を傳うて奥へ入つてゆくと、樹木は一層小暗く頭上を蔽うて、左手の高い懸崖には椿の花が、薄暗い木蔭にそこら中一面に眞紅の花をつけてゐた。その崖の下の道の脇から淸水が湧いて流れてゐる。その美しさに見惚れて、後から來る女は一寸立ち止つて眺めてゐた。鶴岡もそれを見ながら歩いてゐたが、後

を振返つて合圖をしたので女は又歩き出した。そして、たうとう、その細長い公園を向うに出抜ける處まで行くと、そこは丁度大瀧の落ち口の處になつてゐた。川の向うには早稻田の新開地が見えて、日もその向うの方にもう沒してしまつた。そこまで來て見ると、何だか詰らなくなつたので、彼等は又先の道を後に引返した。木立の下は急に暗くなつて、凄じい勢ひで流れる用水に沿うた道が危險のやうに思はれた。樹木に蔽はれた崖下の江戸川の水の上では舟遊びに騷いでゐる人聲が、川向うの脊やかすやうな消魂ましい水車の響の間に聞えてゐる。そちらの方には無數の電燈が輝いてゐるので、自分達の足許の方が一層暗いやうに思はれる。歩いてゐる人影も大分少くなつた。

やがて、ある物蔭に大きな角材を横へてある處が丁度空いてゐたので、やつとそこへ鶴岡は腰をおろした。

そして、二三歩後から來た女がそこに立つたまゝ躊躇つてゐるのを勞るやうに、
「あなた疲れたでせう、こゝへお掛けなさい。」とやさしくいふと、女は、
「えゝ」と幽かにいつて、鶴岡の脇に來て腰をおろした。

鶴岡は女が膝の上に置いてゐる手を、又ぢつと執つて自分の膝のうへに持つて來ながら、夜目には一層大膽になつて、
「あなた、僕が先刻電車の中で手を握つた時には吃驚したでせう。」
と、いふと、女は暗い木の葉を洩れてくる幽かな電燈の火明の中に、極まりわるさうに、ちよいと顔を下に向けて、口の中で、
「隨分だと思ひました。」と、消えるやうにいふ。そして、彼に握られてゐた手をそうつと離した。
「あなたは雜誌など讀む方ですか。」鶴岡は訊いてみた。
「えゝ、婦人の雜誌を時々……」
「さうですか。僕は鶴岡正志といふ者です。女の雜誌には餘り書きませんが、やつばり筆を持つ人間です。安心しとつていゝです。僕は決して惡い人間ぢやありません。」
さういふと、女は、
「あたしも、そんな人ぢやないかと思つてゐました。」
といつてゐる。

夜でも陽氣が好いので、公園の中を逍遙する者があると思はれて、どうかすると幽暗い電燈の火影のさす中へ、木蔭の小徑から、ひよつと人が顯れたりした。中には自分達と同じやうに若い男女が夫婦であるのか袂の蔭で犇と手を握り合つて歩いてゐる者があつた。

繁みの向うの對岸で水車の機械の運轉する響きと大瀧の落下する水の音とが頻りに耳についてゐるほかは、四邊は寂然として、何となく物懐かしいやうな淡白い夜氣が、茫つと樹の中を立ち罩めてゐる。公園の外の江戸川橋の方で、がや／＼といふ人の聲や歩く跫音が好い加減な距離を置いて快い雜音をなして立木ごしに傳はつてくる。すぐ江戸川の向う岸の方で、

「甘あい、甘酒。……まつたく甘い！」といふ甘酒賣りの呼聲が、何となく春の宵の陽氣にふさはしい暖かさを思はせた。

鶴岡は、何かしら頻りに氣が焦立つやうな慾望が、澎湃として體の底から湧きあがつて來た。そして、今にもそれをいひ出さうとしながら、妙に自分にも似合はず臆病になつて、口に渇を覺えながら、

「あなた何處かへ行く處ですか、自家へ歸るところですか。」
と本當のことをいひそびれて、そんなことをいつた。
「えゝ、一寸親類まで。」
「何處です、親類は。」
「すぐこの上の關口臺町ですの。」
「……」彼は、それを餘所耳に聽きながら、他の事を思ひつゞけてゐた。
やがて、こちらの手を差伸ばして、一旦放した女の手を叉取つて、今度は腕のところを強く握り締めた。そして、あいてゐる方の手を女の肩に掛けて、ぢつと抱くやうにすると、女は、小さく身を縮めながら、顏を隱すやうにして、低い、力の籠つた聲で、
「そこに誰か人が來てゐますよ。」と、拒絕するやうにいつた。
鶴岡は、その耳の傍へ口を押付けるやうにして、
「ねえ、いゝでせう。」
といつたけれど、女は、ぢいつと身を縮めたまゝ默つて息を殺してゐる。

そこへ又、木蔭の向うで道の小砂利を踏む跫音が近づいた。

鶴岡は、はつと吃驚して、女の傍からついと離れた。やがて、幽暗い電燈の火影に立ちあらはれた人間は、たゞ一人暗いところに煙草の火を赤く燻らしながら、じろじろと彼等の方を探るやうに眺めながら、前を通り過ぎて小徑の奥の方へ這入つていつた。

鶴岡は、やゝ暫く、それが遠くへ去るのを待つて、女はと見ると、女は先刻(さつき)のまゝ微動(みじろぎ)もせずに凝乎としてゐる。

四五分の後鶴岡は起き上がつて又腰を掛けながら妙に暗がりの中で一人で照れたやうな氣持になつてゐた。

無鐵砲のやうでも、又熱情家の弱い氣分のある鶴岡は、木の葉を洩れてくる蒼白い電燈の火影を浴びながら、ぢつとしてゐる女の後姿を見ると、急に、なんだかひどく済まないことをしたやうで、氣の毒とも可哀さうとも區別のつかぬやうな氣がむらむらとこみ上げて來た。

それで、又傍に寄つていつて、頭の後から、そうつと耳の傍に口を持つていつて、左の手で輕く背中に觸りながら、

「君、どうかしたのですか、苦しいの。」と、やさしい氣持になつて訊ねた。

女は、それでも何にもいはずに俯ほ暫く二つの袂の上に顏を伏せたまゝ切なさうな息をしてゐたが、やがて鶴岡の方を見て、

「どうぞ、こんなことを他の人にいはないで下さいね。」

と念を押すやうにいふ。

「誰にもいふものかね。僕は、決して……」

それから少しづゝ話すと、女は伊勢の山田の者で、叔父さんが三河島の先の尾久の方に煉瓦の製造工場を持つてゐるので、そこへ寄寓して東京へ色々な事の稽古に通つてゐるのだといふ。この目白臺にゐるのは叔母さんで、今晩はその叔母さんの處に行くところであつた。

それから、名は何といふのかと訊くと、女は稍しばらく默つて考へてゐる風であつたが、

「わたし、鵜飼八重といふんですの。」と身體に姿態をして云ふ。
「三河島の叔父さんの處もやつぱりその姓ですか。」
女はそんなことを餘り委しく訊かれるのを當惑さうにして、
「えゝ……。それは違ふんですの。」
「ぢや何といふのです？」
「……………」
「だつて、貴方の名だけ知つてゐても、居る處が分らなけりや手紙を出すことも、訪ねて行くことも出來ない。あなたは、このまゝ、これつきりに別れて去つてしまふつもり？」
鶴岡は穩かにさういふと、女は、澁々した調子で、
「でも、もし、こんな事が叔父さんにでも分つたら大變ですもの……」
「だつて分る筈がない。」
「ぢやねえ、申しますから、どうぞ手紙は寄越さないやうにして下さい。若し他の者の手に渡るといけませんから。…尾久の渡しをご存じですか。」

「えゝ、あの千住の上の方の隅田川の渡しでせう、知つてゐる。」

「あの渡しから一寸王子の方に來た處の、もつと北の方に寄つた川に沿うて煉瓦の大きな工場があります。鈴鹿煉瓦工場といふ札が出てゐます。」

「ぢや、僕の方からは別に手紙は出しませんから、あなた、東京に出て來た時に僕の方に來てくれませんか、僕の所は此處です……」といつて、鶴岡は名刺を取り出して見せ、「僕の方へは手紙を寄越してくれたつてちつとも構はないんだから、どうぞ手紙を下さい。」

女は名刺を手に取つて一寸見てゐたが、そんな物を不用意に帶の間や、懐中入の中に藏つて置くのは劍呑であるとでも思つたのか、

「分りました。」といつて、その名刺を又鶴岡の手に返した。

「叔母さんの處へ行くのが遲くなつたでせう。僕そこまで送つていつて上げませう。」

といふと、女はメリンスの小包の端を弄りながら、

「どうせ、今晩は泊りますからそれは構はないんですけれど、それでは貴方叔母さんの家の傍まで來ないやうにして下さい。」

「あゝ、そりや行かない。」

それから彼等は薄暗い樹蔭の道を出口の方へ歩いて來た。公園の生垣のすぐ外の處にある寄席では、何か色ものでも、今丁度演じてゐると思はれて、三味線や太鼓を入れて陽氣に囃してゐるのが面白く聞えてゐる。

やがて出口の處に出てくると、まだほんの宵の口なので、江戸川橋から音羽の九丁目あたりには春の夜のそゞろ歩きの群衆が往來に溢れてゐる。

「わたし、少し離れて歩きます。もし叔母さんの家の者にでも見つかるといけませんから。」

といつて、女はそこから一人先に立つて、さつ〳〵と歩を速めた。

鶴岡はそのまゝ別れてしまふのが、ひどく飽氣なくつて、殘り惜しかつたが、これから先のことを思つて、大事を取るには、どうしても、今は、さうして置かなければならぬので、自分は關口臺町の暗い通りを女から二三間後になつて歩いた。やゝ暫く往つて、やがて道が廣い新道と一緒にならうとする邊まで來ると、女は一寸後の鶴岡の方を振返つて見て、その邊の勝手をよく知つてゐるやうに、家と家との間の、とあ

る細い路地を、どん／＼向うへ這入つていつた。鶴岡もそのとほりに蹤いて行くと、路地はすぐ盡きて、そこを出拔けると、廣い坂道が遠く音羽の通りの方へ延びていつてゐる

女は路地の出口の石段を四つ五つ踏んで、その大道に降りると、すぐ又それを筋向うに横切つた。そして又そこでも石段を少し登つて、何處かの大きな邸宅の裏側でゝもあるらしい板塀と、片側は四五軒小家のならんでゐる處を通つて、そこからまた幾度も左に折れたり右に曲つたりして、ずん／＼往く　いくらあたりの陽氣な春の夜だといつても、よく若い女一人で（もつとも後から鶴岡が附いてゐるのではあるが）氣味が惡くないと思ふやうな、見上げるばかりの大きな欅だか銀杏だか知らぬ樹木が何本も眞暗に空に覆ひかぶさつてゐる坂塀や赤煉瓦の塀がつゞいて、晝間でも、そこらは餘り日の當らない處と思はれて、何だか濕つぽい苔のやうな臭ひが夜氣の中に漾うてゐる。

鶴岡は心の中で、あの女は一體何だらうかといふやうな氣も手傳つて尙ほも蹤いていくと、ちよつとした、もういゝ加減古くなつた板塀の處まで行くと、女はその手前

ではたと立ち止まつた。黑ずんだ板塀の上には、もうおほかた萎れ落ちた白木蓮の木が大きく目じるしのやうに枝を翳してゐる。女は、そちらを指さして、
「あの家ですから、どうぞ此處までにして下さい。」といふ。
鶴岡は女と肩を並べて立ち乍ら、
「うむ。」とうなづいて、ぢや僕はこゝから歸るから、ぜひ僕の方へは手紙を寄越してくれたまへ。」
女は「えゝ」とも何ともいはずに、「ほんならこれで御免なさい。」といつて、そのまま行かうとするのを、鶴岡はいきなり女の手を捉つて、強く握手した。そして、ついでに女の顏の處に自分の顏を持つていかうとすると、女は慌てたやうに握られた手を振り切つて、顏を外方にそらしながら、
「こゝでそんなこと、いけません。」と、小聲で強くいつて、もう颯々とその板塀の門の中に駈込んでしまつた。
鶴岡は、一寸呆氣に取られたやうに、そこに突立つてゐたが、やがて門の前を二度ばかり往きかへりして見て、たうとう其處から出て來た。

彼はそれだけの事を語りをはつて、まるく肥つた、嚴めしい、赤い顏に不似合な微笑を湛へて、

「はゝゝゝ」と笑つた。

始終興味の眼を以て聽いてゐた田原もそれと一緒に笑ひ乍ら、

「ふむ。」と感心したやうに、一つ大きな溜息を吐いて「君は想像してゐたのと違つて實に驚くべき手腕家だなあ。そして、その後をどうした？」

鶴岡は笑ひながら、

「あとは、それつきりだ。」

「それつきりつて、それが一度つきりなのか。」田原は好奇心に釣られたやうな顏をして訊いた。

「うむ、それつきりだ。」鶴岡は、もう隨分前のことでもあるし、少しも念ひの殘つてゐないやうにいふ。

田原は、又、人の事ながら口に水を溜めるやうに、じつと思ひしめながら、

「だつて、それつきりにするとは惜しいぢやないか。手紙も寄越さず、會ひもしない

のか。」

「うむ、此方から一度その煉瓦を製造してゐる處を訊ねていつたことがある。」

鶴岡はそれから、その女の事が忘れられなくなつて、今日は手紙を寄越すか、明日は自分で訪ねて來るかと毎日々々心待ちにして樂しんでゐたが、三日過ぎ、五日經ち、やがて十日が半月になり一月になつても女からは手紙も何にもよこさなかつた。それであんなにおぼこ〳〵して見せても、その實どんな擦れつ枯らしだか知れたものではないと思つてみたりしたが、しかし、若しそれにしては、向うから必ず何とか音信をしさうなものであると、あれから丁度一と月ばかり經つて、その叔母の家だといふ家に往つて、門のまはりに暫く立つて樣子を窺つてゐたこともあつたが、家の中はひつそりとして、何の聲も洩れて來ない。あの時闇の中に仄白く見えてゐた白木蓮の花は一とひらも殘らず綺麗に散り落ちてしまつて、たゞゆく春の名殘りを惜むやうに柔かい色をした新綠が枝を飾つてゐるばかりであつた。鶴岡は、まさか門の中に入つて訊くこともならず、そのまゝ空しく引返へした。

そして、その翌日今度は、わざ〳〵三河島の先の尾久まで出掛けて往つた。いつて

見ると、なるほど女のいつたとほりに、尾久の渡しからは大分まだ王子寄りの荒川邊に可なり廣い地面を取り圍んだ煉瓦の製造場があつて、嘘ではない、鈴鹿煉瓦工場といふ大きな札が表門に掛つてゐた。作業中無用の人入場を禁ずといふ別な木札がその傍に打付けてあつたが、鶴岡は、構はずその門を入つて往くと、廣い空地には、そこら一面にまだ生乾きの粘土の煉瓦が乾してあつて、何處に人の住ひがあるのか一寸分らなかつたが、その脇を通り越して、ずん〳〵奥へ入つて往くと、事務所風になつた帳場のやうな處があつて、その後の方に住居があるらしい。かうしてゐる間に、うまく女に出會せばいゝがと思つてゐたが、彼は先づその事務所にいつて、事務を執つてゐる四十近い男に、自分は土木の方の工學をやつてゐるものであるが、お邪魔ですけれど一寸此方の煉瓦製造の模樣を見せてもらひたいといふと、向うは少しも疑はず丁寧に案内して内部の燒く所などを一巡見せてくれた。そのために鶴岡は却つて腹の中で、どういつて女の事を訊いてみようかと、長いこと話しのつぎ場に困つて考へてゐたが、構はない、思ひ切つて訊いてみてやれと、何の氣なく、たゞ輕く、「こちらに鵜飼八重さんといふ娘の人おいでゞすか。」と、いつてのけた。

すると、その四十年配の男は叔父ではなかつたらうが、
「えゝ、その人此方に居ますが、もう半月ばかり前國へ歸つて今居ません。」と、向うも何の氣もなささうにいつた。
それで、鶴岡は、心の中で「はゝあ、ぢや全く嘘ではなかつたな。」と思つた。それから尚ほいゝ加減な出鱈目をいつて、暫く煉瓦の話などをして、やがて失望しながらそこを出て戻つた。
「それつきりは殘念だつたなあ。」と、鶴岡よりも田原の方がさも惜しさうにいふと、鶴岡は、
「そいつは、しかし、あんまり僕の方でも惜しいと思はなかつた。それよりも僕の方からひどく慕れてゐた女の後を追掛けたことがある。そんな時には何物を措いても、その一事に僕は熱中するから。」といつて、鶴岡が又語り出したのは、
それはまだ三四年前の事である。赤坂の不見轉藝者に鶴岡のひどく慕れてゐた女があつた。無論向うでも彼を嫌ひでなく、その馴染みは一年餘りも續いてゐた。女は名古屋の産れで、色の白い、目鼻立ちのぱつちりした、どこか、もう子飼から花柳界の

水で洗つたといふやうな、不見轉藝者にしては、なか／＼馬鹿にならぬ容色を具へてゐた。どうせ鶴岡のことであるから餘り一流の待合へもゆかなかつたらうが、それでも、どうかして相當な家へ人に御馳走になつて行くやうなことがあつても、彼は、いざ泊つていかうといふ段になると、必ずその妓を名指しで招ばした。

「へえ、ふじ尾さん。何だか聞いたことのある名のやうでもある。」

といつて、待合の女中が頻りに首を傾けた揚句、

「手前どもへその妓はあんまり來ないんですよ。ほかに誰か好いのを招びませう。どんなのがようござんす。」

といふ場合になつても、彼は色氣も遠慮もなく駄々を捏ねて、その妓を招ばした。一緒に遊びに行く友達や雜誌社の社長などが、

「あんな女は止せ。見つともないぢやないか。」

といつても、鶴岡は頑として聽かなかつた。そして、

「俺は不見轉でああらうが何であらうが、そんな世間體などどうでもいゝんだ。僕自身に氣に入つてさへ居ればいゝんだ。」といつてゐた。

その女は餘りに不見轉がはげしいので、一つ家にゐる他の妓達までから卑しまれ侮られて、たゞ一人除け者にせられてゐた。變り者の鶴岡はそんな所にも大いに同情を寄せてゐたのである。

すると、ある時のこと、不斷から餘りにその行爲が劇しいので眼をつけられてゐた彼女は、現行犯で刑事に踏み込まれ、赤坂警察へ二十日間の拘留に處せられた。その體刑を免かれるには僅かに五十圓の金があればいゝのであつたが、その金の出所もなかつた。抱主へも幾らかの借金があつた。彼女は鶴岡の處へ窮狀を訴へて來た。その時分彼にとつても五十圓の金はなか〳〵の大金であつた。いろ〳〵苦心慘澹の末古い飜譯物のやり掛けがあつたのを探し出して、それを完結してある處へ持つて行き、役に立てると立てないとに拘らず、それでやつと七十圓ばかりの金に換へ、早速その五十圓を懷にして赤坂警察署へ行き、彼女を拘留から救ひ出してやつた。

女はひどく悅んで、この御恩は私の一生忘れませんといつてゐたが、それからひと月ばかりも、前と同じやうに商賣はしてゐたが、とても先のやうにはゆかなかつた。隨分借金や何かに困つてゐるやうであつたが、鶴岡にそれをどうしてやるといふ金も

なかつた。そのうち、ぽいと、女は赤坂から形を消してしまつた。

鶴岡は、それを知ると、あれほど親切を盡してやつてゐたのに、この自分に默つて何處へ行つたらう。尤もこの間から、東京に居つても詰らないから名古屋の方へ歸るといつてゐた。それで鶴岡は行きつけの待合にいつて樣子を訊いてみると、果して四五日前に國元の名古屋とかへ歸つたといふ話である。

女の方でも、鶴岡が眞實賴りになる人間ならば、そんなに無斷で國へ歸つたりする筈はないのだが、氣立てや男振りはとにかく、鶴岡にはとても、安心して彼女の一身を託するに足るだけの金力がないのを夙に見越してゐた。それで彼女も心にはまことに相濟まぬと思つたが、生半鶴岡に會つてそんな話をするよりもと、無斷で、そのまま歸つてしまつたのである。

鶴岡の方でも、女は俺に金がないので賴りにならぬと思つてゐるといふことは知つてゐた。

「わたし、そんなにお金なんか欲かないわ。だけど貴方のやうに金を欲しがらなくつても困るわねえ。」と、よく云つてゐた。

彼はそれで、女が自分に對して一言の挨拶も云はず出拔けに東京を去つてしまつたことを怨むこともなかつたが、彼女の縹緻、肉體、そして憎むところのない性情などをあれこれと思ひ起して見ると、どうしてもそのまゝに打遣つておけなかつた。

歸るならかへるで可いから、私はこれ〳〵の譯で國へ歸りたいと思ふと、一度逢つて腹藏なく打明けた話をして聽かすなら、それを、どうしても歸さぬといひはせぬ。又いくら此方で歸さぬといつたところで、それなら金でどうかして遣れるかといふに、それは情けない譯だが今の自分には力に及ばぬ。たゞ一寸でもいゝから互ひに別れの言葉を交はしたかつた。さうでないと鶴岡は、このまゝ消えるやうにいつてしまつたのでは諦めようとて諦められなかつた。

いよ〳〵女が名古屋へ歸つたに相違ないことを確めると、彼は早速それから後を追掛けて名古屋まで行くにはどうしても參拾圓くらゐの金は用意しなければならぬ。彼はさうひと度決心すると、此度はそれだけの金策をするために殆ど必死の才覺をしてやつとそれだけ旅費が調ふと、その夜の汽車で直ちに名古屋に向つた。

かねて女から、折につけて自分の親元のことは話して聽かされてゐたので、先づ第

一に其處を目あてに訊ねようとして、翌曉まだ薄暗いうちに汽車が名古屋驛に到着すると、停車場の物賣場で名古屋の地圖を買つた。それから電車の線路を調べてみると、女から聽いて手帳に書留めてゐる町の名が、地圖の上ではその線路と餘り遠くない處にあることを發見した。

それはもう十一月の中頃で、初冬に近い拂曉の街區には淡白い朝靄が場末の家並を一面に鎖してゐた。

朝早い電車に乘つてみると、さすがに東京と違つて客もそんなに混んではゐなかつた。線路は何でも停車場から市街の西北に向つて走つてゐるらしく、やゝ暫く軒の低い穢い裏町のやうな處や、田圃を埋め立てゝそこに新しい家を建てかけた處などを行くと、間もなく、市街に近接してゐる新開地に到つて電車は停車した。そこがその方面の終點であつた。鶴岡は、なるほどこれでは東京から比べると名古屋は小さいものだと思ひながら、電車を降りると、それでも向うの往來べりに辻俥の帳場らしい處があつて、二三人の車夫がもう出て客待ちをしてゐる。

その傍に寄つていつて、これ／＼の町へ行くのだが行つてくれるか、そして、こゝからどのくらゐあると訊ねると、そこまではまだ七八町くらゐある、賃銀は參拾錢だと向うからいふ。彼はそのまゝ俥に乘つた。手帳に書留めてゐるその町はすぐ知れたが、何千何百何十何番屋敷といふ番地は容易に分らなかつた。まるで本所か深川の先の方にでもありさうな、ごちやごちやした長屋建の家が迷宮の中に入つたやうに次から次へ續いて車夫は一つ處を何度も往つたり戻つたりして、やつとこさ訊ねる番地を探しあてたが、そこにはもう女の親は住んでゐなかつた。此處がその番地といふ家のあたりはもう建てゝから隨分古くなるらしく今住んで居る家では荒物を賣つてゐた。

「こゝが原籍になつてゐるんだがなあ。」と、鶴岡は獨語（ひとりごと）をいつてやゝ暫く沈吟してゐたがやがて氣を取り直して、

「可矣（よし）。こゝの區役所は何處だ。ついでに區役所まで行つてくれ。」

と車夫に命ずると、東京とちがつて丁寧な車夫は、

「こゝはまだ市にはなつてごはりまへんでせう。郡部になつて居りますから、原籍なら村役場に往つて訊かにや分りまへんでせう。」といふ。

なるほど、うつかり考へてゐたが、さういへば、郡部に屬してゐるのである。その村役場のある處まで、こゝからどのくらゐ道程があるかと車夫に訊くと、一里半は十分あるといふ。そしてその方面には電車の便もなかつた。

「どうだ、お前ついでに往つてくれるか。」

「えゝ、參りましてもよろしうございます。」

それから村役場まで往復乘ることにして新に賃銀を定めて、そこから直ぐ又村役場まで車を走らした。

車夫の、問はず語りの話では、その街筋の街道をずつと往くと、例の木下藤吉郎の生地で名高い尾張の中村はその先の方にあつた。格別見るやうな處もない平坦な田圃の中の一と筋道を、車夫は太閤樣の古い事などを、べら〳〵話しながら走つた。往還の左右には處々、何を掘つた跡か田圃の中に大きな池のやうな水溜りが出來て、それに一面蓮が生えてゐるのが、もう、すつかり茶褐色の枯れ葉になつてしまひ、水の面に浮びながら、冷たさうな小波と一緒に搖れてゐる。

街はづれの人家は暫く途切れてゐたが、やがて又小さい宿めいた處に車は入つてい

つた。それから問ひ〳〵行くと、そこの古い寺の中に村役場があつた。
村役場にいつて古い戸籍の臺帳を調べてもらうと、女がいつてゐたとほり、今往つた處に、ちやんとまだ原籍はあるにはあるが、それから先何處へいつたか分らない。鶴岡は暫時途方に暮れたが、村役場の者のいふので、それはやつぱりもう一遍先に居た處に往つて、其處らを管轄してゐる警察署にいつて訊ねた方が分るかも知れぬといふ。鶴岡は、それも覺束ない話だと思つたけれど、その場合他にいゝ智恵も浮ばないので、又ぞろ待たして置いた俥に乘つて一里半からの道を先の處に取つて返し、そこらを管轄してゐる警察の分署にいつて訊ねてみた。
巡査は、默つて鶴岡の訊ねる人間の名を聽き取つてゐたが、やがて立つていつて、書棚のやうな處から大きな姓名簿を幾册も取り出して來た。そこで鉈豆の煙管でふかふか煙草を吸ひながら、頻りに繰り披いて見てゐたが、
「ふむ」と獨言のやうなことをいつて、その後から、
「それは商賣は何商賣をしてゐたか。」と鶴岡に訊ねた。けれども彼は、女の親が何商賣をしてゐたかといふことまで確めて居なかつたので、

「さあ、商賣は何でしたか、それはちよつと分り兼ねますが。」といふと、巡査は、「古物商だ。……この人間だらう。」といつて、住居人の姓名簿を鶴岡の前へ差出して見せてくれた。

それには、古江庄三郎と記してある。まぎれもない、女から聽いてゐる彼女の父親の名である。鶴岡は、

「えゝ、それです。」といつたが、腹の中では、古物商といふから、これは骨董屋といふよりも紙屑買ひの方に近いなと思つてゐた。

「それなら餘り遠くへ變つてはゐない。」と、いつて、今度は異つた姓名簿を披いて見てゐたが、「うむ」と、獨言をいひながら、「此處だ。管轄が違つてゐる。」といつて、そこから又十四五町ばかりも北の方に寄つた處に在る警察分署にいつて訊いて見たら分る筈だと教へてくれた。

さすがの鶴岡も昨夜は汽車の中で碌に眠らなかつたので大分疲勞を感じてゐたが、先刻から伴れてゐる車夫が自分も乘りかゝつた船といふやうな呑み込み顏をして、巡査の話を聽くと、

「私知つてゐます。」と、うなづいてゐるので、鶴岡はもうその俥を、女の居處の知れるまで買ひ切りのつもりになつて、そこから又驅けさした。

此度の警察分署にいつて訊くと、古江庄三郎の住居の處番地はすぐ分つた。車夫はそこから又鶴岡を乘せて走つた。そして、其處は名古屋の練兵場に近い裏町はづれの南鷹匠町といふ處であつたが、たうとう、やつとのことで探しあてゝいつてみると、それでもまるつきりの紙屑屋でもなく、それでも、やつぱり古物商は古物商であつたが、九尺間口の軒の低い店先には、ごた〳〵と、ちぐはぐになつた銚子とか鐵瓶のやうな物を並べたり、得體の知れぬ古渡りまがひの南京の鉢などを置いて、そのうへから瓢簞をぶらさげたりしてゐる。狹い、猫の額ほどの土間を入つた、低い上り框の處に萬年青の鉢などを飾つて、その後の方の壁には安物の書畫の幅を掛けたりしてゐる。

鶴岡は、俥を外に待たしておいて、

「ご免。」と、聲を掛けながら店の土間に入つた。

すると、馬の尻尾のやうな長い拂子を柱に懸けてある、汚れた芭蕉布の暖簾の奧から、寢呆けたやうな返事がして、やがて、のつそり立ち顯れたのは、もう年の頃五十

前後と見える、顏色の勝れぬ、頭髮を手束ねにした古嬶であつた。
「はえ」と、ちよつと顏を下げるまねをしながら、上り框の處に置いた常滑燒の火鉢の向うに來て坐つた。
　鶴岡は、腹の中で、これが、あの女の母親だらうかと思つて、それとなく、じつとよく見ると、成るほど親子は爭はれぬ、名古屋生れの女によく見る、目頭の切れめのすうつとしたあたりなどが、若いと老いとだけの相違で瓜二つといひたいほどによく似てゐる。鶴岡は、自分の慕れてゐる女も年を取つたら、やつぱりかうなるのかとおもふと、百何十里の遠方を夜汽車に乘つて、わざ〳〵後を追掛けて來た、流石の戀がその爲に大分索然としたやうに思はれた。それでも、もう臺なしになつてゐるが、お召か何かの、すくんだ半纏のやうなものを引被けて着物も何か柔かい物を着てゐた。鶴岡にはそれが、たゞ、ずぶの田舍者ではないといふやうに思はれた。
　そんなことは顏にも見せず、鶴岡は、例のさつぱりした調子で、
「ちよつとお訊ねしますが、古江きぬといつて、近頃まで東京へ行つてゐた人の親達のお家はこちらですか。」

打切ら棒な言葉を故意と丁寧にしたやうな調子でさういつて訊いたので、古道具屋の女房は、東京へ往つてゐた娘が何か又尻金でも背負つて歸つたのではないか、いづれにしてもこんな男が名をいつて探ねて來るのは、何か譯があつてのことゝ、すぐきづいたと思はれて、はき〳〵せぬ顏をして、

「えゝ手前どもですが。……何か御用でも？」

といつたきり、後なんにもいはずに默つてしまつた。

鶴岡の方でも、早くもそれを察したので、向うに此方の誠意を見せるのはこんな場合だと思ひ、自分はこちらの娘とは、これ〳〵の事情で知つてゐる者で、決して迷惑などかけるやうな者ではないから、東京から歸つて、此方にゐるか、何處にゐるか、どうか居る處が分つてゐるなら、ぜひ包まず教へてもらひたいと、熱情をこめて一伍一什を語つて聽かすと、母親の心も、それで大分解けたらしく、

「娘は東京から歸るには歸りましても、手前どもへはあんまり來まへんよつて、親でありながら、どうして居ますのか委しい事譯は一向知りまへんが、私の處でお訊きになりますよりも、榮町の花房さんといふ家へおいでになつてお訊きやしたら委しいこ

と、よう分りますでせう。」と、變に名古屋訛の耳につく言葉でさういふ。

榮町といふのはお茶屋か抱へ屋であることが分つた。

鶴岡は又店の外で待つてゐる車夫の方を振返るともなく振向くと、店が淺いので、中の話をそつくり聽いてゐた車夫は、

「榮町なら、よう分つてゐます。」と、肯きながら云つた。

そこで鶴岡は又俥に飛び乘つて、今度はその榮町に向つて走らした。車はそれから段々今までとちがつて賑やかな陽氣な街筋の方へ出て來た。

榮町の新町で花房といふ抱へ屋はあまり大きな家でもなかつたが、すぐ分るにはわかつた。鶴岡は、その時もう二時を過ぎてゐたので、そこで俥夫に禮をいつて五圓札を一枚遣ると、彼の方でも禮をいひながら歸つていつた。

それから花房といふ家に入つていくと、好い具合に、その家の女主人と見える四十餘りの女がゐて、會つてくれた。いづれ勤めの揚句の女で、やつぱり名古屋型の意氣な目鼻立ちの顏をしてゐた。それでも、こちらの話をすると、よく物事の解る女と思はれて、

「へえ、あのお絹さんかえも、あの人今度東から歸んなはつてから、私の内には居いしませんけど、以前私の所から出てゐましたものやで、一寸身の上の事で相談に乘りました。」

といつて、今住んでゐる處を教へてくれた。その女主人の口振りでは、今度東京から戻つて來たのは、以前この土地に居た時分の旦那に頼んだものらしく、その仲に入つて口をきいたのが先の抱へ主の花房の女將であつたらしい。

とにかく嘘を商賣の資本と心得てゐる花柳社會の者に似ず、さつぱりしたことをいつて聞かしたので、鶴岡の方でも、ひどく好い心地になり、お邪魔になつた禮をいつて、花房をそこ〱に出て來た。

そして、朝からまだ何にも腹に入れてゐないので、やつといくらか氣が緩むとともに道を歩いてゐる中に、俄に空腹を覺えて來た。すると、丁度そこらに手頃な小料理屋があつたのでそれへ入つて、ゆつくり腰を据ゑて十分飲んだり食つたりして、一時間ばかりして其處を立ち出でると、先刻花房で訊いた女の處へ行くこともゆくことだが、此市の扶桑新聞には東京で同じ雜誌社に居た先輩が主筆をしてゐるので、女の

處よりも一寸そこへ行つて見る氣になつて、丁度そこへ來合はせた電車に乘つて、その新聞社に訪ねていつた。
丁度主筆の春日君も來合はせてゐた。
「やあ！」
「やあ！　めづらしいな。何時？」
「今朝。」
「何か急用で？」
「いや、格別用事でもないが、女の後を追掛けて來た。」
さういふと、春日君は、
「はゝゝ」と、高い調子で愉快さうに大笑ひを發し、
「女の後を追掛けて來た、はゝはゝ。君は外見に似ず大變な色男だな。それは面白い。
そしてその女にはもう會つたのか。」
「うむ、まだ會はない。」
「會はない。そして會へる見込みはあるのか。」

「うむ、それは無いこともない。實はこれから往つて會はうと思ふんだが、今朝汽車から降りると、その事で名古屋中を駈け廻つてゐたのだ。やつと、女の居る處が知れたから、それで一寸安心して、あなたの處へ寄つたのだ。」
「うむ、それは有望だ。ぢや、早く往つてその女に會つて來たまへ。それから、久し振り何處かへ夕飯でも食べに往かう。」
新聞社の主筆室で暫く雜談をしたあと、春日君は、
「しかし、僕と一緒の夕飯よりもその女と逢ふ方が君には遙かに興味が多いわけだ。君のお樂しみを妨害するのは大に野暮だな、はゝゝゝ。」さういつて、又大きな聲で笑つた。
鶴岡も笑ひながら、
「いや、その女はその女。此方はこちらで別だ。僕は名古屋の一流の女が見せてもらひたいんだ。」と無遠慮にいふ。
「はゝゝゝ、氣が多いな。」と、春日君は笑つて、「それぢや、これから電話を掛けておいて、精々一流所を見せることにする。」

といつて、それから春日君はまだ用が濟まぬので、一寸途中でほかへも廻つて、もう二時間ばかし經つたらこれ〳〵の處にいつてゐるから、鶴岡にも其處へ是非來るやうに約束して、やがて彼等は新聞社で別れた。

鶴岡は外に出ると、まだやつと四時を過ぎて間もないと思つてゐたのに、短い晩秋の日はもうとつぷりと暮れて、市街は暗に被はれ、明るい電燈が輝きはじめた。花房で訊いた女の處へ往くには、今からいつたのでは、もし拇指でも來合はせてゐたら首尾が悪いと思つて、どうしようかと道を歩きながら一寸躊躇つたが、しかし、もうそんな旦那が出來てゐるなら、此方でどうしようつたつて爲方がない。折角さうして納まつてゐる女の幸福を妨げるのも要らぬ罪つくりである。

さう思ひ直してみると、自分の心さへこの通り潔白であるなら、たとひ拇指が來て居たつて構ふことはない。たゞ一寸でもいゝから會つてみたい。そして早く春日と約束した處へ往かうと決心をして、そこらの街辻にゐた車夫を呼んで俥に乘つた。

女の住居といふのは、名古屋の本町通りから大須の觀音の方に入つてゆく途中にある、閑靜な寺町の間に挾まれて飛地のやうに、ところ〴〵明るい意氣づくりの家立の

見える、その一廓に在つた。俥から降りて、先刻花房で訊いた番地を暫くあちらこちら探してゐるうちに間もなく門のところに出てゐる軒燈の名まへですぐ知れた。そこらは、殊にもう夕方なので人の往來も稀であるし、寂然として掃除のよく行き屆いた土塀つゞきの町に不似合ひな、ところ〲蠣殼のやうな物が附着いてゐる船板塀に、お誂へどほりの見越しの松が中から枝を翳してゐる家がそれであつた。

　鶴岡はそれでも流石に、そうつと足音を忍ばす氣になつて、低聲で賃銀を拂つて車夫をそのまゝ返し、自分は、ちよつとどぎ〲胸を躍らせながら、門を入つて三つ四つ敷石づたひに意氣な格子づくりの入口に立つて、腹の中で、

「あの女、こんないゝ處に納つてやがる。やつぱり女の方が俺より偉い」と思ひながら、「ご免。」と、盗むやうな心地で中くらゐな聲を掛けた。

　すると、割合に奥が近いのか、たつたその一聲で、やがてさら〲と疊をふむ足音がして、玄關の障子を開いて膝を突きながら顏を出したのは、まだ十五六の小婢であつた。そして、見知らぬ鶴岡の顏を一寸見て、兩手を突き、

「おいでなさんし、どなたさんでございます。」と、あどけない口を利いた。

對手がまだ子供なので、鶴岡は何といつて口を利いたものであらうかと、一寸考へたが、構はず、

「おきぬさんといふ人居ますか。」

と訊ねた。

「あの、姉さんかえなも。」

「あゝ、さうだ。」

「ちよつと待つて……」

と、ひとり言のやうにいつたまゝ、小婢は襖の彼方に入つていつた。

奥で何かこそ〳〵口をきゝ合つてゐるやうであつたが、やがて今度は自分でそこに立ち表れたのは、女であつた。彼女は玄關の薄暗い處に鶴岡の顔を見ると、驚いたやうな、悦んだやうな、一寸義理の好くないことをしてゐるので申譯のないといつたやうな、複雑な心持を面に浮べながら照れた笑ひ様をして、

「まあ！」と、愼しい低聲にいつて、障子際に來て坐つた。

「何時いらしつたの。」

鶴岡は靴脱石の前に棒の樣に立つたまゝ、
「今日來た。」
「今日いらしつたの。まあ、さう。……よく此處が分りましたわねえ。……何處でおきゝになつて。」
「それで大變に苦心したさ。」
「まあ、さう。……よくいらしつたわねえ。さあ、まあお上んなさいな。」と、女は調子よくいつたが、こちらの思ひ做しか、何處やら氣を兼ねてゐる樣子が見える。
鶴岡は、やつぱり棒の如く突立つたまゝ、
「だつて君、僕がこゝの家へ上つたりなんかしては大變だらう。」といつて、よく揃つた白い齒を出して、嚴い顏を笑つて見せた。
すると、女もそれとともに妙に笑つて見せながら、
「でも一寸ぐらゐ構はないんです。まあお上んなさいな。」といつて勸める。
「さうかね、構はないの。ぢや一寸失敬する。」
さういつて、鶴岡は玄關を上り、女の後について襖の奥の茶の間に通つた。女は手

早く自分で、そこに有合せた座蒲團を取つてすゝめながら、鶴岡の顔を見て、

「わたし、あなたの處へ一遍手紙を上げなければ濟まないすまないと、始終心の中ではさう思つてゐたんですけれど、急に話が極まつて此方に歸ることになつたものですから、……此處へ越して來たのも、やつと昨日だつたか……いや、一昨日よ。ですからまだ、ちつとも落着かないの。」

さういひながら女はいそ〳〵して、まだ買ひ立てらしい長火鉢の火を搔きおこしたり、鐵瓶に觸つてみたりして、火鉢脇の茶簞笥から茶器を取り出して茶を入れて薦めた。

そんなことをする手つきや、口のきゝやうまでが、見ると頭髮の形こそ先に赤坂にゐた時のまゝの束髮であるけれど、何となく急にませて大人振つて來たやうに思はれる。

鶴岡は默つて女のいふことを聽きながら茶を一口飮んで、

「それはもういゝさ。しかし、時間が丁度今時分だから旦那がやつて來やしないか。」

「うむ。」と、女は頭振りをふつて、

「今日伊勢の方に行つた筈だから今晩は歸つて來ないでせう。」
女は更に言葉をつゞけ、
「でも、よく、私が此處に居ることがお分りになつたわねえ、何處でお訊ねになつて？」
「うむ、それで今朝名古屋に着くと、やつと今先まで一日がゝりで名古屋中を駈けずり廻つてゐた。市中ばかりぢやない、太閤樣の產まれた中村の方まで往つて來た。」
「まあ、隨分ねえ。何故そんな遠くの方まで。」
「だつて、君のお父あんの原籍を調べるには彼處の村役場まで往かなければならないぢやないか。」
鶴岡はそれから、今日朝から方々に飛び廻つた事を話して聽かせた。
女は、鶴岡をそんな目に遭はせて、氣の毒でもあり可笑しくもあるといふやうに笑ひながら、
「まあ、それぢや隨分だつたでせう。……お父さんの家大變な立派なお店でせう、ほゝゝ。」

と、彼女は一寸顔を赧くしながら、さういつて笑つた。
「うむ、それでも君のお母さんはよく話をしてゐると、惡い人間ぢやないよ。」
「えゝ、それはいゝの。あんまりお人好しなものだから、年中困つてばかりゐるの。」
彼女は暫くそんなことをいつてゐたが、やがて氣の付いたやうに、小婢の名をいつて呼んだ。すると小婢はどうしたのか、先刻一旦玄關に出て來て、又奥に入つたきりそれから鶴岡が座敷に上つて來た時から姿を見せないと思つてゐたら、名を呼ばれてから二度めか三度めに、やつと薄暗い臺所の隅の方から、
「へえ。」と返事をした。
「おしもやん、あんた、まあそんなとこで何してなはるのやな。」女がさういつて聲を掛けたので、おしもやんと呼ばれた先刻の小婢はやつと、のつそり臺所から出て來て、茶の間の向うの隅にきちんと坐つた。
「あのなあえも、あんた、えらい御苦勞さんやがなあ、一寸そこの鳥文まで往て來てえな……、それ一昨日往てもろた、あそこ。」さういひつけられても小婢はたゞ、
「へえ。」といつてゐる。

「なあ一寸往つて來てえ。……お寺のとこ怖いことないやろ。」

「いゝえ。」と、小婢は頭振りを振つて見せた。

鶴岡はそれを見てゐたが、

「なに？　僕に御馳走するの。」

女は鶴岡の方を見て、

「なんにもお構ひすることが出來ませんけれど。此處はこんな靜かな代りに、一寸通の方に出るのも、あんなお寺の塀ばかりでせう。それは寂しいんですの。」

「可哀さうぢやないか、こんな小さい子供を。それに僕は少し前に、花房を出てから此方へ來る時、朝から食つてなかつたので、うんと食つて來た。……それにこれから又約束の處があつて、二時間ばかりしたら、行かなけりやならん處がある。」

いつも悪遠慮といふことをしたことのない鶴岡がさういふので、女は一寸眞面目な顔になつて、

「まあ、可笑しいわねえ。さう俄に他人行儀にならなくつてもいゝでせう。」といふ。

さういはれて、鶴岡は一寸にやつとしながら、

「なに、そんな譯ぢやないが、君がもうちやんとかうしてゐる處へ來て、そんな御馳走になつたりなんかするのは僕の心に潔くない。…それに、本當に今食つたばかりだから。僕は、君の知つてゐるとほりに決して遠慮なんかする人間ぢやない。欲しけりや此方からいつても御馳走してもらふよ。」

きつぱりさういふと、女も、

「それはさうですけれど、…本當に上がらない？」と重ねて念を押すやうにいふ。

「うむ本當にいらない。」

「さう。」と、女は物足りなささうな顏をしてゐたが、「あんた食べたくなくつても、私何か欲しい。」と、ひとり言のやうにいひながら、「まだ越して來たばかりなものですから、自家でこしらへる物が何でも味がなくつて。」と思案して、

「なあえも、おしもやん、あんた一寸往て來てえな。」と、又小婢の方を見てさういふと、

「へえ、いて參じます。」おしもは素直に返事してゐる。

鶴岡もそれで、

「そんなら、なに、僕も少しくらゐ御馳走になつてもいゝよ。」
「さう。それでは、あのなあ、鳥を四人に御飯もそれだけなあ、いうて來てえ。」
小婢はそれからすぐ、から〳〵下駄の音をさせて出ていつた。
その後二人つきりになると、彼等は兩方とも、何だかお互に、ちよつと口のきゝにくいやうな變な碎けない氣持になつてゐたが、暫くして女は、
「花房で何か委しい話をお聽きになつて？」と、ちよつと又眞面目な顏に笑ひを湛へながらいふ。
「うむ、……格別委しい事譯も聽かなかつた。それでも彼處で此處を教へてくれなかつたら、わざ〳〵名古屋まで來ても遂に無駄足してしまつたよ。」
すると女は又鶴岡の顏を見なほして、
「まあ、それぢや、あなた、それで、わざ〳〵名古屋まで來て下すつたの。」
「無論さ。」
「さうですか。あたしは又何か他に雜誌の方の御用でもあつていらしつたのかと思つてゐました。……どうぞねえ、東京のことを惡くお思ひにならないでくださいな、ね

え。」

女は心から濟まないといふやうな顏をして、

「今の人、まだ、あたしが花房から出そめの時分から贔屓にしてくれてたものですから。」

「何をしてゐる人間だ？」

「やつぱり材木の方。それは、なか〳〵大きいんです。」

「さうか。それは君の幸福だ。」

そんなことを話してゐるところへ、もう小婢は戻つて來た。やがてすぐ又後から鳥文の出前が入つて來た。

鶴岡はそれから、長火鉢の向側に坐らせられて、遠慮なく大趺座をかき、そこで又輕く傾けながら快よく二時間近くも腰を据ゑてゐたが、春日君との約束があるので、切り上げよく座を起つた。

女は流石に名殘り惜しさうに、

「さう。それぢや、まあ御機嫌よう。どうぞお大事に。」といつて、襦袢の袖でちよつ

と眼を拭いて、玄關まで送つて出て、自分で後から外套を着せ掛けてくれた。そして
そつと鶴岡の手を探つて、堅く握つた。
それで鶴岡の方でも又じつと女の手を握りしめたが、いくら綺麗さつぱりと此家を
引揚げるのがいゝといつたにしても、昨日、まるで足下から鳥の立つやうにして東京
を立つた前後のこと、それから今朝、まだ薄暗いうちにステーションを出て名古屋中
を駈けずり廻つたことなどを考へてみると、折角女に逢ひながら、この儘歸つてしま
つては何の爲に昨日から苦勞したか譯がわからない。
強請るの、どうのといふ、そんな質の惡い考へからいふのではないが、此方に來る
のだつて無理算段をして三十圓の金をこしらへた。せめて小遣ぐらゐは女から貰つて
いかねば詰らない。それに、これから又春日の處へ往つて、名古屋の美人を見るのだ
から金も餘分に持つてゐなければならぬ。
それで實は先刻から餘程それをいひ出さうと思つてゐたのだが、つい、それをいひ
そびれてしまつたのであつた。
鶴岡はやがて握つた手を解いて、そこに突立つたまゝ女の顏を見ながら、

「君、俺、これから東京に歸るのに金がいるんだが少し貸してもらひたい。」

さういふと、女の方でも金といはれても格別惡い顏もせず、

「たんとのことは出來ませんけれど、少しくらゐなら何とかしますわ。」

「なに、そんなに澤山もいらない、三十圓ほど欲しいんだ。」

「さう。一寸こゝで待つてゝ下さい。見てみませう。」といつて、女は奥へ引返したが、暫くして出て來て、

「あんたのいふほど無いんですけれど、これだけぢやいけないこと?」

といつて、十圓札を二枚帶の間から出して鶴岡の手に渡しながら、

「あたし、あんたのいふほど上げたいんですけれど、今お話したとほり急に此處へ一軒持つので、何も斯も新しく買ふんでせう。さう〳〵ねえ、旦那に無理もいへないでせう。どうぞ、これで堪忍してください、ね。」

鶴岡は、せめてもう一枚ほしいと思つたが、そのうへあまりねだりがましいことをいふのも好ましくなかつたので、

「うむ。」といひながら、機嫌よく二十圓を納めた。

そして玄關を下りると、

「ぢや、これからまた春日さんの方へおいでになるの。」と、女も靴脱の脇に穿きすててあつた下駄の上におりて、入口まで送つてくれた。

「もう、一寸お目にかゝれないわねえ。」

女は又そんなことをいつてゐたが、鶴岡はさすがに男らしく諦めて、それには返事もせず、

「ぢや、左樣なら。」とばかり、いひ遺して、ずん〳〵土塀に沿うた道をてく〳〵歩いて來ると、微醺機嫌の顏を冷い夜の風が心地よく吹いた。

鶴岡は、又そこで、その話を切つて、

「其奴は、一寸僕の好きな女だつた。」といふ。

田原は、もうその時、自分だけ先へ、炬燵を入れた蒲團の中へごろ寢のまゝに橫になつて、鶴岡の話に、急所々々で一々「うむ〳〵」と應答を與へながら聽いてゐたが、やがて大きな欠伸をつゞけさまに三つ四つもして、眼に一杯淚を湛へながら、

「ふむ、君も、それぢや、なか／＼やるもんだなあ。君には少しもそんな艶事はないのかと思つてゐた。」

「どうして。それがないやうな人間は駄目さ。」

鶴岡は確信の面を以て云ふのであつた。さうしてゐるところへ、少し下流の丸太橋の上にごろ／＼と電車の轟く音や、ポールの軋る音が聞えて來た。

田原は驚いたやうに、

「おや！　もう夜が明けた。電車が通り出した。さあ今度はもう本當に寢ようぢやないか。」

といつて、鶴岡を促した。

鶴岡もそれから着物を脫いで冷い夜具の中へ入つた。

「これから明日の十二時頃まで寢よう。」田原はまた蒲團の中からそんなことを言つて鶴岡に話しかけて居たが、鶴岡はそれに一二度返事を與へたのみで、床に入つて、ものゝ十五分ともたゝない間にもう默つてしまつた。田原もそれからすぐ眠つた。

翌日二人の目を覺ましたのは丁度十二時頃であつた。鶴岡はそれから朝晝兼帶の飯

を濟まして出て歸つた。
それから彼等は五六日會はなかつたが、氷のやうな冷い月の冴え渡つた晩、寺町の通りを歩いてゐて三條の街辻の處でばつたり行き合つた。
「やあ」「やあ」、と兩方でいひ合つて月の明りの下に一寸立ち止まつた。
「何處へ？」と、田原の方が先づいふと、
「今そこの三島といふ牛肉屋で飯を食つて歸るところだ。」さういふ鶴岡は啣へ楊枝をして、いとゞ赤い顏を瑞々と眞赤に火照らしてゐた。そして、
「君は？」と、田原に訊いた。すると、田原は、
「う、なに。僕も一寸そこまで散歩だ。今日一日家にゐたものだから。」
と、何氣なくいつてゐたが、やがて、
「ぢやあ、又。」といふと、鶴岡もそれに應じて、
「やあ、そんなら失敬。」
といつて、それつきり行き過ぎてしまつた。
田原はそれから、風こそないが、冷さは、まるで銳利な刃物で頬を切られるやうな

寒氣の中を、三條からまた、ぶら〳〵と下へさがつて、處々寺町の左側に飾窓を出してゐる裝身具の店だの、茶器や骨董店、襟正の友禪のショウヰンドウなどを覗いて見たりして、それから四條通まで出て、かど屋の絨毯の店の前に立つて、そこで又やゝ暫く窓飾の中の毛布や高價な絨毯などを、格別用もないのに覗いて見てゐたが、それも見てしまふと、此度はすぐ前の寺町の停留場に突立つて、電車に乘つて洛東の方に往かうか、それとも京極を歩いて引返さうかと考へてゐた。

そして田原は、一旦京極の入口まで五六歩あるいて來たが、いつも明麗な、さすがの京極もこの夜の寒氣では人脚も稀れで、たゞ凍てついた土の上を歩く下駄の音のみが高く街にひゞいてゐる。その時の氣分で何だか此處を歩いて、歸つただけでは物足りない氣がするので、彼は又停留場の方に引返した。ちやうどそこへ西の方から、寒い乾燥した夜の空氣の中に、ひどい砂塵を立てながら、祇園ゆきと書いた電車が疾走して來た。田原はそれに乘つた。

この間、あの路地の中の家の窓際で、女と顏を見合はせて、どちらも無言のまゝ笑つたばかりで歸つたのが殘念で堪らず、田原は、あれから後二三日つゞけて晝と夜一

日に二度も三度も往つて、じつと樣子を覗いてみたが、あれに懲りて硝子戸には內から堅く釘を打付けてしまつて、もう開かない。どうかすると、すぐ硝子障子の內側の疊の上をさら／＼と音をさせて歩いてゐるのが聞えるが、それが彼女の歩いてゐるのか、それとも母親が歩いてゐるのかと思つて、その音を聽き分けようと、一心になつて耳を澄まして、去年の五月頃、彼女の家にゐた時分の女の起居の態度(やうす)や疊のうへの靜かな足の踏み具合などを、あゝかうと、さま／＼に思ひ浮べてみたり、それに母親の步く時の力の入れやうを比べてみたりするが、それがどうも明瞭(はつきり)と聽きわけられない。

黑幕の向うに忍んでゐる旦那といふやうな者が果してあるとするなら、それはどんな人間か？　それは始終(しよつちう)女の許にやつて來てゐるか、どうか。それが假令どんな人間であつても構はない。此方に生命を的にすることを恐れない人間がかうしてつき纏つてゐるのだ、どうかして向うの人間が果して何者か、又どんな人間か突留めたい。

さう思つて彼は、晝間は二時間も三時間も其處らを彷徨してみることもあるが、一向それらしい人間が入つて來るのを見ない。

夜はきつと來るにちがひないと思つて、丁度刻限の七時八時から九時十時頃を見はからつて暗がりの路地の樣子を見にゆくが、水のやうな寒氣の中には猫の子一つ歩いてもゐない。

田原は息を殺して、そこらの家の軒や戸袋の蔭にじつと身を忍ばせて時を過してゐるが、しまひには足の底から身體中が冷えあがるやうになつて、

「大事の生命を無くしてしまつては敵も討てない。」と思ひなほしながら、悄然として路地を出て來るのであつた。

そして、こんなことをも考へてみたりした。人間は、どんなに焦つても自然に打ち勝つことは出來ない。あまり無理をすると身を滅す。昔から戰をするにも春か秋の、身體の自由に働ける時を待つて戰つた。柴田勝家と羽柴秀吉の賤ケ嶽の戰爭もさうであつた。關ケ原の戰も陰曆の九月であつた。關ケ原の一戰が家康の生命であり、賤ケ嶽の勝利が秀吉の生涯の運命の決する大事であつたごとく、この女の事は自分の一生涯の幸不幸の岐れるところである。他人には閑氣なことのやうでも、彼は眞面目に、さう考へて、もつと好い機を待たうとした。

それで、さうは思ひながらも、やつぱり、ほかの男が、戀しい女の處に我が物顔して入り浸つてゐることを想像すると、とても辛抱して諦めてはゐられなかつた。その晩も田原はもう足癖のやうになつてゐる安井の路地を覗いて見る氣で、祇園町で電車を降り、それから勝手を知つた万亭裏の抜け路地を抜けて、花見小路の茶屋が軒を並べてゐる花街から演舞場の後の土塀に沿いて、此間女の母親に出會した、櫻湯の方に出て來た。その湯屋へは安井の金毘羅の周圍に巣を喰つてゐる化粧の者がみんな入りに來るのである。彼女もきつと、その湯へ入りに來るにちがひない。どうかした幸運で、もし湯に入りに來るところを見つけないとも限らない。この間母親に偶然このあたりで出會したことを考へると、偶然の好運といふことを僥倖するのも必ずしも愚かなことではない。しかし、それには、好運を拾ふために、氷の刄に頬を殺がれ、毎夜毎夜寒氣の肌に迫るくらゐを厭うてゐてはならぬ。彼は悲壯な勇氣を勵まして暫く櫻湯の板塀の小蔭に佇んで女湯の淺黄の暖簾を分けて出て來る湯あがりの女を凝乎と見張つてゐた。そして、しまひには、いつまでも立ち盡してゐるのが、もどかしくなつて、

「えゝ！　いつそあの女湯の入口にいつて、中を覗いてみようかしらとまで思つてみたが、有繋にそれほど理性を失ふほどにもならず、やがて湯屋の前は諦めて、やつぱりそれから少し先の路地の中の家に往つてみた。

そして、いつもの如く窓の下に立つて暫く家の中から話し聲でも洩れて來ないかと耳を澄ましてゐたが、ことりといふ音さへ聞えぬ。田原は心の中で考へた。

「はて、不思議だなあ。この間からもう幾晩となく、晝はもとよりのこと、毎晩今時分こゝへ來て家の中の樣子に氣を付けてゐるのに、嘗てそれらしい男の聲の聞えたことがない。いづれ廓に勤めてゐた女を世話するほどの人間であるから、必ず繁々足を運んで此家で樂しんでゐるにちがひないと思ふのに、どうもそんな樣子も見えぬ。尤も女を圍うてゐても、月に一度はおろか、半歳に一度も顏を見せぬ旦那もよくそこらにある。この女の背後に附いて居る男も或はそんな類の人間かな。もし、さうだとすると、これはなか／＼心持の寛量な、女道樂をするにも氣分に餘裕のある人間と見える。それで女母子が安心して生涯を託してゐるのかな。果してそんな人間ならば、これは一寸齒の立たぬ競爭者である。それとも今時分丁度內に來てゐて、母親は何處か

外に出ていつて居らず、彼等二人きり樂しんでゐるのかな。自分が去年の五月頃、女がまだ先の家に居た時分暫く泊つて居つた時のことを聯想すると、やつぱりそんなことがあつた。」

そんなことを、いろ〳〵思つてゐると、もう、とても我慢してゐられなくなつた。今自分の想像してゐるとほりだとすると、却つて都合がよい。それがどんな奴であつても構はない、破れかぶれ、面を脱いで一つ聲を掛けてやれ、と決心して、

「今晩は、今晩は。」と窓の下から呼んでみた。

すると、釘づけにしてあると思つたガラス戸をそつと內から開けて、

「どなたはん?」と、聲を掛けたのは母親であつた。田原は、母親のやつめ、うまく手に乘りやあがつたなと思ひながら、

「私です。」

といふと、さすがの母親もこのうへ隱し立てをしようにも爲方がないと諦めたものか、案外おとなしい調子で、そんなことの隣近處へ聽えるのを憚るやうに、

「あんたはんの、よう納得ゆくように話しますさかい、そこの教會所へ往ておくれや

す。」

といふ。

田原はその教會所といふのが一寸思ひ出せなかつたので、

「教會所といふのは何處です？」と訊くと、

「教會所いふたら、あんたはん分りまへんか。そら彼處の金毘羅樣の脇の金光樣どすがな。」

田原は、それで、腹の中で金光教の教會所へ來てくれとは、女の經緯についての話を、妙な處へ往つてするものだなと思ひながら、窓の中から差してくる薄暗い電燈の明りに微笑を浮べて、

「金光さまとは妙な處で。」といふと、

母親は窓から覗いたまゝ、眞面目な顏をして、

「あんたはん、あそこの先生、何でもそんなことよう知つとゐやすえらいお方どすがな。そやさかい、あこに往とくれやす、話しますよつて。」といふ。

田原は、かねて彼等母子(おやこ)の者が無智の者に多くありがちな信心家であることは、よ

く知つてゐた。とり分け母親は幾らか狂人(きちがひ)じみた迷信家で、去年の五月頃田原が女の家に暫く滯泊してゐた時分にも、座敷の床の間に神棚をしつらへ、御簾を下げて、毎晩々々その前に跪いて、母親がまるで憑(つ)きものでもしてゐるかと思ふやうな態度で合掌した兩手を頭の上に差し上げたり疊の上にそれを擦り付けたりして、何か知らん譯の解らぬことをいつて、頻りに祈禱をあげてゐるのを見て、田原は、妙なことをするものだと思つてゐた。一體田原はさういふ、神佛の信仰といふことに就いては極めて理智派であつて、彼の趣味や理性の上からひどく、そんな狂氣じみた迷信を好まないのであつた。それで苟めにも自分の愛好してゐる女自身はいふまでもなく、もしその女の母親などにさういふ者があるとしたら、それこそ、百年の戀も一朝にして直ちに索然として愛想を盡かしたかも知れないのであつたが、それにも拘らず田原が、彼女に愛想を盡かさないばかりか、さういふ古風で無智な母子を、どうかすると、そのために一入憫れみ且つ愛するといふやうな氣にさへなつてゐたのであつた。

　けれども去年の秋、女が病氣になつて商賣から身を退(ひ)いてから後の母親の、田原に對してまるで先(せん)と掌を返したやうな惡婆の態度や、その言ひ分を考へると、金光教の

糞のが聞いて呆れる。平生どんなことをいつて拜んでゐやあがるんだらう。いづれ、娘に好い旦那がついて出世するやうにとか、うまくお客を欺してお金を澤山卷き揚げますやうにといつて拜んでゐるのであらう。金の光りとは、なるほど慾の深い仲間の有難がりさうな宗旨の名であると思つてゐた。

戀愛に生きる人間である田原は、自分の生命よりも大事な魂の問題について、そんな、愚婦愚夫を誑してゐるやうな金光教の教師の處などへ話しに行くのを、ひどく穢らはしく思つたのであるが、戀する女の爲めに自分の面目も何も投げ出してかゝつてゐる彼のことであるから、窮極の目的のためには、いかなる事をも隱忍するといふ覺悟で、母親のいふことに敢て逆らはぬやうに、

「あゝさうですか、よろしい。ぢや、教會所へ往きませう。今直ぐに？」

すると母親は突慳貪な口調で、

「いや、今とちがひます。」

「ぢや何時です？。」

「さうどすなあ。」と母親は思案するやうにして、「明日あこへ來とくれやす。」

「よろしい、來ませう。お柳もその時來ますなあ。」田原はわざとさういふと、母親は又ぶりつとしたやうに、

「お柳とは、あんたはん何の權利でおいひやす？　人の子を呼び棄てにして。」

田原は、やつぱり窓の下に突立つたまゝ心地よさゝうに笑つて、

「お柳と呼んだが何故いけない、お柳ぢやありませんか。」と少し聲を大きくしていつた。

母親は、すると又一寸聲を和げて、

「今此處で、そんな話は出來まへんよつて、明日教會へ來とくれやす。みんな話します。」

「ぢや、本人も來るんですな？」

「いや、あの娘はまだ病氣が癒らしまへん。そんな病人伴れて行くこと出來しまへん。」

「だつて、この間來た時もう快くなつてゐたぢやありませんか。」

「なんぼようなつてもまだ外へ出されしまへん。」

田原は、いつまでもそんな押問答はつまらないと思つて、

「あゝ、さうですか。ぢや、あんただけでもよろしい。明日違へず來てください。」

「えゝ行きます。あんたも違へんやうに來とくれやす。」

母親がそんな調子で、何日ぢゆうと違ひ、優しい口の利きやうをするので、田原はもうすぐそのうまい調子に乘つてしまひ、その晩はひどく希望を復活したやうな心持になつて戻つて來た。

そして、その晩は何となく、却つて精神が昂奮したやうになつて、やう〳〵微睡みかけてゐるうちに夜を明かしてしまひ、翌朝早くから起き出でゝ、朝飯の箸を置くと、身を切るやうな寒氣の中を安井の金毘羅の脇にある金光教の教會所に往つたが、もう八時はとうに過ぎて九時近くなつてゐるのに、黑く塗つた冠木門の扉はまだ堅く閉まつてゐる。それで田原は爲方なく、金毘羅の境内を拔けて南門通りの路地裏に在る女の家へ、もう起きたかどうかと思つて往つてみると、そこでもまだ入口の潜り戸は堅く鎖して、起きてゐる樣子はない。それから又もとの教會所へ引返して來ると、今度は門の戸だけは開いてゐる。

門を入つて行くと入口の戸はまだ鎖してゐたが、

「御免ください。」といつて、こつ〳〵と外から戸を叩くと、内から返事をして、やがて十四五の、小倉袴を着けた男の子が戸を開けて、
「何ですか。」といつて、顏を覗けた。
「あの、此方の先生はもうお目覺めですか。」
と、田原は、向うの自尊心に順應するやうにさういつたが、こんな處の奴を苟且にも先生だなどゝ敬語を用ゐて呼んでやるのは、言語に盡し難いまで彼自身の自尊心や良心を傷けるやうな氣がしたが、それでも彼は、大事な、戀する女ゆゑには凝乎と眼を瞑つたつもりで、あらゆるものを隱忍してゐた。
　すると子供は、變につんとした顏をして田原を見てゐたが、
「まだ寢てゐます。」といふ。
「あゝさうですか。まだ、なか〳〵お眼覺めにはなりませんか。」さういふと、子供は
「一寸待つて。」といつて、奧へ這入つていつたが、すぐ又出て來て、
「今起きました。」といふ。
田原はそれで、一層その子供に向つても言葉を丁寧にして、

もうお目ざめですか、さうですか。それでは、私は田原と申す者ですが、つい其處の園田――此方へ毎晩お參りに來ませう、あんたも知つてゐませう、あの園田の方のことについて一寸先生にお目にかゝりたいと思つて上りましたから、どうぞお會ひくださるやうに、さういつて下さい。」

子供はそれを聽いて又奥へ引つ込んだが、やがて出てきて、

「どうぞ此方で暫くお待ちをねがひます。」といつて、田原を、玄關のすぐ續きの、參拜者の溜りのやうな十五六疊ばかりの廣間に通した。そして向うの末座の方に置いてある木の株でこしらへた火鉢の傍に薄い座蒲團を持つて來た。火鉢にまだ入れたばかりの熾りの惡い安炭が今にももう消えさうに覺束なくなつてゐる。座敷の左手に見える薄暗い上段の間には物々しさうな神壇が祭つてあつて、赤い房の垂れた紐で絞つた御簾の奥には白い幣が立てゝあつたり、金ぴかの神具のやうな物が奥深い暗い處に光つてゐる。

田原は火鉢に手も翳さず寒いのをじつと辛抱して、やゝ暫く待つてゐると、一人二人女が參つて神前に拜んでゆく者があつた。さうしてゐると、やがて黒木綿に紋の附

いた羽織を着て水淺黄の木綿の袴を穿いたまだやつと三十三四くらゐに見える男が上段の間の左側の出入口から現れて、神前の燈臺にお燈明を上げたりなど、いろ〳〵してゐたが、それがすむと今度は神前に拜首いて長い間何かしら祈禱を上げてゐた。それが三四十分くらゐもかゝつてやつと果てると、先生といはれるその男は田原の坐つてゐる木の株の火鉢の傍にやつて來た。それは、田原もこれまでに、始終その邊にゐて、時々通りすがりに顏だけは見てゐる人間であつた。色の淺黑い、ずんぐりした脊恰好の、厭に重々しさうに取り澄ました、勿體振つた樣子をしてゐた。

田原が丁寧に頭を下げると、彼は一層つんと高慢な顏をして一寸肯く眞似だけしたそしてすぐ脇を向いて、先刻、何處か用足しにでも往つてゐたらしく外から歸つて來て火鉢の傍に寄つて田原に東京のことなどいひ出して訊いてゐた二十四五の書生と用向きの話をはじめた。又それで暫く暇を取つて、やつとその方の話をはると、彼は田原の方に向いて、

「何か御用ですか。」と容態ぶつて、問うた。

田原は辭を低うして、面を和げながら、

早朝から、お多用のところを飛んだお邪魔をいたして相濟みません。」と改めて挨拶をすると、教師は「いや」といつて、後を待つてゐる。

田原は彼に向つて又、一應自分の姓名を名乘つた上で、

「實は、こちらへ始終參つて居ります、すぐそこに住んでゐます園田の婆さんが此方のお宅まで今日私に來てくれ、教會の先生の處で話をしたいからといふ昨日の約束で上がつたのですが、園田の婆さんから、何か貴方に話しておきましたでせうか。」

「いいえ、何にも聽きません。」教師は頭振りを振つていふ。

田原は心の中で、あの惡婆め、又人を賣りをつたなと思ひながら、

「はあ、ぢや何にもお宅にまゐつて申しては居りませんですな。」

田原がひとり言のやうにいふと、教師の方でも同じやうに、

「えゝ何も聽いてゐません。」

田原の微笑してゐる顏を見て自分でも微笑していつた。

「あゝ、さうですか。それならようございます。」と田原は肯きながら、「多分もう貴方はよくご存じの事と思ひますが、」といつて、それから園田の婆さんの娘がまだ祇園町

に商賣をしてゐる時分のことから、四五月前に遡つて、田原との入組んだ經緯につい
て細かい話を告白するやうな調子に洗ひざらひ物語つた。そして最近病の爲に女が商
賣を廢してから後の田原との交渉についても母親の不良の態度が兎角自分の意を害し
てゐる所を述べて、

「男子の口からこんな事を耻しげもなく申上げてまことに面目次第もない譯ですが、
あの母子の者共、貴方をひどく信仰いたしてゐます樣子ですから、多分あなたの口か
ら仰有ることはよく聽きわけるだらうと思ひます。……いや、なに、それは、私にし
ても、旣にもう彼女等母子の世話をしてやる者が出來て居りますなら、否でも應でも是
非とも前からの約束を履行させようとは申さないのです。しかし、それならそれで、
長々お世話になりましたが、かく／＼の事情で、今はかうして此處にゐると、腹藏な
く打明けばなしをして聽かしたなら私の方でも腹は立てないのです。……どうぞまあ
何分宜しくお骨折りをおねがひします。」

田原がさういつて、一寸頭を下げると、教師は初めから終まで眞面目臭つた顏をし
て聽いてゐたが、

「承知しました。私の力で貴方の得心出來るやうに、園田に承知させることが出來るかできぬか、それは一寸受合ひかねますが、今承つたことを向うに通じるだけのことは十分致しませう。……それで、あたたの方の御要求は？」教師は無口のやうであるが、思つたよりいふことの要領を得てゐる物のいひ方をする。

「え、私の方の要求と申したところで、さうです、約束によつて金を貢いでゐたのですから、その約束を履行して娘が私の方に來るといふことです。」

「それで、もし他に旦那があつたら、どうします？」

「左様……しかしそれは私の方で關係したことではないのです。私の方ではたゞ自分のいひ分を容れてもらひたいのです。」

「よろしい、承知しました。どうぞ二三日お待ちをねがひます。」

「えゝ、決して急ぎませんから、何分に。」と、賴んで田原は、その日はもう母親に會はうとせずに引揚げた。

そして二日ほど間を置いて翌々日の午過ぎ、その日は一月末の冬半にもめづらしい暖かな好い日和であつたが、金光教の教會所へは寄らず、先づ路地の中の女の家に往つてみた。

「今日は。」

と、窓の處から聲を掛けると、母親がすぐ顔を出した。そして、田原の顔を見ると、いきなり、

「あんたはん、教會の先生が、もう一昨日からあんたはんの來るのを待つとゐやすがな。あの先生用の多い人どすのに、あんな面倒なことをお頼みやして、何でもつと早うお往きやさんのどす。」と、頭から怒りつけるやうに云ふ。

田原は勃然として、何も自分の方から求めて、あんな人間に頼んだのではないし、又しても勝手放題なことをいふものだと思つたが、そんなことくらゐはこの婆の常だと思ひ直して、

「この間、あれほど、あなたも教會所へ來るといつて約束して置きがら、何時までも朝遲く寢てゐて來なかつたから、私一人で、よくあの人に話して置いた。あなた、そ

れを聽いたか。」
するど母親は、人のいふことには餘り耳を貸さぬやうに、
「えゝ聽きました。もう、あんたはんのいふこと何度聽いても同じこつとす。私のいふこと先生に話して置きましたさかい、私のいふこと聽きたけりや敎會所へいとくれやす。」と追ひまくるやうにいつた。
田原は倍々胸に据ゑかねたが、それでも凝乎と堪へながら、
「何を吐かす？」と、一つ荒い言葉を用ゐて、
「私一人行つたつて爲方がない。あなたも行つて兩方で話さなければ。」といふと、母親は、
「そんな話を聽きに往く用はない。往きたけりや貴樣一人でゆけ。」と吐かした。
「何を吐かしやがる。」と、田原は賣り言葉に買ひ言葉で、さういつたが、もう桀鉢になつてゐる奴を對手にしてゐたつて爲方がないと思つて、そこを引返して兎も角も敎會所に往つてみた。
敎師は丁度居り合はせて、今日はこの間の廣間でなく、そこを通り越して、奧の六

疊の居間のやうな處に通した。そして、
「私これから又一寸ほかへ出掛けようとしてゐるところですから、簡單に先日のお話の事について申しますが、あなたがさういうて下さるのは難有いが、もう病人の事はほかの人に一切委して頼んでしまうたから、お斷りしてくれといふ返事です。」といふ。
田原は、それを聽いて、無論先では、そのくらゐのことをいふだらうと豫期してゐたことなので、
「あゝさうですか。どうもいろ〳〵御手數をかけました。……しかし、先日も申し上げたとほりに、たゞ單にそれだけの返事では私の方でも、左樣ですかといつて引さがる譯にはいかないのです。御用の多いところを甚だ御迷惑とぞんじますけれど、一寸此方へ園田の婆さんをお呼びしていたゞく譯にはまゐりますまいか。御迷惑ついでと思つて。……私今一寸覗きましたら、丁度家に居ましたから。」
「なに、それは呼んでも構ひません。」と、早速十四五の子供を呼んで「園田のお婆さんに一寸教會所まで來てもらひたい。」と、呼びに遣つた。
子供が園田の婆あを迎ひに往つてゐる間に教師は、田原に向つて、

「貴方の、その仰有ることも話して見ましたがそれは、向うではもう濟ましたといふのです。」

田原はうなづいて、

「あゝさうでせう。それはさういふのです。……つまり私が去年の五月頃、この先にまだ園田母子が居る時分、其處に一月ばかり逗留してゐて養つたから、それで義理は濟ましたといふのでございませう。」

「えゝさうです。」

「それはもう昨年十一月の末娘が病氣で退いたと知つた當座の掛合ひの時からそれをいつてゐるのですが、私は何も金錢の惜しさにこんな話をしてゐるのではないのですからその時一と月ばかり園田の家に泊つて居て食つたとか、なるほど金も娘から一寸といつて三十圓立替へてもらつたこともあります。それは後で返さうといつたけれども入らないといふので、それではまあ暫くといつて、そのまゝにしてゐました。いづれ商賣をひいてしまへば自分の方に來るものだと思つたものですから、それくらゐのことで私の方から盡した事の埋め合せはつくものではない。……散々ばら人から

絞つて置いて、その絞られたのが此方の不覺といふやうなものゝ、それで好い加減なところでぐらりと寢返りを打つたのですから勘辨出來ないのです。」

そんなことを話してゐるところへ園田の婆あがやつて來た。そして案內されて其處へ通つて一應敎師に挨拶を濟ますと、今度は田原の方を向いて、

「あんたはん、先生にようお禮おいひやしたか。此方の先生おいそがしいお方やのに、あんたはん勝手な事ばかりお賴みやして、ようお禮をおいひやす。」

と、頭ごなしにいふ。田原はもう先刻からいゝ加減憤然としてゐるのであつたが、

「何だ。お禮をいはうと、いふまいと、餘計なお世話だ。」そして「此處の人間なんぞ初めから自分が賴んだんぢやない、手前の方で此處へ來てくれといふから來たのぢやないか。」とまでいはうとしたが、それは咽喉のところまで出て來てそのまゝ凝乎と噤込んでしまつた。

「何吐かす。朝早うから、まだ人の家の寢てる時分からどん〳〵戶を叩いて、よう寢ることも出來へん。」といつて、敎師の方を見て讒訴するやうに「先生まあ、よう聽いとくれやす。あの娘があのとほりおとなしい娘どすもんどすさかい、每日々々戶の外

に來て立つてゐられて、そこら中のお隣りへも、彼處の家には何事があるやろ思はれて、風が悪うてよう外へ出られまへんいうてゐます。」

教師はそれに調子を合はせて、

「うむ〳〵、それは困るのは尤もぢや。」といつてゐる。

田原は、せゝら笑ひながら、

「なんだ。朝いつまでも寢てゐるからぢやないか。度々來られるのが迷惑なら、何故度々來られるやうなことをしてゐる。」

すると婆あは一層大きな聲を出して、

「何ぢや、この騙り(かた)め。さつさと歸つて失(う)せい。」と呶鳴つた。

田原は、丁度自分の方から云つていゝことを反對にいはれて、さすがに男子の理性といはうか、面目といはうか、それを持つてゐるだけに、殆ど返へす語もなくて、ただ呆れてゐた。

教師は、

「まあ〳〵、そんなことを。」と仲を靜めた。

田原はもう胸が沸えくり返るやうであつたのを、じいつと堪へながら、婆あが傍でうるさく何かいつてゐることには耳を塞いでゐるやうな氣持になつて、教師の方に向ひ、

「貴方も金光教の教師でおいでになつて、不斷この人達に難有い教への道をお說きになつてゐるのですから、よく聽いて頂きます。又貴方のお說きになる道に歸依いたしてゐるこの人達に決して神樣の道にはづれた行爲のあるべき筈はないと思ふのです。……で、只今も申したとほり、私が金の事をいへば、直ぐ又、金を强請りにでも掛つてゐるかのやうに、自分達の僻見から邪推するやうですが、身許を洗つてもらつたつて、そんな人間ぢやありません。金の吝しい者が、何で、自分の身體は、一年は愚かなこと、二年近くも女の顏を見に來ないでゐて、むざ／＼と金ばかり仕送る道理がない……」

田原が澱みもなくさういひかけると、婆あはすぐ又それに橫槍を入れるやうに、

「また金々て、金のことばかりいふ。そんな惜しい金を何で送つた。」荒々しい口でさういつておいて、又教師の方を向いて言葉を和げながら、

「先生よう聴いとくれやす。金々て、たんと金を送つたやうにおいひやすけど、私そのお金一文も自分の手に受取らしまへんのどす。わたし、ちよつとも知らしまへんのどす。あんたはん、そんな大切なお金やつたら何で私の處へお送りしまへなんだ。」

田原は、又しても勝手なことをいふと思ひながら、

「あんたの處に送らうにも、あんたの居る所がてんで分らないし、本人に訊いても、いつてよこさないし、それに本人が自分の處に送つてくれといふから、本人のいふとほりにしたのぢやないか。……」

「知りまへん！」婆あは、田原に向つて、さも〳〵憎たらしくして見せようとして、横を向いて空嘯いた。

田原は、なるべく、こんな奴を對手に腹を立てまいと、我慢の蟲をじつと殺してゐても、それでも餘りとげ〳〵しく神經をつゝかれると、耐りかねて、婆あの方に開き直り、

「何だ!? 知りまへんとは、何のこつた。へん！ お前さんも殊勝らしく每晩金光様を信心してゐるなら、少しく考へて見たらどうだ。よもや忘れもしまい、足掛け五年

前の春、はじめてお前さんの娘に伴れられて、あの祇園小堀の路地の奥の住居に訪ねて往つた時に、何といつて、自分達母子の身の上を頼んだ‥‥」
田原がさういひかけると、婆あは、すぐ又それを掻き消すやうに、
「そんな、もう黴の生えた古臭いこと聽きとむない！」
「黴は生えはせん。用があるから、この話は始めてするのだ。聽きたくなければ、お前さんは聽くな。」さういつて、田原は又教師の方に向ひ、
「まあ、舊いことは、ふるいことゝして、その今申す、自分は、送つてもらつた金を一文も受取らぬといふのも、少しも知らぬ筈はないのです。‥‥あんたは知らぬ覺えぬといふが、三年前の冬であつた、お母はんが病氣で金が入るからといつて幾度送つた？」
するとは母親は一寸教師の方を見て、
「それがあの時のことどす。」といつた。
「うむ、さう。」
と、無口の教師は、母親のいふ意味が解つてゐるやうに肯いて見せた。

田原には、それが暗號のやうに思はれたが大抵察しはついてゐた。女には、田原のほかに、京都の土地にずつと居着きの男があつた。それは餘り成功せずして一二年前の夏に死んだが、日本畫の繪師であつた。その男は繪を描くことは拙かつたが、女を手馴けることには妙を得てゐたと思はれて、田原の戀してゐたその妓も、田原との關係よりももつと古く、もつと入組んだ仲であつた。田原はそれを、以前からたゞ朧には知つてゐたが委しいことは、つい近頃まで知らなかつた。

母親は、親一人子一人の掛け換へのない大事の娘が、誰とでもたゞ男とあまり仲が好くなつて、自分の手許から娘を淩つてゆかれさうになると、定まつて二人の間に入つてじや〳〵張つた。眞相は、その繪師との仲も、彼自身の方で女に戀してゐるほど女の方ではそんなに思つてはゐなかつたのであるが、まるで惡足のやうに始終女の後を追掛け廻つて歩いてゐた繪師との仲をひどくやきもきして、自分の娘が、その男に注ぎ込んででもゐる樣に邪推してゐた。何とかして二人の仲を遠ざけようとして、手を盡した。抱主の親方に賴んだり、そんなことの口を利く者に賴んだりしたが一向効がないので、揚句の果てに實はその時もこの金光樣の處へその話を持ち込んで來たの

であつた。――田原は、その場では無論そんなところまで委しい內情は知らなかつた

やがて、彼は又言葉を和かにして、

「親の病氣に要る金といふのですから、それは當座の用に消えて無くなる錢と、私の方でも承知してのことです。私がいふのは、そんな金の事ではないのです。必ず本人の一身上の事について使ひます、使へと堅く申して送つた纏まつた金を何にしたかといつて、やかましく訊いたのです。そんな金を承知で度々取つてゐながら、知らないとは申されますまい。」

さういつてゐると、婆あは又嘴を出して、

「そんな金、みんな外の男に使ひ棄てゝしもた！　と、まるで不貞腐れて云つた。

「何だと。……」田原は又暫く呆れた口を噤んでゐたが、

「都合の好い時に、さんぐ人から金を送つてもらつておいて、そんな金はみんな他の男に使ひ棄てゝしまうた。……それが、送つてくれた人に向つていふ挨拶か。平常殊勝らしくどんな神様を拜んでゐる？」

すると、存外おとなしい教師は口を入れて、

「それは、私も知つてゐます。以前少し質の良うない男が居つたので、貴方の方の金も大分そちらへ使つたものらしいのです。」

婆あはそんな話になると、今度は妙に鼻に涙の詰つたやうな聲になつて、

「先生、あんたはんがよう知つとゐやしとくれやす。わたしもうあの時乞食してる方が、これよりましかと思ひました。」

「うむ、あの時分なか〳〵辛かつた。」教師は、ぽつり〳〵いつて、更に田原の方に向ひ、

「つまり貴方のしたことが、みんな緣の下の力持ちになつてしまうた。」

「あんたはん、その時あの子に金を送らんと、私のところへお送りやしたら、わたし大事に藏うて置きます。あんたはんが、あの娘にお金をお送りやしたのが好うない。」

田原は默つて聽いてゐて、金を送つて、そして女に寢返りを打たれて、尙ほそのうへに金を送つたのが惡いといつて怨みを云はれる。いくら人間は自分勝手のものであるといひながら、凡そ世の中にこれほど愚かなことがまたとあらうかと、眞劍になつて怒ることも笑ふことも出來ない。

「金を送つたのが好うない。…勝手なことをいつてゐる。」田原はつぶやくやうにいつた。
「貴方の方から來る金さへ無かつたら、お柳さんも自然そんな事に金を使はなんだのですが、まあ、いはゞ貴方がお柳さんに毒を盛つたやうな結果になつたのです。」
教師は尤もらしい顏をしていつた。
田原は餘り話が馬鹿げてゐるので、苦笑しながら、
「血の出るやうな金を送つて遣つて、それで毒を盛つたもないものだ。それを毒に使つたのがよくない。」
「あんたはんがあの娘に毒を盛つたのどすがな。」
母親は教師の言葉尻に乘つて、又毒づいた。
田原はもう、腹が立つてとても耐らなくなつた。ぎり〳〵齒軋りをする氣持になつてゐるのを、それでも、尙ほじつと隱忍して、教師の方に向ひ、
「貴方の今仰有るとほり、私は全く綠の下の力持ちになつたのです。苦心慘憺して何年に亙り仕送つた金は、他の好きな男と遊ぶ爲に元も子もなくむざ〳〵と使ひ果され、

そして、漸と借金が無くなつて商賣を廢める段になつて、今度は又別な男の世話になる。それで私には一應の挨拶もない。……散々ばら緣の下の力持にされて、へえ、それで私は苦情は申しません、宜しうございますと、引込んぢやあゐられない。……私の仕送つた金を好きな男に使ひ果さうとも、今更濟んだことは繰返していつたところで仕樣がありませんから、それはいはない。けれども、退いたら一生をおまかせする、賴むといふ約束で本人に金を渡してあるのですから、私の方ではその約束を履行してもらへばいゝのです。又さうしてもらはねばこのまゝ引退がる譯にはまゐらないのです。」

田原は、憤怒の餘り胸に波を打たしてさういつたが、先刻から極度の昂奮の爲に咽喉が渴して聲が嗄れ、口が利けなくなつた。

「どうぞ、濟みませんがコップに水を一杯頂かして下さいませんか。」

教師にさういつて賴むと、教師は、奧の臺所の方に向つて、

「おい、水をコップに入れて持つて來て。」と、聲を掛けた。

すると、婆あは、もう憎くつて堪らないやうに、

「ごう〳〵しい。何吐かす。こゝを何處の家と知つてゐるか。先生そんな物汲んで來てやらんとおいとくれやす。優しうすりや附け上がりくさつて。」

と毒づいた。

「まあ、そんなことはいはん方がいゝ。」と、教師は婆あを制しながら、

「おい、早う水を持つて……」と、臺所の方に催促した。

すると奥からそれに應ずる聲がして、やがて、コップをお盆に載せて持つて出て來たのは、三十六七と思はれる、背のすらりとした大柄の、眉を剃落して、頭髪(かみ)も手束(てつか)ねにして、所帶に身装(みなり)を崩してはゐるが、垢汁抜(あくぬ)けした誰が眼にもなか〳〵別嬪の妻君であつた。

田原は、それまでにも時々餘所目に見て知つてゐた。金光教の教師は格別人の眼に付くほどの好い男でもないのに、素晴しい好い女を女房に持つてゐると思つてゐたら、後で聞くところによると、そのおかみさんも、やつぱり元は祇園に藝者に出てゐたので、江州あたりの大盡に落籍(ひか)されて、旦那の在所とかに連れてゆかれ、近い處に圍つて置かれると、旦那の本妻が大變な嫉妬で、すんでのことで殺されそこない、隨

分辛い目に遭つてゐるうちに、もうこの上は神様に縋るほかはないと思つて、それから金光様を信心しはじめて、たうとうこゝの教師と好い仲になつたのであつた。それぢや、どうして、田原などの及ばない、その方にかけてもなか〳〵隅に置けぬ冴えた腕を持つてゐる金光様であつた。

教師の妻君が盆に載せたコップを運んで來ると、婆あは、その方に向つて、

「奥さん、こんな奴に、そんなもん持つて來てやらいでよろしい。どうぞそのコップをお退きやしとくれやす。」と、極め付けるやうにいふと、美しい妻君は默つて笑ひを含んでゐたが、教師は、「まあそんなことを餘り云ふものぢやない。」と、婆あを嗜めた。その間に田原は、コップを取上げて、一息に飲み乾した。婆あは又田原の方に向つて、

「貴樣は一體何ぢや、水くれ、湯くれ。默つて居りや好きなこと吐かしよる。人の家で二月も三月も居食ひをしくさつて。あれが甘い、いや、こんな物が食べられるかと好き放題の贅澤三昧こきやあがつて、誰のお蔭ぢや。それで出て行く時に一文も置いてゆくことか、貴樣のお蔭であの時家主のお婆さんに散々耻を掻いた。貴樣それ知つ

てるか……

　婆あは、田原を前に置いて、まるきり據りどころのない惡口の有りつたけを吐いた。そして又教師の方を向いて、鼻聲になり、

「先生よう聽いとくれやす。その時この奴が好き放題の口贅澤いうて、あの娘が、それで、どないに氣い使ひましたか知れえしまへんだ。そのために後で半月ほど又患ひました。」

「うな〳〵、そりやさうぢやろ。」教師はいゝ加減に調子を合はせて母親のいふことに肯いてゐる。

　田原は今度こそ眞劍に怒つた。眼を釣り上げかあつと顏を眞赤にして、

「うぬ、この畜生め！」と、滿身の力を籠めて、咽喉から搾り出すやうな聲でいつた。そして、懷の中で凝乎と拳を固めて、ぶる〳〵慄はせながら掌のうちに熱湯のやうな汗を握り締めてゐた。

「こんな惡婆を生かして置くから世間に惡人が絕えない、此奴いつそひと思ひに打ち殺してやらう？……」と、そこで彼は始めて殺意を生じた。そして、

「この畜生、覺えてやがれ。」と重ねて搾り出すやうな聲でいつたが、やがて又、少しく氣を取り直して、急に思ひ付いたやうに、

「よし、本人に會つて話さう。」と、ひとり言のやうにいつて、彼は急遽として座を立ち上つた。

一旦赫と赤くなつた顏を、今度は又眞靑に血の氣を失つた田原は、傍の見る眼には、どんなことを仕出來すか分らない凄じい形相になつて苛々しながら、

「よし〳〵、そんな母親なんぞにもう用はないんだ。これから行つて直ぐ本人を連れて往く。」と、ひとりで肯きながら、ふつと氣が付いたやうに、教師に向つて、

「や、どうも、飛んだお邪魔をいたしまして、さぞ御迷惑でございましたらう、いづれ又改めて、この詫びにはあがります。」

と、さういつて、そこ〳〵に教師の部屋を出で、疊を蹴るやうな足取りで、玄關の處に脱いで置いた外套を取つてぱつと背中に引掛けるやいなや、がたぴし格子戸を開けて外に飛び出た。

そこは安井金毘羅の廣い境内である。彼は北門の石の鳥居を入つて、花崗石を敷き

詰めた石疊の上を大股に急いで、繪馬堂の脇から南門の通に出抜けて行くと、

「ほんなら、私もこれでお暇しますよ。」と、今、田原が立ちかけた時に教師の處で云つてゐた母親が、男足に追ひ付かうとして、神社境内をどん／＼駈けて來ながら、女足では容易に追ひ越せさうにないので、田原の後から、彼女はもう見えも外聞も構はず、そこら中に聞えるやうな大きな聲を出して、「盜人！　盜人！　どなたはんも、みな早う來とくれやす。盜人々々！」

と呼んだ。

繪馬堂に沿うた道路の南側から西側にかけては、ずつと意氣な造りの二階建の住居が、立ち並んでゐた。それが丁度二時過ぎの暖かい日の照つてゐる眞晝間であつたので、その聲を聞きつけた其處ら中の家々の二階といはず、入口といはず、ちやうど貴人の通御でも拜觀する時のやうに、一度に立ち出でゝ神社の境内の聲のする方を見下した。

「何やいな！」と聲を掛けて、慌てゝ入口を飛び出して來る者もあつた。

「皆はん盜人どす。それ其處に盜人が行きよる。」

「何處にや？」と、誰か訊いたものがあると、母親は、
「それ、あこに行きよる男が私の娘を連れて逭げよります。」と、又高い聲で喚いた。
さすがの田原も、もう怒つたり耻と思つたりするのを通り越して、つく〴〵呆れてしまつた。そしてぐるりとそこを取卷いた二階續きの障子から眺めてゐる大勢の人目を逭げるやうに、ついと急いで向うの路地に駈込んだ。
母親は何でも早くそれを追ひ越さうとして仰山に喚きながら、たうとう下駄を脱ぎ棄てて、もう一生懸命に路地の中に駈け戻つて來た。
田原はたとひ知つた顏のない土地とはいひながら、流石に外聞を憚つてゐるのと、それにもう、さうして婆あが歸つて來たのでは、とても手の附けやうがないので、いつもの入口の外に立つたまゝ手を束ねて見てゐると、母親は跣足で息を切らしながら、どん〳〵潜戸を外から叩いて、
「これ早うこゝ開けてんか。」と、內へ聲を掛けた。
すると內から、窓のガラス障子をそつと細目に開けて、女が顏を半分ほど見せて外を眺めたが、そのまゝ默つて障子を閉め、今度は入口の猿をはづして、潜戸の內と外

から母子（おやこ）が同時に手を掛けて、がらりと一尺ばかり開けるや否や母親はすぐさまそれへ飛び込んで、あとを、ぴたりと閉めてしまひ、かた／＼と手荒く猿を掛けてゐる音が、空しく外に突立つた田原に聞えた。

彼は憤怒と口惜しさに身を燃やして、

「畜生どうしてくれよう。」と、唇を嚙み締めて潜戸のところを、やゝ暫く睨んでゐたが、どうすることも出來ないので、拳固（にぎりこぶし）を振り上げて力一杯、戸の割れるほど、どんどんどやしながら、

「こらッ、こゝを開けろ、こゝを開けろ。」と、呶鳴つた。

あたりの開いたその路地のまはりには表通りの二階家がずつと取卷いてゐて、裏二階から通ふ高い物干場から、田原の、どん／＼戸をどやしてゐる處が、丁度ローマの野外劇場かなんぞのやうに都合好く見下された。

彼は時々我れに返つて、戸を打ち叩く手を休め、赤い腰卷だの白いエプロンなどに明るい冬の日のさしかけてゐる物ほし場から、お妾らしい顔の女だの女中などが、まるで芝居を見てゐる樣に、好奇の眼を向けて、此方を見おろしてゐる方を、凝乎と見上

げた。そして、暫く休めてゐるかと思ふと、又、耐へ切れずなつて、どん／＼と自暴にどやしつけた。

すると、丁度蟹が穴の中に潜り込んだやうに、幾ら戸外で騷いでゐても平氣で居ようとした母親も、娘に、外聞が惡いとでもいはれたものか、窓のガラス障子を開けて顏を出し、

「喧しい、迷惑どす。もつと靜かにせい。」といつた。

「何だ。勝手なことを吐しやがるな。喧しくつて困るなら開けろ。」

さういつて、田原は又一層やけに潜戸をどやしつけた。

「戸が壞れます。こゝは私の家と違ひまつせ。あんたはん餘所の家壞したら、あんたはん自分に警察へいかんなりまへんで。」婆あは、子供を嚇すやうにいつて、ガラス障子を閉めた。

さうしてゐるところへ先刻の教師が、何事が生じてゐるかも知れぬといふやうな氣づかひな顏をして急いでやつて來た。

そして彼は田原には物もいはず、ずつと潜戸の傍に寄つて、

「とん〳〵」と、靜かに叩きながら、
「ちよつと、一寸。おい、ちよつとこゝを開けて。」と、聲を掛けたが、內から早速にはそれに應じなかつたが、教師が、
「おい、これ、私ぢや、分らんか、私‥‥」
と、しまひに自分の名をいつたので、やがて母親は、戸をやう〳〵體が這入れるだけ開けて、急いで教師を引つ張り込んで、又ぴしやりと閉めた。
田原は滿顏に怒氣を含んでそれを凝乎と睨み見てゐた。
さうしてゐるところへ、三軒建の、同じ棟割長屋のすぐ左隣の家から、氣むづかしさうな、ひどい顰め面をした、もう七十を越したらしい婆さんが路地に出て來て、憎々しさうな嗄がれ聲で、
「何の御用か知りまへんけど、近處迷惑どす。どうぞ、もつと靜かにしておくれやす。靜かに賴みます。ここら、わたしの處で屋代してますよつて、私のとこの責任になりますよつて、默つて見てゐられまへん。」
男のやうな調子で口を利いた。

田原は爲方なく一寸その方を向いて、會釋しながら、
「いや、御迷惑とは存じてゐますが。これには色々譯がございまして、……」と、いひかけると、それを皆までいはせず、婆さんはまるで羅漢樣のやうに一層深い皺を額に刻みながら、
「その迷惑を知つてるなら、もう譯は聽かいでもよろしい。どうぞお靜かにしておくれやす。」
「へえ〳〵。」田原は爲方なくさういつてゐたが、さりとて無念で堪らず、このまゝ悄然其處を引揚げることもならず手持ち無沙汰に默つてそこに突立つてゐると、やがてがら〳〵と潜戸を開けて家から教師が出て來た。後は又同時にぴしやりと閉めてしまつた。
そこで田原は飽くまで不興な面をして凝乎とそちらを見守つてゐるのを見て、はじめて、
「貴方の先刻の勢ひが餘り激しかつたから、何事が出來て居るかと思つて心配して急いで來て見た。」と、いつてゐる。

田原は、彼に向つて、
「娘はどうしてゐます？」と訊いてみた。
「娘は、家に居ます。」
田原は、心の中で、「あの女め、これほどの騷ぎをしてゐるのに、自分では一體どんな氣でゐるのだらう？　溫順しいを通り越して、餘ぽどの木偶坊だな。」と思つてゐた。そして、潜戸はまるで黑鐵の城門のやうに堅く固めてゐるし、その場の器量は惡いし、どうして遣つたら、この腹を存分に癒やすことが出來るであらうかと、ひとりで唯苛苛焦れ〳〵してゐた。
傍に立つてゐた件の老婆は、教師と何か口を利き合つてゐたが、般若の面のやうな恐い顏をして、
「まことに近所迷惑どすよつて、もつと靜かにしておくれやすと、今いふとるとこどす。」
と、さも〳〵勿體をつけていふ。教師もそれに和しながら、田原の方を見遣つて、
「貴方も又、他人の家へ承諾なしに無理に這入らうとするのは、ようない。それでは

家宅侵入罪になる。」と、一と理窟ありさうな顔をしていふ。
顔に怒氣を含んだ田原は、それを聽いて、强ひてから〳〵と高笑ひを發しながら、
「理窟をいへば、一應さうだが、そんな、屁理窟はこの事では通らない」と笑つて退けた。
彼はあらゆる恥辱を忍んで、この事についてはもう先日來幾度か松原警察署へ往つて、事情を訴へ、取るべき手段について自分の手落ちにならぬことを、參考に訊いてゐたのであつた。
教師は何處かへ出掛けるところと思はれ、衣物を更めてゐたが、隣家の老婆に向ひ、
「私はこれから一寸他へ往くところですから後のことは何分宜しくお賴み申します。」
と、いふと老婆は六ケしい顔をして、
「いや、賴む賴まれるではごはりまへん。近所が迷惑におす。」と勿體さうに切り口上にいつて、
「さあ〳〵、御用の處へどうぞ早うおいでやしておくれやす。誰かてみんな今日の用事に追はれて居りますさかい。どういふ譯が御當人にはあるか知りまへんけど、滅多

に他人の出るとこやおへん……」何だか譯の分らぬやうな、耳こすりなことをいふ。

教師は、婆さんに挨拶して路地を出て去つた、婆さんは、

「ご免やす。お隣の婆あどす。どうぞ、ちよつとこゝ頼んます、開けておくれやす」

と、大きな嗄がれ聲をかけて、又潜戸を開けさせて、そのまゝ家の中へ姿を消した。

哀れなる田原は、たゞ一人そこに取り殘されて、まだ入口の前を立ち去りかね、倍倍怒氣を帶びた顏をしてそこに突立ちながら、京都の奴等が一味になつて、自身に殺人行爲を强ひてゐるのではないかといふやうな氣がしてゐた。

すると、やゝ暫くして、又その婆さんも潜戸を開けて出て來た。そして、田原がまだ其處を立ち去らずに、凝乎とそちらを見張つてゐるのを見ると、彼女はそれを警戒するやうな目付をして、自分の背中で入口の開いたところを塞ぎながら、そうつと又戸を閉めた。そして一と足路地に歩み寄つて來ながら、じろりと田原を見て、先刻よりは少しく優しい調子で、

「まあお入り。」と聲をかけた。

田原は併し、もう先刻から、丁度佐野治郎左衛門のやうな凄慘な心持になつて、其

處ら中の奴等が何奴もこいつもみんな他國者の自分に對して極度の薄情と愚弄とを仕向けてゐると思つてゐたので、それを誰に向つてさういつたのか、よく分らなかつたので、返事をせずにゐると、婆さんは自分の家の入口の方に戻りながら、又重ねて、

「まあ、此方いお入り。わたしのとこにお掛けやす。」

と、田原を見て向うから肯いて見せた。

　それで彼は、いよ／＼自分に對つて云つてゐるのだと分つたので、この場合、わづかにそれだけの優しい聲をかけられたのでさへ嬉しく、すぐ笑顔をもつてそれに應じながら、足輕くそつちへ歩み寄りながら、

「ご免下さいまし。」といつて、そこの家の入口に入つて、端の間の上り框に腰をかけた。

　老婆はそこへ、自分で奥から煙草盆を持つて來て坐りながら、はじめてやゝ更まつた鄭重な言葉を用ゐて、じつと田原の顔を見守るやうにして、

「先程はえらい御不禮な言葉を用ゐまして、どうぞ老人に免じてお目こぼしをねがひます。いやもう、この間から內では蔭で噂をして居ました。これには何か深い譯があ

るにちがひない。失禮ながら、あなたさまも大抵の事ではさうお腹をお立てやしやしまへんでござりませう。ま、どういふ譯か、それは聽かしてもらはいでも大抵推量いたしますさかい、どうどす、えらい、から差出がましうはござりますけど、一遍私がこのお話の仲に入つて見ましようか。」といふ。

田原は、この隣家の人間達に同情を失ふは極めて不得策であると思つたので、即座に、その老婆の懷に入つてゆくやうな調子で、

「えゝ、どうぞ何分よろしくおねがひ申します。」と、素直に云つた。

鶴岡は、この間三條寺町の三島亭で夕飯を食つて歸る途中、寒い月の冴えた夜田原に行き逢つたが、碌に口も利かずに急いで向うに行つてしまつた樣子を見て、ひとり腹の中で、先生相變らず女の事で夢中になつてゐると思つてゐたが、それから四五日過ぎて、樣子を見かた〴〵、何處かへ伴れ出して、今日は少し氣を紛らしてやらうと思つて、いつものとほり十二時頃に目を覺まして、あつさり食事を濟ますと直ぐ川一

つ向うの田原の宿を訪ねた。
　雪の後の寒い日で、田原は例の大きな火鉢に凭掛りながら家にゐた。鶴岡は、田原の頭の中には今はもう女の事よりほかにないと察してゐたが、田原は妙に、なるたけそんな話は避けるやうにして、鶴岡の方から何もまだいひ出さぬ先から、
「君、普選問題で京都でも甚く騒いでゐるやうぢやないか。」と、丁度今圓山公園や岡崎の公會堂あたりで連日示威演説を開催してゐる、普通選擧のことに話題を持つていかうとした。尤も田原が、さういふ話題に昔から興味を有してゐる人間であることは鶴岡の方でもよく知つてゐるので、
「うむ、隨分盛んにやつてゐるやうだ。」
「しかし、君はどう思ふか知らんが、僕は普通選擧には反對だね　僕の意見によると、今日もう殆ど普通選擧になつてゐるぢやないか。各人が悉く正直に脫税といふことをしなかつたなら、參圓以上の所得税を拂ひうる者は、全國の人間が殆ど總てさうぢやないか。それほど選擧權が行使したいならば、あんな馬鹿騷ぎをする前に先づ自分達の方から正直に所得税を國庫に納入することを考へたらどうだらう。それだけの年收

益がありながら、苟くも今日生命財産の安全を保護してくれ、御厄介に相成つてゐる國家に對し、聊かでもよい、分相應に所得稅なりその他の直接國稅なりで、お禮をすることをしないで置いて、やれ、選擧權を與へろなどゝいつて騷ぐのは、まるで不良の徒のすることである。そんな不良の徒に政治に容喙されては健全なる政治を遂行する妨げとなりはせぬか」

田原は滔々として論じた。そして、最後に「君は、どう思ふね?」と、鶴岡の顏を見て微笑を湛へながら問うた。

すると、田原のいふことを先刻から默つて、よく聽いてゐた鶴岡は、その時頭振りを振つて、

「いや、さうぢやない。吾々は、氣が付かないでゐて、もう幾許、稅を拂つてゐるか知れない。……この煙草には稅が掛つてゐる。電車に乘ると稅を取られる。汽車に乘ると稅を取られる。僕等はもう隨分稅を拂つてゐる。そんなに稅を拂つてゐる吾々に選擧權を與へないといふ法はない。」鶴岡は强い確信の面をして云つた。

「うむ、さうか。成程なあ。」と、田原は對手の云ふことが一通りよく解つたやうに大

きく肯いてみせた。
「君は京都の普選運動には關係しないのか。」
「うむ、別に今度は關係はないが、なに場合に依つては少しは彌次つてやつてもいゝ。」
田原は鶴岡を對手に暫くそんなことを話してゐたが、やがて鶴岡は、ふつと思ひ出したやうに、
「あれから女の方はどうなつた。」といつて訊いた。
「うむ。」と田原は、その事については返事をするのも物憂さうな晴れぬ顏をしてゐたが、それでも鶴岡には、この間からの話の行き懸りがあるので、彼に會はなくなつてからの出來事を掻い摘んで話して聞かした。
「その隣家の婆さんが果してどれだけの話をしてくれるか分らないが、とても、これまでの、あの母親の反覆常ならぬ態度では駄目だと思ふが、すぐ壁隣りの家だから、仲に入つてもらつて置くのは何かにつけて得策だらうと思ふ。」
鶴岡は大いに意を得たやうな顏をして、
「それは非常な得策だ。その婆さんに賴んで置けば、君が何時も不安を感じてゐる、

女が、君の知らぬ間に又他へ移轉していつてしまふといふ場合に非常に好都合だ。」と言葉に力を籠めていふ。

「うむ、僕もさう思つた。」

「さうして置いて、どうかして是非一度本人に會ふ分別をしなければならん。」鶴岡は自分の事のやうに興味を持ちながらいふ。

「あの時からいろ〳〵考へてみてゐるんだが、どうも好い工夫が付かない。」田原は思案にあぐねたやうにいふ。

「だれかその女の友達に君の知つてゐる者はないか。それがあると直ぐうまく行くんだがなあ。」

しかし田原は、初めから極めてしんねこにその女を招んでゐたので、朋輩に知つた者などは一人もなかつた。

やがてその話にも飽きたやうに田原が又口を噤んでしまふと、鶴岡は暫く手持ち無沙汰な樣子であつたが、

「どうだ、君今日は外に出て見る勇氣はないか。」

と田原を誘ふてみた。

「うむ……何だか外は寒さうだな。」と、田原は障子のガラス越しに川原の方を覗くやうにして見てゐたが、雪の後昨夜から又霙まじりに時々時雨れてゐた雨は晴つて、川の向うの南禪寺から如意嶽の方の山が、午下りの冬の日を浴びて明るく照つてゐるのが手に取る如くに見えてゐる。

「なるほど雨はもう止んだな。」

「雨はもうとつくにやんださ。何處かへ往つてみよう。」

「どこへいく？」

「君は酒はやらない方だが京極裏にうまい酒を飲ます處がある。肴も良いのがある。そこへ往つて見る氣はないか。」

「さあ、京極なら直ぐだ。それぢや、あんまり遲くならないやうに、その邊までお附合ひしよう。」

二人はそれから外に出た。雪の後へ昨夜からの雨で、道の凍らない處は泥濘つた雪汁が流れてゐた。刄のやうな氷の風が頰にしみた。

丸太町を寺町通まで歩いて來くると、丁度御所の上の方の空に、何だかまだ降り足りないやうな顏をした雪模様の雲が薄墨を流したやうに物々しく佇んでゐる。北の方から吹いて來る風が堪らなく冷い。田原は、

「京極まで歩いてもすぐだが、此處から電車でいかう。」といふと、鶴岡も、

「うむ」といつて、電車で一旦四條小橋まで往つて、そこから新京極の方に入つてゆくと、その邊の路地裏の拔け道になると、鶴岡は田原よりも、ずつと明るい。彼は田原の先に立つて歩きながら、大阪なら道頓堀の法善寺裏、東京なら白木屋裏の食傷新道か、淺草の千束の通りといつたやうな、狹い巷路に這入つていつた。一寸一杯、おでん燗酒の暖簾を掛けた小料理屋が軒並つゞいた、ガラス張りの小障子の外から美味さうな越前蟹の大きな足だの、櫻章魚の眞紅な奴などが食道樂の食慾を唆るやうに飾つてあるのが見える。

鶴岡は、一寸田原の方を振返つて、

「君は此處へは餘り來ない方か。」

「うむ、さういふ譯でもないが、酒を飲まないのに、たゞ肴を食べにばかり入るのも何だか幅がきかないやうな氣がするので、あんな蟹など好きだが、あんまりやつて來ないんだ。」

「そんな馬鹿なことがあるものか。なに、君は酒を飲まなければ、僕だけ飲むから、君は勝手に肴を食ふさ。……どこが好い？……ぢやゝ僕のよく知つてゐる此所にしよう。」

といつて、鶴岡はついと頭で、章魚の足と蛤とを赤と白とで染めぬいた暖簾を分けてそこにあつた江戸兒バーといふ小料理屋へ入つた。そして、中にゐた親爺らしい印半纏の男と顏を見合はせて、兩方から、

「やあ、やあ。」といつた。

そのほかにも、狹い土間の卓に腰を掛けてゐる者、四五疊敷けるほどの座敷に幾つも並べた餉臺に凭つて猪口を持つてゐる者などとも、大抵顏馴染みと思はれて、それ等とも、

「やあ、やあ。」と互にうなづき合つてゐた。

鶴岡は田原を促して疊の上にあがり、向うの壁の隅の一番落着きのよささうな處があいてゐるので、そこの餉臺に向ひ合つて趺坐をかいた。
「君は何が好い？」
「何でも好い。」
「はゝゝ、さう云はずに、まあ何でも好きな物をいふさ。」
「なに、僕は酒は飲らぬが、肴は酒飲みが好きなやうな物がやつぱり好きなのだ。」
「あゝさうか。ぢやねえ、先づ蟹、それから海鼠、蛤の汁ももらはうか……」
「僕はあの章魚と芋の甘煮が欲しいなあ。」
「ぢや、その甘煮を一つ。僕はいらない、その代りに例のとほり海鼠腸を持つて來て。後は又ぼつ〳〵。」
鶴岡は、傍に蹲んで聽いてゐた襷掛けの姐さんに笑ひながらそれを命じた。
「畏まりました。」姐さんは耳に珍しい東京辯で、はつきりさういつて、立つて往かうとするのを、鶴岡は、
「おつと、それから酒は熱い奴をどうぞ。」と又後から聲を掛けた。

鶴岡はそこで殆ど自分ひとりで銚子を三四本空けて、田原には勸めて飯を食べさせたが、やがて勘定を濟ましてて其處を立ち出でると、

「もう一軒此所より、ほんとの、酒の好きな者ばかりゆく面白い處がこの先にあるんだ。そこへ行つてみようか、そこの親爺が非常に愉快な奴なんだ。」

と、彼は田原の意向を謀るやうに振返つた。

「なに、僕はもう澤山だが、君がまだ飲りたければ附合ふさ。」

といつて、二人は汚い雪汁の濘つた裏寺町を歩いて、誓願寺脇のとある繩暖簾の掛つた居酒屋へ、鶴岡は田原を伴れて入つた。

なるほど質素な、荒い木組みの板の間で大きな角火鉢にあたりながら變り者らしい繕はぬ親爺と、まめさうな婆さんとがゐて、鶴岡の顏を見ると、

「やあ、おいで。」といつた。

「もう大分飲けたらしいな。」

「うむ、そこの江戸ツ兒で一寸やつた。」

鶴岡はそんなことをいひながら、そこでも又薄汚い疊の上に田原を勸めて上がらし

て、ゐただの蟹などを取つて好い加減飲んで後は一人で飯にした。

やがて其處を出ると、二人はぶら〳〵京都の通りを歩きながら、今度は電車に乘らず、寺町通りを上つて田原の宿へ又一緒に戻つて來た。それから鶴岡は十一時過ぎまで話してゐた。

「今日は大變君に御馳走になつた。僕もその女の事で、何年に亙つて碌に仕事もせず錢は使ひ果して借金ばかり方々に殘つてゐるといふ始末だ。しかしその內一遍是非宇治に行かうよ。宇治が一番好い。」

田原は、それでも鶴岡でも傍にゐて、何かしら話をしてゐる間は、それに紛れて女の事の鬱憤も幾らか氣が解れるので、話の種が盡きかけると、後からあとから變つた話題を思ひ付いて話に耽つてゐた。

やがて鶴岡が、今晚は自分の處に歸つて寢ようといつて、やつと尻を持ち上げて歸つたのはもう十二時に近かつた。田原はそれから直ぐ寢床に入つた。

そして、うと〳〵としたか、せぬかと思ふ時分になつて田原は、障子の開く音にふつと眼を覺まされると、緣側の處から宿の婦人が、

「一寸失禮をいたします。えらい、もうお寢みになりましたところを、お眼をお覺ましいたしまして濟みまへんことどすが、あの只今このお方が、貴方樣にお眼にかゝりたいと云うてはります。」慇懃な調子でさういひながら、手にした名刺を差出した。

田原は寢床の上に半分起き上りながら、それを手に取つて讀んでみると、それには京都府川端警察署刑事何某と記してある。田原はそれを見て、心の中で一寸驚いた。先日も鶴岡が此處へ一泊していつた晩にも刑事は宿の玄關に來て居つたのであるが、そんな事を一寸も知らなかつたのは彼一人であつた。それで、刑事がそんな深夜に突然訪問したと聞いて、彼は、かねて或筋に賴んでゐたこともあるので、これは、きつとあの女の事で何か事件が起つたなと思つた。そして、

「あゝ、さうですか。兎に角面會しますから、どうぞ此方へ通して下さい。」

さういつて彼は寢床の上に起きて坐りながら、着物を引被けて待つてゐると、刑事は二人づれで入つて來た。

黑魚子紋付の羽織に白の太い平打の紐を結び、折目の正しい仙臺平か何かの袴を着けた四十恰好の立派な人物が先に立つて、後から、少しくその下前らしい三十五六の

縞の着物に縞の羽織を着流した男が附いてゐた。
彼等は薦められるまゝに、前に並べられた座蒲團の上に乘り、極めて謙遜な調子で先に立つた男が先づ口を開いて、
「もうお寢み中の所を、斯樣な深夜に突然お訪ねいたしまして、御迷惑の點は甚だ恐縮に存じます。」といつて丁寧に首を下げて一應挨拶をして、笑顏を作りながら、
「名刺にも書いて居りますとほり、私共はこのすぐ川向うにあります川端警察署に勤務いたして居ります京都府の刑事でございます。どうぞ今後も宜しうお見知り置きのほどおねがひ申します。」
田原は、たゞ「はあ〳〵。」といつて應答をしてゐたが、どうも馬鹿に慇懃な調子でやられるので、心の中で少しく勝手が違つたやうな氣がして、「これは、自分の女の事の話ではなささうだな。」と、いくらか失望したやうな心地になつてゐた。
刑事はそれから稍々更まつた調子になつて、
「えゝ一寸あなたにお訊ねいたしたいことがあるのですが。」と、妙に意味を持たせたやうにいつて、又口を噤んで田原の方をじつと見た。

彼は、何とは知らず變に氣がゝりで、もどかしくなつて來た。それでも刑事に、かうした深夜訪ねられるやうな覺えはないので「あゝさうですか。どういふ御用件ですか。」落着いた口調でさういふと、
「なに、他でもございませんが、貴方は、鶴岡武雄といふ人物を御存じでございますか。」
といつて訊いた。
田原は腹の中で「なあんの事だ。鶴岡の事か。」と思ひながら、そんな顔もせず「ええ、よく知つてゐますよ。」と、笑顔をして見せた。
「あの男と御親交がございますか。」と、重ねて問うた。
それで田原は、自分には、今、そんなつまらない事よりも生命の次の女の事で大事な場合である。飛んだ繋合ひにでもされたら、厄介だと思つたので、簡單に鶴岡と自分との交渉を彼等に分りよく說明して聞かした。
「さういふ譯で鶴岡とは、隨分古くから知つては居りますが、親しいといへば親しくない仲でもありませんが、類似の職業であつても、それには又自から種々な區別があ

つて、平素の生活その他の事などでは、先づ何等の立ち入つた交渉も關係もないのです。……唯學校が、御承知でありませう、……あの學校の同窓……年代は十年も違ひますが……だもんですから、勢ひ、かうした遠方に來合はせてゐて、遭へばお互に懷かしく往來するといふやうな譯なのです。」

するとり刑事は、齒切れよく、

「いや、お話を承りまして、よく解りました。貴下の事をどうと申す譯では少しもございませんが、既に御承知でもございませうが、近頃普通選擧の事で當地も一寸騷いで居りますので、あの鶴岡も元からさういふ事に屢々關係がございますので、今回はあの男がどういふことをそれについてして居りますかと思ひまして。いや、これも私共の役目でございますもんですから。」

「それは、こんな夜更にさぞ御苦勞千萬でございませう。鶴岡はつい一時間ほど前に此處から歸りましたよ。」といふと、

「えゝ、それは知つて居ります。」と刑事はうなづいた。

田原は、それを聞いて心の中で、なるほどなあ、刑事といふ者は、職掌柄とはいひ

ながらこの嚴冬の眞夜中をも厭はず、あんな鶴岡のやうな女を買ふことゝ酒を飮むことゝのほかに何の恐しい企計もなささうな人間一匹の爲に、しかも大の男が二人がゝりで動靜を監視してゐるとは、隨分人間の能力を無益の事に濫費してゐるものだと呆れながら、

「あゝ、さうですか。それは、……今晩は何でもこれから宿に歸つて寢るとか云つてゐましたから、きつとさうでせう。」

「えゝ、もう先程宿に歸つて寢て居ります。」刑事はそれもよく知てゐるやうにうなづいて、

「此方へ鶴岡は度々參りますか。」と訊く。

「いや度々ではありません。今日でたつた二度めです。一週間ほど前にはじめて訪ねて來たのです。」

「あゝ、左樣のやうですなあ。」といつてゐたが、又暫く考へるやうにしてゐて、

「それから何か印刷した物でも貴方に見せは致しませんでしたか。」と訊いた。

「いえ、一向そんな物は見せませんでしたよ。」

「あゝ左様でございますか。いや、もうよく解りました。これはどうも、よくお寢み中のところを、飛んだ御不禮をいたしまして、申譯がございません。それではこれでご免を蒙ります。」

と丁寧に詫びを云つて二人の刑事は歸つた。

田原はそれから直ぐ又寢てしまつた。そして翌朝宿の婦人が座敷に來た時その話をして、

「どうも、あんなに遲くから、さぞ御迷惑でしたらう。」と、田原の方から詫びを云つて「あの鶴岡といふ人間は、それや東京にゐても、どうかすると刑事の附くことが偶にはあるのださうですが、何もあんなにまでして、夜々中餘所の家を叩き起したりするやうな大騷ぎをせずともいゝんですがなあ、餘計な手數を掛けるもんです。」

彼が慨歎するやうに云ふと、宿の婦人は、

「私とこは、こんな稼業やものどすよつて、こんなこと時々ごはりますさかい、もうよう馴れて居りますけど、貴方さまお寢み中のとこ、さぞ御迷惑でごはりましたでござりませう。あのこの前おいでになりました時にも、やつぱし二人で、二時頃まであ

この玄關のとこで待つて居りました。」と、はじめて田原にその事を明かした。

田原は、それをはじめて聽くので、眼を見張つて驚きながら、

「へえ！　そんなことがあつたのですか。ちつとも知らなかつた。そいつは、あなたの方でさぞ御迷惑でしたでせう。なに、あの人間、少しもそんな後暗い行爲などは無いのですけれど、多少社會主義などに關係があつたものですから、やつぱりこの頃の世間が少し騷がしいので、警察でもいくらか注意してゐるのでせう。」田原は、なるたけ宿の者に疑惑を抱かせないやうにさういつた。

「えゝ、その事もよう存じて居ります。」宿の婦人は何事もなささうにさういつてゐた。

鶴岡は、それから後も段々足數繁く田原の宿へ遊びに來てゐた。そして刑事の尾行してゐることなど、少しも意に介してゐなかつた。

ある時など、一度十二時過ぎて一旦自分の宿へ歸つていつたが、宿は寢てしまつて起きて戸を開けてくれないので、田原のもう寢てゐるところを、加茂川の河原の方から廻つて來て、離れ座敷の雨戸の外から聲を掛けて田原を起して泊つていつたことな

どあつた。

鶴岡はもう、いよ〱その頃から二進も三進もいかなくなつてしまつた。借りられる處は大抵借り盡してしまつたし、それに、借りる時には、今にも立つて東京に歸らねばならぬ旅費がないとか、ぜひ山口縣の長府まで一寸往つて來なければならぬとか、いや別府に人を迎へに往く用事があるとか、都合の好いことを云つて、うま〱と借金をしてゐたのであるが、その、明日にも立つて往くやうなことをいつてゐた鶴岡が又しては、ひよつこり顏を見せるので、

「おや、君はもう東京に歸つたのかと思つてゐた。まだ京都にゐたのか。」と、いつたやうな調子で、流石の彼も、いひ出して、ひどく惡感を抱かれるやうな借金は口にしかねた。しかし、彼にとつては東京に歸らねばならぬといふのも嘘でもなく、長府は自分の亡父の故郷で、そこにはまだ先祖の代から遺つてゐる不動産などもあつたし、亡父の弟で叔父になる人は四國あたりの鑛山に長く勤めてゐて收入も相當にあつた

彼は學生時代に學資をその叔父の手元から仰いでゐたこともあつた。別府の溫泉には男ばかりの兄弟の中に、たつた一人きりの最愛の妹が、一人の子供を伴れてもう去年の十一月から保養に往つてゐた。その妹は嫁してからまだ何年にもならぬに、不幸にして二三年前子供を一人遺して夫に死別れたのであつた。なか／＼の美人でもあらうへに兄達に似て才藻にも富んでゐる方なので、男兄弟の愛はその不幸なる妹一人に鍾(あつ)まつてゐるのであつた。とり分け、やがて四十に近くなつても獨り者でゐる鶴岡は、その妹に對してだけは、彼ののんき者に似ず非常に眞面目な愛情を有してゐるのであつた。去年東京を立つて此方に來た時にも、一つはその妹を別府まで送り屆け旁々やつて來たので、京都に足をとゞめたのはその歸途(かへりみち)であつた。そして不幸に沈んで大分身體の健康を害してゐた妹が冬中を彼方で凌いで、又氣候が暖くなつたら歸る時にも迎へに往くつもりであつた。

　田原がもし持つてゐるやうであつたならばと思つたが、これは駄目であつた。宿の方でももうこの頃では、いふことや、仕向けることが段々露骨になつて、さすがのんき者の鶴岡にも癪に障るやうなことが度々あつた。さうかと云つて、何時までもから

してゐたところで綺麗に勘定を拂つて立ち退ける見込みも當分ないので、
「ぢや、一先づこのまゝにして立ち退くから、東京に歸つたら早速金を送ることにしては、どういふもんだ。」ともいつてみたが、
「それでは、ども困ります。」といつて、承知してくれない。
「しかし、君、到底今の處此處にたゞからうしてゐたのでは僕にも方が附かないんだから、君の方でも僕を此處に置いて食はして置くだけでも損ぢやないか。持つてゐる物だつて、あのバスケットがたつた一つきりだ。君の方で僕を留めて置かうと思つても、此方で勝手に去つてしまつたら爲樣がないぢやないか。」
さういふと、宿の者は、澁々笑つて、
「貴方さんが、滅多そんなこともおしやしやしまへんどすやろ。」といつて、たとひ全部でなくとも、せめて半額でも入れないでは、そのまゝには立つていかさうとはいはなかつた。
田原の處に來ても、鶴岡は口にはそんなに困つてゐるやうなことはいはなかつたが、來るたびに、今にも四五日のうちに立つて別府に往くやうなことをいつてゐた。

「どうせもう遲くなつたのだから、もう東京には歸らないで、このまゝ直ぐ別府に往つて、三月中くらゐ彼方にゐて、四月には又歸途に京都に寄る。妹が京都を見たいと云つてゐたから、一緒に來て見せてやる。」

さういふ彼の心はもう半分向うに往つてゐるのであつた。金を不自由のないほど持つてゐなければ、いくら京都に居つても、やつぱり面白くはなかつた。

「別府は安くつていゝ。」

「さうかなあ。僕もいきたいんだが。…どのくらゐ掛る。」

「なに、金はいくらも要りやしない。一月に三十圓もあれば澤山だ。」

「まさか。」

「本當だ。部屋を一間借りて、妹が炊事をするから。」

「うむ、そんなら、さうだらう。…僕もこの冬中をこの山の中の京都にゐて過さねばならぬといふは何といふ因果かな。」

田原が自分を嘲るやうにいつて笑ふと、鶴岡は、

「なに、大丈夫女の心は分つてゐるよ。今にうまく解決する。」

その頃二人の會話は、大抵いつも定つてそんなことであつたが、田原は、鶴岡が何時も安價な歡樂を求めてそれに滿足してゐるのを見て、いつか一遍もつと氣持ののんびりとした處へ何處か往かうと、この間から思つてゐたのであつたが、そのうち一月の末の暖い日に丁度鶴岡が遊びに來たので、日の暮れから宇治に誘うていつた。

いつも京極あたりの襷掛けの姐さんのゐる處で飮み馴れた鶴岡は、さうなくてさへ不斷から赤肥りに肥つた樣子がこの頃では又ひどく、身體のまはりを不精にしてゐるので初めて見る者には、どう見ても破落戸か壯士のやうな感じを與へるのであつたが、京都風の纖美なところに又瀟洒とした茶趣味の加はつた花屋敷の飽くまで都雅びた氣持が、彼は、すつかり氣に入つてしまつて、非常に興に乘り、宵から十二時頃まで長い冬の夜を羽目をはづしてひとりで飮みつゞけ、たうとう德利を十何本と飮み倒した。猩々のやうに眞赤になつた彼は、だん〳〵放縱な身體の姿態をして嫌がる女中の手を握つて引寄せたり酒を强ひたりしてゐた。

「俺が一つ博多節を唄つて聽かさうか。俺の博多節を聽いたら、大抵の女がまゐつてしまふ。博多の藝者が、それで惚れた。」

「えゝ、どうぞ聽かしとくれやす。」
鶴岡はそれから、肥滿した身體中に力を入れて、吃驚するやうな、馬鹿高い聲を張り揚げて博多節か何か知らんことを呶鳴つた。時々切なさうに息を吐きながら、
「どうも今日は好い具合に聲が出ない。」といつては、眼を瞑つて又やり出す。
暫くお愛想に聽いてゐた女中は、
「あんたはん、あんまりお上手やおへんなあ。」と冷やかした。
「なに、これで、なか〳〵俺はうまいんだ。今日はまづいが。」
「每時も、さうなんどつしやろ。」
「餘計なことをいはないで、おい酌。」
鶴岡は不貞々々しい恰好をして酒盃を持つた手を突出した。
「あんたはん、お酒もうこの上飮まんとおきやすな。そないお上りやしたら、おいしいことおへんがな。」さういふ客を扱ひつけたお花といふ年增の女中は、つけ〳〵とさういひながら、德利を取つて酒を注いでやつた。
「博多節又後で聽かしてもらひます。」と、いつて女中は急がしさうに立つていつた。

「あの女好いなあ、彼奴どうかならないかなあ。」
鶴岡は猛獸の飢ゑてゐるやうないひ方をした。
「なあに、ちつともよくはないさ。」
「いや、いゝ。どれを見てもみんないゝ。誰か、どうかならないのか。」
「それは君が今女に飢ゑてゐるからさ。僕なんぞもう古くから知つてゐるんだが、ただ話すのにはいゝが、そんな氣は少しも起らんね。」田原は、もうこのうへ羽目を外させないやうに、いゝ加減にあしらつてゐた。
さうしてゐるところへ庭の植込みの向うの方から、女中の呼ぶ聲がして、
「田原さん、田原さん、今直き淨瑠璃のお稽古が始まりますよつて、早うおいでやすな。」
といつた。
「あゝさう。今すぐいきます。」
と、田原の方からも大きな聲で返事をした。田原は去年の暮から京都と宇治とに半分づゝ往つたり來たりしてゐる間に花屋敷の女達の仲間になつて、そこへ教へに來る師

匠について「お俊傳兵衛」を教はつたりしてゐたのであつた。
鶴岡がまだ酒盃と德利を引附けてゐる間に田原は、
「どれ、一つ聽いてくるかな。」といつて、起ち上つて庭樹の中を拔けて帳場の方に出て來た。
帳場の方はまだ宵の口のやうに電燈が煌々としてゐた。方々の座敷から、片づけものを下げて來るので女中達は今せつせと動いてゐる最中であつた。
田原が、其處へ顏を出すと、何時も帳場の處に坐つて、氣嫌好ささうに、にこ〳〵してゐる花屋敷の主人公は、景氣よく、
「やあ！　お久振り。まあ此方へお掛けやす。今直きに始まります。」
さういつて暫くしてゐるうちに、受け持ちの用事が片付いて身體のあいてゐる者から、內庭の帳場の眞向うの座敷で一人づゝ義太夫の稽古がはじまつた。田原も久し振りに「堀川」のとばロの方を少しばかり淩へてもらつたが、ほかの事に氣が取られてゐるのでそつちの方へはしんみり身が入らなかつた。
やがて暫くして庭の植樹の先の離室に戻つて來てみると、それでも鶴岡はおとなし

く酒のあとを御飯にして、極樂淨土にでも往つたやうに好い氣嫌に啣へ楊枝をしたまま、肱枕で微睡(うとく)としてゐる處であつた。

「おい、もう飯をやつたかね。もう遲い、そろ〱寢ようぜ。」と、田原が聲を掛けると、彼は、夢中のやうに、

「うむ。」といつてゐたが、そこへ田原の後を追うて、すぐ女中がやつて來て、

「今後で直きお床を延べます。」といつて、鶴岡の御飯を食べたあとの物を廣蓋に載せて下げて去つた。

それから十日ばかりも經つて、鶴岡が又夜遲くまで話してゐて一旦歸るといつて表から出ていつた後、再び河原の方から引返して過日(いつか)のやうに離れ座敷の下を流れる小溝の向うから田原を呼び覺して裏木戶から這入つて泊つて去つたその翌日であつた。夕方田原は一人で、何時にない、氣分の凪いだ樣な心地になつてゐた。あれから又女の方の事が一層有望な曙光を認めて來たので、さしもに焦躁(いらつ)いてゐた彼の神經もこの

十日ばかりは幾らか落着いて來たのであつた。

するとそこへ宿の婦人が、田原の方からは別に呼ばないのに障子を開けて入つて來た。神經質の彼はもうそれだけで何事かと心の內で、はつとなつてゐた。宿料が、去年の暮に入れたきり丁度一ケ月と十日ばかり滯つてゐるので、それで彼はもう好い加減氣にしてゐたのであつた。田原の推量では、多分その事をいひに來たのらしく、何時も人柄で、笑顏ながらに鄭重な口のきゝ様をする婦人は今日に限り毎時の笑顏を見せずにたゞ平常の鄭重な調子ばかりで、やゝ面に憤懣の色を帶びて、

「あの今日は一寸貴方様にお願ひがごはりましてお邪魔に上がりましてござります。」

といふ。

田原は心の中で、さてこそと察しながら「はあ、それはどういふ事ですか。」

と、平氣らしく云つたが、顏の調子は、ちやうど對手の顏と相映じ合つたやうに、さつと變つた。

「あの、突然にこんなことを申上げて、さぞ貴方もお困りやろとはお察し致しますけど、私のとこでも一寸都合がござりますので、今日限りこちらの座敷をお空けして戴

きたうぞんじますのでございます。どうぞおねがひ致します。」
と、日頃物馴れた、優しい調子に似ず、きつとした口のきゝ様でさういつた。田原は心中てつきりこれは宿料が四十日餘りも滯つてゐるので、その爲であらうと思つたので、
「あゝ、左樣ですか。」と、一つ肯いて、「……座敷を空けてくれと仰有られては、私の方からたつて泊めて頂きたいとは申しかねる次第ですが、……こちらの座敷といはれるのですから、この離れ座敷を他の座敷へ移つてくれと仰有るのですか。」と、念の爲に、いくらか空とぼけて訊いてみた。
するとこの婦人は、強く頭振りをふつて、
「いえちがひます。他の宿へお變りをお願ひしたいのでございます。」と明らかに云ふ。
「はゝあ、……さうですか。なるほど。……けれども、私は甚だ相濟まぬことで、まだ今年になつてからの分の宿料を差上げてゐませんので、いつもそれが氣に掛つてゐたのです。それには、自分の方の勝手ばかりも申されませんが、いろ〳〵な事情がありまして、金を取る事も、もう長い間せずにゐましたものですから、隨分御迷惑を掛

けて居りますが、もうこれからは追々仕事も手に着くと思ひますから、こゝもう暫時のところ御猶豫をねがへれば滯りなく一應お帳面を綺麗にして差上げようと思つてゐたのです。どうか、さういふことにお願ひしたいのですが。」

と、田原は憮然として云つた。すると婦人は、ヒステリックに頭を振つて、

「いえ、そんな宿料の事などで、こんなことを申すのではござりまへん。」と、そんな金錢の事をいはれたのを、さも〳〵心外のやうに云ふのであつた。

田原はそれを聽いてゐて、一寸解しかねた。それで腹の中で、何で今日藪から棒にそんなことをいひ出したかと、いろ〳〵に、理由と思ひ當る節々を考へてみた。なるほど宿料が滯つてゐるので、そんなことをいふとすれば、他へ轉宿してくれといふ前にもうこれまでに幾度か、そのことを催促してゐる筈である。正月から此方一月末の定まりの日にもそんなことは向うから、たとひ腹ではどう思つてゐるか知らんが、口に出しては何にもいはなかつた。いはれないだけ此方ではひどく氣に掛つてゐたのであつた。しかし口には綺麗なやうなことを云つても、やつぱり宿料のことを氣にしてゐるのであらうか……どうか、自分で、あれかこれかと考へてみても、肝腎の宿料の

事はそつち除けにして置いて、足下(あしもと)から鳥のたつやうに、少しの猶豫もなく今日これから直ぐ出ていつてくれとは、日頃の溫柔にも似ず、あんまり手酷しい。田原は又押し返していつた。

「しかし、それは、私にしてもさう急にいひ出されたのでは甚だ面目ないことですが、一寸困るのです。今も申すとほり、もう長い間少し收入の道を怠つてゐたので、あなたの方を出るにしては一月以來の宿料の方を綺麗にしていかなければならず、……なに、私が身一つで、此方を立ち退(の)いてくれと仰有れば今直ぐにでも、して出來ないことはありませんが、それでは又あなたの方でも御迷惑でせう。」

さういふと、宿の婦人は、もうさつきからひどく昂奮してゐるやうに不斷の血色の悪い人に似ず兩頰に紅を潮して、

「いや、わたしのとこは、そんなお金や何かのことでこんなこと申しまへんのどす。」

何處までも金のことでそんなことをいひ出したのではない。あまり宿料のことでそんなことをいひ出したかと思はれるのが、ひどく侮辱でもされてゐるといふやうな口吻である。

田原は心の中で、「さうか、どうしても金のことではないとすれば、何の理由でひどくから昂奮してゐるのであらう。」と、又いろ〳〵心當りを思ひ直してみた。

「はあ、それは、どうも困りましたなあ。いや、出て往つてもらひたいと仰有れば無論出てまゐりますけれど……」といひかけると、

「えらい、俄にこんなことを申しまして、あなたさんにもお氣の毒にぞんじますけど、どうぞそのやうにおねがひいたします。」

「えゝ、よろしうございます。承知いたしました。他へまゐりませうが、しかし、今日に限つて俄にそんなことを仰有るのは何か重大な理由がなければ、そんなことを仰有る筈がないのですが、から申しては何ですが、御當家は誠にお人柄で穩かなお家とぞんじてゐるのです。餘程の理由がなければならんと思ふのです。私の人物にどんな落度がありますか、自分の心得にもなることですから、宿料の事でないとすれば一體どんな理由でせうか、打ち明けてお話を承りたいのです。さうでないと、此方へは、私共の同じ職業の人で段々知名の人も來泊するのですから、後にいつまでも自分の恥を遺すといふ譯になりますから、どうぞ腹藏なく仰有つて頂きたいのです。」

田原は實際謙遜な言葉でさういつて理由を訊うた。

宿の婦人はそれにも頑として、應ずる氣色はなかつた。

「理由ちうやうなことは何にもござりませんけど、たゞ、ぜひ共今日中に座敷をおあけして頂きさへすればよろしいのでござります。」と、平素手堅い一方の家だけあつて、一旦いひ出したら、とても挺子でも動きさうにない。

田原も内心さすがに幾らか勃然となつた。

「いや、もう繰返して申しますまい。それでは立ち退くのは立ち退きますが、宿料の方を今日中に差し上げるといふ譯にはまゐりませんが、それはどんなものでせう。」

「えゝもう、そんなこと何時かて、貴方樣の御都合の宜しい時でよろしうござります。私の方から突然にこんなことおねがひ致しますのどすさかい、どうぞ座敷さへ今日中にあけてもらひさへいたしますればよろしいのでござります。」どうあつても、一歩も讓らないといふ調子である。

四十日間の宿料もいらない、たゞ今日中に、片時の猶豫もなく座敷を空けてくれとは、いくら理由も何にもないといつても、これは何かひどく腹を立てる理由がなくて

は叶はぬことである。さう思ふと、向うで明らさまに打ち明けないだけ一層それが訊いてみたい。彼は又しても、あれかこれかと、種々心當りを思ひ浮べてみた。「あゝ、鶴岡がこの頃殆ど毎晩のやうにやつて來て、晩くまで話して往くので、それに尾行して來た刑事が玄關に張込んでゐる。こんな手堅い律義一方の家だから、それをうるさく思つてのことかも知れぬ。

「えゝ、それはもう、この上仰有らなくても解つてゐます。座敷を明けないとは申しません。出て往きますが、しかし、あんまり突然のことですから、理由がないと仰有つても、何か理由がなければならぬ。ぢや何でせう、鶴岡がうるさく來るので、いつも刑事が附いて來るのがお宅では御迷惑なのですか。……私もどういふ所が自分の好くない點か、承つて置きたいのです。」

さういつて訊いてみても、婦人はたゞもう一點張りに、理由はないが出ていつてもらひたいと、昂奮の狀態で同じことを繰返すばかりである。

田原はそれで獨語のやうに、頻りに首を傾けながらいつてゐた。

「はて、不思議だなあ、宿料のことでもなく、鶴岡のことでもないとすれば、一體ど

んな事かな。」

そのうち彼はふいと、ある一つの事を思ひ浮べた。そして、腹の中で「あゝ、すつかり讀めた、あれだな。」と思つたが、まさかそればかりは口に出して、さうであるかと、訊いてみる譯にもいかなかつた。向うでも、まさか、それを口にすることも出來ないのであらうと思つた。

さうと氣が付くと、彼は、一層それを押し隱すやうに、わざと自分には素知らぬ風を裝つて、しきりに獨りで、

「どういふ譯でさう仰有るのか、どうしても理由が私には解らない。……いや、それはもうよく解つて居ます。必ず御迷惑にならぬやうにどこかへ引越しますけれど……何故かなあ。」幾度となく同じ事をいつて、彼は不思議さうに考へてゐた。

その、口に出しては云へないことゝいふのは、かうであつた。

そこの家は、前にもいつたとほり、皇居がまだ此方に在つた時分からある古い建物で、殊に女中なども使はず手が足りないところからでもあらうが、一體不精な家で、

掃除なども、ひどく不行屆であつた。田原は、そんな尾羽打ち枯らして放浪はしてゐても、彼の生まれ付の潔癖は何處に居つても變らなかつた。田原のこれまでの癖として、溫泉にいつても普通の旅館に泊つても、何よりも先き第一に氣になるのは便所のことであつた。便所の掃除が淸潔にしてゐなかつたりすると、何處にゐても、氣持が惡くつてとても堪へられなかつた。

そこの家は又、いかなことにも便所が汚くつて、草履など幾度新しいのと取り換へても高は知れたものだが、別に節儉といふ譯でもなかつたらうが、いつも古くなつて、まことに尾籠の話であるが、濡れてびしよ〳〵してゐた。彼はその草履を穿いて便所へゆかなければならぬのが每日の思ひの種であつた。每時便所に行く時に穿く足袋を別にしておいて、用が濟むと新聞紙に包んで緣の隅に置いとくやうにしてゐた。殊に冬は誰しも便所が近いものであるが、小便の方は殆ど宿の便所にしたことはなかつた。いつも裏庭から木戶の外に出て加茂川の河原に放尿してゐた。小便はそれで濟むが、こゝに困つたのは大便である。大便ばかりは幾ら宿の便所に往くのが厭でも、いかないわけにいかない。いつもそれが爲に少しくらゐ催した便通を我慢してゐた。

そのうち彼は遂に大膽な料簡を起してしまつた。いつそ大便も便所でない處でしてやれと思つた。甚だ尾籠なことであるが、支那では自分の部屋で壺へ用を足してすぐ後で始末をするといふはなしである。それなら何も臆する道理もないと思つて、彼は前もつて小便だけは河原に出て用を濟ましておいて、それから自分の部屋に戻つて來て、新聞紙のいらぬのを何枚となく重ねておき、遠い廊下に誰の足音もせぬのを見すまして、その上に排泄したものだ。一寸考へると、ひどく不潔のやうで、誰でもそれを聞くと顰蹙するであらうが、よく考へてみると、これほど清淨なことはない。第一便所だと自分以外大勢の者の糞尿の臭氣を嗅がねばならぬが、さうして用を足せば、決してその憂ひはない。十分に注意して新聞紙を厚い上にも厚く重ねて置けば粗相をする氣づかひはない。心地よく用を足すことが出來て、まことに氣持がよい。

彼は、さうして排泄した奴を、新聞紙にくる〳〵とくるんで、緣側から早速座敷の下を流れる加茂川の小流れに放り投げた。加茂川の水を堰分けた細流は、瀨切つて流れ落ちて行くために、新聞紙に包んだ物は少しの後くさりもなく、面白いやうに浮きつ沈みつ下流の方へと流れ去るのであつた。

田原は一度その味を覺えてからは、もう、とても汚い宿の不淨所へなど往く氣がしなくなつた。しかし、少しも便所へ往かないと、阿漕が浦に曳く網も度重なれば人もこそ知れの譬で、もしや氣づかれはしないかと思つたが、さう思ひおもひ止められなかつた。

宿料のことでもなく鶴岡のことでもないとすれば、どう考へてみても、それより他に、さうむきになつて腹を立てる理由がない。といつて、まさかこの事ばかりは、そんなことを座敷でせられては迷惑ですと、口に出して明らさまにいふことも出來ない。幾ら不淨な所とはいひながら便所があるのに、此處で用を足すとは自分の方を侮辱してゐること甚しいものである。これは唯々一口に宿泊を謝絕しさへすればよい。さう思つていひ出したことであらうか。と、田原はその事に氣が付くと、極りが惡いとも何ともいへない、擽つたいやうな氣もする。そして、果してそのことに氣が付いてゐるのであらうかと、宿の婦人の顏色からそれを見出さうとして凝乎と面を見た。何にしても日頃の溫和な人に似ず婦人はひどく立腹をしてゐる。

田原は、心の中で、これから又急に宿を何處かへ變らねばならぬとすれば、實に厄

介千萬であるが、かういひ出されたのであるから無論變るにはかはる、けれどもその理由を明瞭といつて聽かしてもらはないと、氣が澄まない。「それでは、さういはれるのは、かういふ譯からですか。」と、餘程、座敷で用を足した不始末を正直に白狀して詫びを云つて、氣がさつぱりとして他へ轉宿することにしようか。と、咽喉までそれが出かけたが、「いや〳〵待て、さう輕卒に口を滑らしてしまつて、もし婦人の方でそのことに氣が付いて居らず、原因がまだほかにあつた場合には、いはなくつてもいゝことまでも云つてしまふ譯になる。これはやつぱり何處までも空とぼけてゐる方がよからう。」さう思つて、

「よろしうございます。勘定もしないで立退くといふ事は、當家には、私の名を知つてゐる人達も度々來泊する事でもあり、もし其等の人の耳に入つても甚だ私の不面目ですが、早速座敷をおあけ申しますが、しかし、今日に今日と仰有られては、もうかれこれ夕方ですから……それは今晩すぐにもいつて泊まる處はそこらに幾らもありますけれど、いづれ長く滯在しようといふには、宿の柄その他の點もいろ〳〵考へなければなりませんから、今晩だけは御迷惑でももう一晩厄介になり、明日中には必ず出

てゆくことにしますから、どうぞさう願ひたいのですが。」
といつて、婦人の顔色を見た。婦人もいくらか折れて、
「いえ、そんな他の方にこんなお話などいたしはしまへん。……ほんなら、どうぞ今晩だけは私のとこにお泊りやして、明日中におあけしていたゞくことにいたしますよつて、さういふことにおねがひいたします。」
「それで勘定のことですが、今明日には差上げることは叶ひませんけれど、書付が出來てゐましたら、一寸持つて來て頂きませう。」
「まだ書付も、そのまゝに致しまして一向調べて居りまへんのどすけど、ほんなら後ほどまでによう調べまして持て參じます。」
「どうぞ。」と田原は云つたが、腹の中で「一月の初めからの勘定を今日二月の十日までも書付にしてゐないといふのであれば、これはいよ〳〵宿料のことではない。果して例の不淨のことに相違ないとすれば、實に氣の毒なことをしたものだ。」と思つた。

田原はその翌日、丁度紀元節の日であつた。昨夜からいろ〳〵思案したけれど、金のあまり掛らない處で、氣心の知れた、落着いて居れるところと云つては、そこも以前四五年前に三四年もつゞけて幾月も滯在してゐたことのある四條繩手の方の宿よりほかにいつてみる處はなかつた。そこならば、今居る處よりも便利で、陽氣で、小綺麗で、金もそんなに掛らないのであるが、田原は何故初めから其家へ往かなかつたかといふには、そこへも、以前來てゐた時分の宿料が大分不濟になつてゐるのであつた。そこの家は專ら營業で生計をしてゐる家で、今ゐる家のやうな譯にはいかなかつた。それで、どうしたものであらう、泊めてもらひたいといつて往くには、古い勘定の不濟を持つていかなければ具合がわるいが、今それを持つてゆくことは出來ない。さうかといつて今日中には必ず此處を立ち退かなければならぬ。もう絕體絕命である。まあ何とか往つて當つて見ろと思つて、田原は四條繩手のその宿に訪ねていくと、

「まあ、まあ、田原さんどすか、えらいおめづらしうおす、その後どないおしやしとすか、時々あんたはんのお噂をしてゐました。」

と、笑顏をもつて、京阪風の上品な容貌をした老いお內儀が歡迎してくれた。

「どうも大變な御無沙汰をしてゐました。實は京都にはもう去年の春から來てゐるんですが、あなたの方へも是非顏を出さなければ相濟まないと、始終氣にかゝりながら、どうも閾が高いのでつい〳〵そのまゝにして。……」
「なあんでそれが、あなた。えゝ、さうどした。あんたはんが京都に來とゐやすちうやうなこと、一寸何處かで、私も聞いたやうにも思うてました。まあ、さうどすか。ほて、今お宿は何方どす。」
「えゝ、今は上の方にゐるんですがね、どうも、あちらの方は不便で、陰氣でねえ……。」
「さうどつしやろ。」
「それでねえ、實は、あなたの方へは先年の不義理もあるし、甚だ申しにくいんですが、やつぱし、かう舊い馴染みの處が懷かしいので、暫く又御厄介になりたいと思ふんですが、どんなもんでせう、置いてもらへますか。」
　彼はしまひの方を輕口のやうに云つた。すると始終笑顏のおかみさんは流石に商賣馴れたもので、

「えゝ〳〵、どうぞ。それはそれ、これはこれどすさかい、舊いことは、まああとの事にして、どうぞ。あんたはんの御都合で何時でもお越しやしとくれやす。そんなとちつともお氣にせんかて宜しうおすがな。……わしのとこ又座敷が一つふえましたで、あんたはんまだお知りいしまへんどすやろ。」

「はあ、さうですか。何處へ。」

「そら面白い、えゝとこどす。暖かうて、涼しうて。あとで一遍見とおみやす。」

「さうですか、それは一つ見せてもらひませう。」

なるほどその座敷は疏水の縁に架け出した、元からあつた離室座敷の中二階の下の物置きを模樣を變へて座敷にしたものであつた。

「こゝで宜しうおしたら、あんたはんのお好きな時に何時なりとも來とくれやす。」

田原はそこへ來ることにして、一旦又元の宿に引返した。

四十日ばかりも滯つてゐる宿料の勘定は都合の好い時いつでもいゝから、一日の猶豫もなく出ていつてもらひたいと、宿を斷られた田原は、案ずるよりも產むが安く、

今までの處よりもずつと便利で、陽氣で、第一あんな野暮臭くなく、そして親しみも遙に深い四條繩手を上がつた所の舊い馴染みの宿へ移ることに往く先が定つたので、まづその方は一安心して荷物を取り纏めるために又元の宿に戻つて來たが、勘定は何時でも御隨意でいゝ、一日も居つてもらつては困るから出ていつてくれといふのは、荷めにも客に對してこれほどの侮辱はないので、田原は宿の者に合はす顏がないやうな氣がして、歸つて來ても表の入口から入らず、河原の方から廻つて、そつと裏木戸から座敷に戻り、そこらに散らかした所持の品を片付けた。荷物といつても小さい信玄袋が一つと、あとは古雜誌のやうな物が一包みと、それに例の大きな支那の海鼠(たまこ)の火鉢、身上といへばそれくらゐのものであつた。

彼は遠い廊下の中程まで出ていつて、氣を兼ねたやうに手を打ち鳴らし、宿の婦人を呼んで、

「それではこれから變りますから。どうもいろ〳〵御迷惑を掛けました。勘定も綺麗にしないで立ち退くといふことは、あなたの方に差當り御迷惑であるなしに係らず、私自身として誠に面目次第もないことですが、必ず遠からず差上げますから、どうぞ

それまでの御猶豫を。」
「いゝえ、そんなこと、どうぞ、もう御心配しられまへんようにおしやしておくれやす。えらい私の方の勝手ばかり申して、お氣の毒さんでござります。……ほて、此度は何方へ。」
「繩手の方にやつぱり舊くから知つてゐる處がありまして、そこへ往きます。」
「あゝ、それはよろしうござります。あちらは又ずつと便利でござりますさかい。お手紙のやうな物がまゐりましたら、すぐにそちらへお送り致します。」
「えゝどうぞ。」
「それから、えらい御無禮ですけれど、もう何方にもお眼にかゝらず、表から出るのが本當ですけれど、勝手をして、車屋に此方の木戸の方へ荷物を取りに寄越して、こちらから御免を蒙りますから、どうぞそのおつもりで。」
「えゝ、よろしうござります。こちらの方が便利でござりますよつて。」
田原はそれから車屋を呼んで來て、加茂川の芝生の方から入る裏木戸から火鉢だの信玄袋だの、下駄の包みなどを持ち出して、宿の者には誰にも面を見られぬやうに、

こそ〳〵と出て去つた。
繩手の宿に來てから、穴藏のやうな座敷の小障子を開けると、疊の外はすぐ漫々とした疏水の碧流が澱み流れてゐて、その向うの土手の上を、殆ど眼と水平の處を大阪へ往く電車がしつきりなしに走つてゐた。先斗町の妓樓が加茂川の彼方に續いてゐて、その家並の上のところに愛宕の山が望まれる。山の谷間には、まだ〳〵白い雪が斑白に、になつて殘つてゐるけれど、なんだかだといつてゐる間に、天氣の好く晴れた日にはもう早春のやうな麗かな日が加茂川の河原に漲つた。

鶴岡は、あれから東京の方へいつてやつた金の返事が來るのを待つてゐる間に大阪の方の心當りをもあたつてみる必要があつたりしたので、田原の處へも暫く往かなかつたが、一週間ほど經つていつてみると、田原は宿を變つてゐなかつた。往つた先を訊くと、四條繩手上がつた、これ〳〵の處ださうだと敎へてくれたので、早速そこへ訪ねていつてみると田原は居た。鶴岡は天井の低い妙な形の座敷を見まはしながら、

「うむ、こゝは大變に好い處ぢやないか。先の家よりずつと好い。」

「あゝ、まあさうだなあ。」田原は氣のなささうにいつた。「それに電車の音がうるさくつて。」

「電車何處を通つてゐる。」

「すぐこの疏水の前が京阪電車さ。」

「どれ、疏水？」

といつて、鶴岡は立つて田原の机の前の障子を開けると、なるほど外はすぐ深碧を湛へた水が澱み流れてゐて、一足、その上に造り付けた物干場へ下り立つと、川の向岸には丁度電燈の點りかけた先斗町の家並が艶かしく見渡された。その上の方に、よく晴れた夕暮れの空遠く愛宕が夢のやうに淡蒼く眺められる。鶴岡はすつかり氣に入つたやうに、

「これは素敵な處ぢやないか、こんな君好い處があるのに、何故今まであんな處にゐたんだ。」

田原は、果して先の宿を斷られたのが、鶴岡にうるさい刑事が尾行して來た爲では

なかつたにしても、これから先又この男に始終出入りされると、今度こそは本當に刑事の事から引いて又々宿を斷られるやうなことにならぬとも限らぬ。もしそんなことにでもなつたら、さうなくてさへ、絕望の結果消え入るやうな心地になつてゐる場合、鶴岡の關係から、社會主義とは何の緣もゆかりもない自分までが殆ど住居の安定さへ得られないことになる。あんまり好い顏を見せてはいけないと思つたので、

「なに、此處の家もよく知つてはゐたんだが、やつぱり三四年前の舊債が大分あるんだ。……それより僕は君、先の宿を斷られたんだ。」

「なぜ？」

「どうもその原因が、はつきり分らないんだ。」田原は自分の心あたりを鶴岡にまで包まず話して聞かした。鶴岡はさすがに田原が座敷で用を足した話を聞いても格別呆れも笑ひもしなかつたが、頭振りをふつて、

「そんな糞をしたくらゐで宿を斷る筈はない。やつぱりそれは僕の事が原因だ、それに定つてゐる。」

「さうだらうかねえ。」

「さうさ、刑事のことだ。」

田原は、鶴岡が自身でさう思つてゐるなら、丁度いゝと思つた。それを口實にしてこの先なるべく彼に遠慮をさせようと考へた。

「さうかな、やつぱり刑事のことからか。……そして君はまだ發たないのか。」と、鶴岡の顏を見直した。

「うむ、もう發つ。明日か明後日發つ。」

「さうか、ぢや、これで暫くお別れだなあ。」田原は快くさういつて、穴藏の座敷を廊下の方に上がつていつて手を打ち鳴らした。

「今晩は此處で一つ夕飯を食べよう。」

鶴岡は又ひどく其處が氣に入つて、頻りに、

「こゝは好い、此處にゐると、はじめて、京都に來てゐるといふ感じが本當にしてくる。」と、繰返していひながら、お銚子のお代りを持つて來る女中の柔かい言葉つきや容姿などにじろ〳〵見惚れてゐた。それでもその晩は酒は二本か三本で止めて行儀よく飯にした。

「どうした。今日は恐ろしく早いぢやないか。」
田原が笑ひながら云ふと、
「うむ、なにこれくらゐが丁度いゝんだ。」
飯が濟んでから暫く話してゐたが、そこへ女中が入つて、
「鶴岡さんおいひやす方、あんたはんどすか。」
と訊いた。
鶴岡が振返つて、
「うむ俺だ。」
「あんたはんに一寸會ひたいおいひやすお方はんが店まで來たはります。」
「あゝさうか。」
といつたまゝ、鶴岡は直ぐ立つていつた。
やがて十分間ばかりして彼は何事もない顏をして戻つて來た。
「どうした?」と、田原が訊くと、
「なに、刑事さ。」

「今晩はお別れに、此處がそんなに氣に入つたらこゝへ泊つて往きたまへ。……刑事はさう云つて歸したら可いだらう。」
「うむ、今さう云つて歸らした。」
「さうか、それがいゝ。君が此度京都に歸つて來る時分には氣候も暖かくなるし、僕の方の事もも少し何とかなるだらう。」
田原はやがて來る春を樂しみ待つやうにいつた。
鶴岡はそれに調子を合して、
「きつと、うまく往くよ。もう大丈夫さ。」
田原はそれから女中を呼んで床を取らして鶴岡を泊めて寢たが、先刻鶴岡が一旦店先まで出ていつて戻つて來て、刑事を歸らしたと田原に對つていつたのは、眞赤な噓であつた。
先刻店の間まで刑事に呼ばれて鶴岡が出ていくと、刑事が、
「今晩此處へ泊りますか。」
といつて訊いたので、鶴岡は、何方つかずの返事をして、

「うむ。」と云つておいた。

刑事の方では、先の田原の宿の例があるから、無論その晩も泊つてゆくことゝ定めて、早速そこを管轄してゐる松原警察署へ引揚げて來て其事を部長にまで申告した。先の川端署とは手加減がいくらか違つてゐると思はれて、松原署ではそれを聞くと、すぐ又田原の宿へ人を遣つて、宿泊人の事について一寸話したいことがあるから、主人に今晩の中に警察署まで出頭する樣にといつて召喚した。

それを聽いて縮み上がるやうになつて、たゞ譯もなく驚いたのは、宿の若い主人であつた。その宿といふのは、もと〳〵意氣筋の、芝居者の下廻りとか、多く藝人などを常顧客にしてゐる家で、至極平和な、無事な客筋の者ばかりであつた。そこへもつて來て、今名前主になつてゐる主人といふのは、まだやつと二十五か六の京都より他に大阪にさへ滅多に往つたことのない、女のやうに溫順しい坊ちであつた。

そこの家の先代は、大阪の文樂座で近世の名人といはれた人形つかひで、故の攝津大掾がまだ越路太夫といつてゐた頃番附にも同じ格で紋下に二人の名を並べたほどの人であつた。悴の長男は役者で、近頃東京の公園の芝居に出てゐた。それで宿屋營業

の方は次の庄次郎に讓つて、それが名前人になり、自分で、まだ覺束ないながら、稽古をしい〳〵板場をやつてゐるのであつた。それも初めは役者にするつもりで舞臺にも出してみたが、根からの含羞屋で、どんなに教へられても、極まりが惡くつて大勢に見てゐられる舞臺に出ることが出來なかつた。そんなら、いつそ藝人にすることを止めて、年中人に顏を見られることの少い、薄暗い料理場に置いとくが好からうと、本人もそれが望みだといふので、さうさしてゐるのであつたが、庄坊ン〳〵といつて、女のやうに溫順しくつて、京阪好みの好い男であるところから、そこらの祇園町の舞妓やお茶屋の女衆どもから騷がれるのを、赤い顏をして逃げ隱れ、錢湯に行く時のほかは滅多に家から外へも出ないくらゐにしてゐた。母親が附いてゐて後見をしてゐるのであつたが、それが丁度又二三日前に東京の息子の方に往つて生憎不在であつた。その留守の間を時々見まはりに中京の方へ嫁してゐる姉が來てゐたり、も一人庄坊ンの妹があつて、それが、なか〳〵確りしてゐたが、一寸警察署へ主人に來てくれといはれたので、年寄の居ない若い者ばかりは何事かと吃驚してしまつたが、あとは女ばかりなので爲方なく庄坊ンは、姉にどうでも往つて來いといはれて、はら〳〵し

ながら行つてみると警察では、

「何もお前の方では心配なことは少しもないが、この間からお前の處に泊つてゐる田原といふ者の仲間の者で、鶴岡といふ人間が今晩お前の處に泊るさうだ。あの男には警察の方から刑事を何時も附けてあるのだ。それで今晩も刑事を二人此方から遣るから、どんな處でも構はん、行燈部屋でも物置でも差支へない、お前の方の營業の妨害にならん處に、どうぞ泊めさせてもらひたい。それに煎餅蒲團でもえゝから蒲團と、それから寒い時分だから火鉢に火だけは澤山に入れて置くやうにしてもらひたい。多分の事は出來ぬが、それだけの費用は、警察からお前の方に迷惑を掛けんやうに仕拂ふ、それだけ承知して居つてもらひたい。忙がしいところを呼び附けておほきに御苦勞やつた。……あゝ、それからこの事は田原といふ人間には關係のないことやから、田原には何にもいはんやうにして置いてもらはう。それも念の爲にいつて置くから、そのつもりで。」

さういひ渡されて、庄坊ンは何のことやら一向譯が分らなかつたが、碌に口も利けず、唯へえ〳〵して警察から靑くなつて戻つて來て、姉と妹と三人でいろ〳〵評議を

した。庄坊ンは、泣くやうな聲をして、

「姉さんもう、わたい、こんなことがあるとどだい叶はんさかい、これから東京にデンパウ打つて、お母あんにすぐに一遍歸つて來てもらひまへう。」

ともいつてみたり、それとも、妹の意見では田原さんによう譯を話して、他へ轉宿してもらうたら、どうどすやろなどともいつてみたが、警察で注意して田原には告げるなといつたことを告げてはならぬと庄坊ンの說で、それも打消され、たうとう穩便に默つてゐた。

鶴岡はその翌日十時頃に田原と一緒に朝飯を濟ますと、多分今晩あたり京都を立つて、それから大阪に一寸寄つて、すぐ別府の妹の方へ向つて往くと出ていつたが、その晚七時頃になると又ふらりと田原の處に戻つて來た。田原も、鶴岡といふ人間は元から嫌ひな人間ではないのであるが、自分の目下の事情からいつて――それは金錢上のことでなく――鶴岡に轉げ込まれるのがひどく迷惑であつた。それでも田原にして

は隨分耐へて鶴岡に好意を盡した方なのであつたが、佛の顏も三度の譬のとほり、もうこの上何處までも好い顏をしてゐられなくなつた。

鶴岡が自分の處に戾つて來たやうな顏をして田原の穴倉の座敷に這入つて來たのを見ると、田原は、ひどく不機嫌な顏をして「や！」と一口いつたきり後暫く默つてゐた。すると鶴岡の方でも何となく氣を兼ねたやうにして默つてゐる。田原はやつぱり自分の方から口を切つて、

「君は今朝出て往く時餘程京都を立ちさうにいつてゐたが、まだ立たなかつたのか。」

と冷然とした風をして問うた。

「うむ、もう一寸用事があつて遂々今日の間に合はなかつた。明日は違はず行けるつもりだ。」

「さうか。……なに、それを僕が訊くのは餘計なことだが、實は君に對して、こんな事を云ふのは、僕の本心からいつても、甚だ不本意なことなのだが、君に餘り度々僕の宿に泊り込まれると困るんだ。それは、君の知つてゐる例の件もなかつたり、從つて金錢上の憂もなかつたりする氣樂な場合ならば、――こんな事を口にするのも妙だ

が——君も多分知つてくれてゐるとほり、僕は君のやうな人間は好きなのだから、大いに京都で一緒に遊びたいんだが、目下の場合、此方が泣きたいやうな仕合せなんだから、その邊のことをよく考へて、憐れなる僕にあんまり凭り掛らないやうにしてくれ。僕は、君に、こんなことをいはなければならぬ自分の目下の境遇を思ふと、實に何といつて憤ることも泣くことも出來ないで、一層癪に障つてゐるのだ。」

田原は赤心泣き出しさうな顔をしてさういふのであつた。鶴岡も、田原にさういはれて、氣の毒さうな顔になり、

「うむ、もう一晩だ。明日はきつと立つ。」

「君のことだから、その一晩が當てにならんのだ。」

「いや、明日立たなければ僕自身でも困るんだ。今晩の拂ひは僕がするからいゝだらう。」

「さういはれると僕は一層困るんだ。僕は今無論錢にも困つてゐるが、必ずその事のみで云ふのではない。たゞ、どうか僕を一人で置いてもらひたいんだ。しかし、さういふなら、今日の宿泊料は君の方で辨じてくれたまへ。もう一晩といふのが果して事

實ならば、たつた一晩のことを君にさせたくないけれど、君の一晩は信じられないからな。」田原は泣くやうな顔をして終ひを強ひて笑つていつた。

「うむ、さうする。」

それで、たうとうその晩も亦鶴岡は田原の座敷に寢て往くことになつたが、唯一人田原のみが少しも知らなかつたけれど、穴倉座敷を出た、すぐ廊下の脇の、不斷は客には使はない六疊の座敷に刑事が二人見張りに來て泊り込んでゐたのであつた。

鶴岡はその晩、自分の手張だと思ふと、遠慮なしに德利を五六本平げて快く醉を買つた。

そして翌朝自分で五圓札を二枚出して七圓なにがしの勘定をした。田原は何だか濟まぬ氣でそれを見てゐたが、懷中は向うが豐かだと思ひながら、

「どうも君に出さしてはすまないな。」さういふと、

「うむ、なに、これは僕が拂ふさ。」鶴岡は少しの厭な顔もせずにさういつて、やがて勘定をすますと、

「ぢや、これで暫くお別れだ。」といつて、立ち去つた。

田原はその晩もまた鶴岡がやつて來はせぬかと、大分脅やかされるやうな氣分になつてゐたが、たうとう好い鹽梅に舞ひ戻らなかつた。それから、三四日は、それでもまだ何だか不安であつたが、遂にその事もなくて過ぎた。

それから一週間ばかり經つてであつた。もう二月もそろ〳〵末になり、まだ冬とはいひながらも、瑠璃色に青く晴れ渡つた大空には麗かな日光が遠くの野の末までも漲つてゐた。田原は少し心當りの用事があつて、大阪の北の方の、ある電氣鐵道の會社に業務を執つてゐる、そこの重役を訪問するつもりで、京都から汽車で大阪まで往つて、そこから又電車で會社まで訪ねて往き、名刺を通じて重役室にとほると、そこには思ひ掛けもなく鶴岡が相變らずの風をして來てゐるところに出會した。

「やあ！」

「やあ！」

と兩方でいひ合つた。

「君はもう疾うに立つたのかと思つてゐたら、まだ此方に居つたのか。」

「うむ、もう直き往く。」

そこの重役は評判の多趣味な、殊に文學や演藝に興味の深い、大阪では有爲の實業家であつた。短軀で精悍な容貌をした重役は、
「一寸失敬します。直ぐ濟みますから、どうぞ暫くそちらでお待ちをねがひます。」
といつて、配下の事務員を對手に一時間ばかり業務を執つてゐたが、やがてそれが濟むと、二人のゐる處へやつて來て、
「やあ、大變お待たせしました。」と、田原の方に向つて丁寧に挨拶をした。田原もそれに對して、
「はじめてお眼にかゝります。私が田原で。」と、椅子から起ち上がりながら、腰を折つていふと、
「いや、お名前はもうよく知つてゐました。かねて君のお書きになる物は大いに愛讀してゐるのです。」
それから、少しの間もじつと默つてゐない、いつも潑剌とした重役は、田原に向つて頻りに自分の文學談を仕掛けてゐたが、時々鶴岡の方にも向いて、
「君はちつとも書かないぢやないか、どうしたのだ。」

「僕は書くのが厭だから、もう書かないつもりだ。」鶴岡が打つ切ら棒にさういふと、重役は高い聲で、

「はゝゝゝ」と大きく笑つて、

「そりやいかん。文士は君、書くから文士ぢやないか。その文士が、文章を書かなければ文士といふ名稱を與へられないね。」

「だから、もう文士でないつもりです。」

「はゝゝゝ、そいつはいけない。」と、又笑つた。

心に少しの屈託もなささうな重役は、尚つゞけて獨りで滔々と大いに自分の文學談をしてゐた。才氣煥發といふべきその重役は、實際自分にも創作の才筆を持つてゐて、二三年前に出版した、「曾根崎艶話」といふ短篇集などを讀んでみると、中には決して好事家（ヂレッタント）のお道樂藝といつて侮ることの出來ぬ立派な作品もあつた。田原は、その本を贈呈せられて讀んでゐたので、そんな話などをして重役の當るべからざる氣焰に應酬してゐた。重役は一層好い氣持になつて、かねて一つ試作しようと思つてゐる、ある大きな局面の題材についいて腹案を細かに語つて聞かせたりした。それにも職業的（プロフエッショナル）

の作家の狹い、貧弱な見聞を以てしては到底企及し難い多方面の觀察もあり、深刻なアイロニカルな批評などもあつた。

「なに、鐵道なんぞは誰にだつて出來る。それが僕の樂しみさ。」

といつてゐたが、やがていゝ加減な時分に話を切り上げて、卷紙に書いて持つてゐたものを取出して、田原と鶴岡に示しながら、

「今日はめづらしく貴方がた二人にお目にかゝれたので、何か面白いことをしておつき合ひをしたいと思ふんだが、どういふことにしたら好いでせう。……それで、私の方では差當りこれだけのことは考へられるのですが、どれでも君達お二人で一番これが好いとお思ひになるのを選んで戴きたい。」

といふのは、これからどういふやうにして遊ばうかといふ六つばかりの趣向が書き付けてあつた。今日これから不意に行つたのでは北地でも南陽でも一流の美人をすぐ見るといふ譯にはいかない。それには今日電話で約束を付けておいて、今晩はこれからその電車沿線の田園都市にある重役の自宅に歸つて一泊し、明日改めて何處かへ出直すことにするか、それともそんな處へ往くのは止めて今晩自宅へ泊つて、翌日一日何

か面白い趣向でそのまゝ重役の家で遊ぶか、或は明日を待つとか、自宅へ往つて泊るとかいふやうなことが面倒で氣が進まぬならば、これから直ぐ北の新地へ往つて何處かで夕飯を食べながら有りあはせの藝者を見て滿足するか、しかし、それをするには一流の美人を見ることは不可能であるといふことを御承知置きねがひたい。重役は明晰なる言葉でそんなことを詳しく說明して、

「さあ、どれにするかね。‥‥どれでも君達の最もお好みのところをどうぞ遠慮なくいつて下さい。」

田原はのんきに明日まで待つて、大阪の美人をぜひ見なければならぬこともなかつたし、さうかといつて重役の私宅に往くのも何となく氣づまりのやうな氣がするので――尤もその重役は私宅に遠來の客を歡待することが彼の一つの好いお道樂でもあつたが――鶴岡の方を振返つて、

「どうだ。折角いつて下さるのだから、何處かへ連れていつていたゞくとして、君はどれにする?」

「うむ、僕は何處だつて構ばない。」

「さうか、ぢや早い方がいゝから、これからすぐ北の新地へ連れていつてもらふか。何も一流の美人を見たところで爲方もないから。」
「うむ、それでいゝ。」と鶴岡もいふ。
重役は聞いてゐて、
「さうか、それぢやそれにしよう。」
といつて、それから三人は連れ立つて、又そこから直ぐ電車に乘り大阪へ出て來た。

梅田の終點から歩いて市中の雜沓を通り拔け、田原と鶴岡とは北の新地の、とある貸席に案內せられた。型のとほり一通り茶や火鉢が運ばれてから、賢さうなまだ三十六七の、派手な大島飛白の前掛などしめたおかみが重役の處へ挨拶に出て來た。
「おめづらしうございますねえ。」と、大阪の者とは思へぬやうな口をきいてゐた。
「うむ、隨分暫くだつた。あんたは大變身體が惡かつたと聞いてゐたが、もう良くなつたか。」
「有難うございます、一時はもうどうなるか思うてましたけれど、もう大丈夫です。」

「さうだつたさうだな。とにかくそれは大變だつた。でもまあそんなに早く快くなつて結構です。」

重役とおかみとの、そんな對話を、二人は暫くの間聽かされてゐた。

重役はやがて話頭を轉じて、

「今日は遠方からめづらしいお客があつてねえ、大阪の美人をお眼に掛けたいと思ふんだが、どうだらう、俄の事だから好いところは駄目だらう。」

「さうですねえ、大抵もうみんな前日からのお約束がありますから、あとで一遍訊かしてみませう。」

やがておかみが降りて去つてから、後は又重役が殆ど一人で饒舌つて、頻りに文學談をやつてゐた。

「どうだね、君さう思はないか。そりや戀愛談もいゝさ、藝者の話も結構さ。しかしながら今の諸君のお書きになる物を見てると、あまり局面が狹くはなからうかと思ふんだ。もつと、廣い社會には多方面の生活がある筈なんだ。然るにだ、文學者諸君の書かれる題材は常に限りがある。いつ見てゐても文學者諸君自身の生活しか書けてゐ

ない。あれでは、文學者以外の人間には何等の共通の興味を持つことが出來ない。…
…それ……よく諸君の謂ふ……その、共鳴を起さしめないのだ。」
田原は大いに吾が意を得たやうに屢々肯いて、
「さうですよ、まつたくさうなんですよ。ですから貴方の先刻のお話の材料を早く一つ小說にお書きになつてみたらどうです。必ず傑作が出來ますよ。」
田原はお世辭でなくさういふと、重役はすぐ引取つて、人には餘計口を利かせず、
「なに僕の話は又別問題だがね。そりや僕は傑作が出來ると自から信じてはゐるが、要するに僕がどんな傑作を書いたところで實業家のお道樂に過ぎないんだ。それより文學者諸君に大いに奮發してもらはなければいけないんだ。……ねえ君、さうぢやないか、今の文學はあまりに文學者諸君だけの興味に限られてゐるよ。」
重役は滔々として止まるところを知らなかつた。
そこへ段々酒肴が運ばれ、つゞいて一人二人後からあとから藝妓が入つて來た。見ると、なるほど東京の神樂坂あたりでも一流所を大分下がつたやうな美人連であつたが、田原にも鶴岡にも今の場合そんなことはどうでもよかつた。銘々に酒盃が配置さ

れたけれども、重役は「僕はやらないんだ。」といつて、手にも取らなかつた。田原もやらないので、鶴岡が一人で盛んに滿を引いてゐた。

鶴岡が、さういふ席であるにも係らず、少しの外見氣も色氣もなく、敢て悪遠慮といふことをせず、一人で盛んに酒盃を乾してゐるのを見て重役は、

「君よく飲むねえ。」と感心したやうにいつてゐたが、鶴岡は、藝者の差す酒を猪口に波々と受けながら、

「えゝ。」といつたきり、默つて暫くの間は大勢の酒盃を一手に引受けてゐた。

重役は又感心したやうに重ねて、

「君よく飲るねえ。」

「よく飲るです。」鶴岡はだん〳〵赤く熟れて來た鼻の汗を拭きながら、落着き拂つたものである。

酒を飲むといふよりも、むしろ酒に飲まれてゐるといつた方が當つてゐる。時間も何もスポイルしてゐるかのやうな姿態を、不安な眼をしてつく〴〵と見守つてゐたが、今まで、田原や鶴岡のことは、そつち除けにして、藝者やおかみとばかり雜談を

交はしてゐた重役は、全心の興味と配慮を鶴岡の上にとられたやうになつて、脇息を前にして、その上に兩肱を突いて彼の方に向き直り、
「君はそれで、去年から京阪に居つて一體何をしてゐたんだ。」高飛車に訊ねた。
鶴岡も流石に大分口ごもりながら、
「うむゝゝ、始めは東京の雜誌の寄稿を京都大學の教授に依頼する用事でやつて來たのです。」
「その用事はもう濟んだんだらう。」
「えゝ、それはもう去年の十一月に濟んだんです。」
すると、重役は大きな聲で笑つて、
「はゝゝゝ、去年の十一月に濟んだんなら、もう東京へ歸つていゝぢやないか。」
「えゝ、もう歸らうと思つてゐるんです。」といひながら、彼はやつぱり酒盃を差出して、默つて、藝者に酌をせよといつた。
「はゝゝゝ、もう歸らうと思つてゐるどころぢやない。用事が濟んだらもう君歸らなくつてはいけないぢやないか。」

そこで田原が口を挿んだ。
「いや、此方に來て何もせず、ぶら〳〵してゐるのは私も御同樣ですがね。」
すると重役は、鶴岡とは田原を等し並に見て居らず、
「いや、君は違ふ。貴方はもう大家で、何處に居つたつていゝが。……君はさうして遊んでゐては困るぢやないか。早く東京に歸りたまへ。君文士が何も書かずにさうして遊んでゐては困るぢやないか。早く東京に歸りたまへ。今日でも明日でもいゝから、早く歸りたまへ。歸りたまへ、かへりたまへ、うん?……その方がいゝよ。」
重役は言葉を盡して督促するやうにいふのであつた。
田原も亦口を入れて、
「僕もかうして、去年の春から京都にゐて、ぶら〳〵してゐるのは御同樣だから、あんまり僕の口から云へないが、實際今いはれるとほり、君も早く歸つた方がいゝんだよ。」
鶴岡はもう瑞々と眞赤になつた顏をして、
「うむ。」とばかり云つてゐたが、顏を上げて重役の方を見ながら、

「しかし、今東京に歸つてもすぐ又遣つて來なければならんのです。」
「それはどうして？」
「妹が別府の溫泉にいつてゐるので、三月の末になつたら、それを連れに行かなければならないんです。それで今どうしようかと思つてゐるところです。これから東京に歸つて又出直して來るのも大變だし、いつそこれから直ぐ別府に往かうかとも思つてゐるんです。」
「ぢや別府に往つたらどうだ。僕が金を出してやる。金は無いんだらう。」
「えゝ、金は無いですが、別府にいつてもいゝです。」鶴岡は酒盃をふくみながらいふ
「はゝゝゝ、君のいふことは、何方が本當だか少しも分らない。東京へ歸れといへば、うむ歸つてもいゝといふし、別府へ行けといへば、うむ往つてもいゝといふし。一體君はどちらにする氣なんだ？」
「なに、僕はどつちでもいゝんです。」
「はゝゝゝ、そいつはいけない。」重役がさういつて大きな聲で笑ふと、それに連れてそこに並みゐるおかみや藝者達も鶴岡の方を見て、一緒にどつと噴き出した。

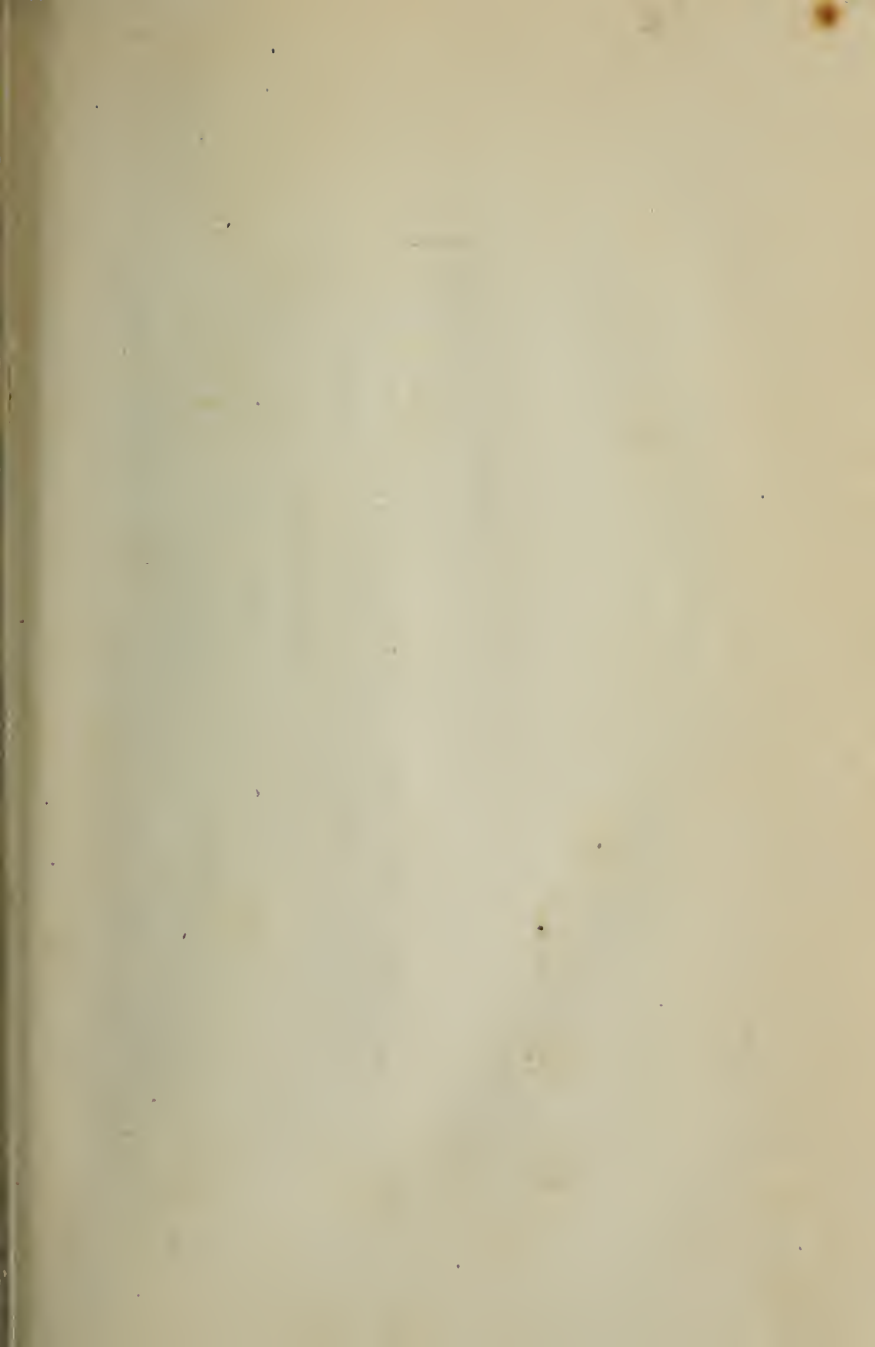
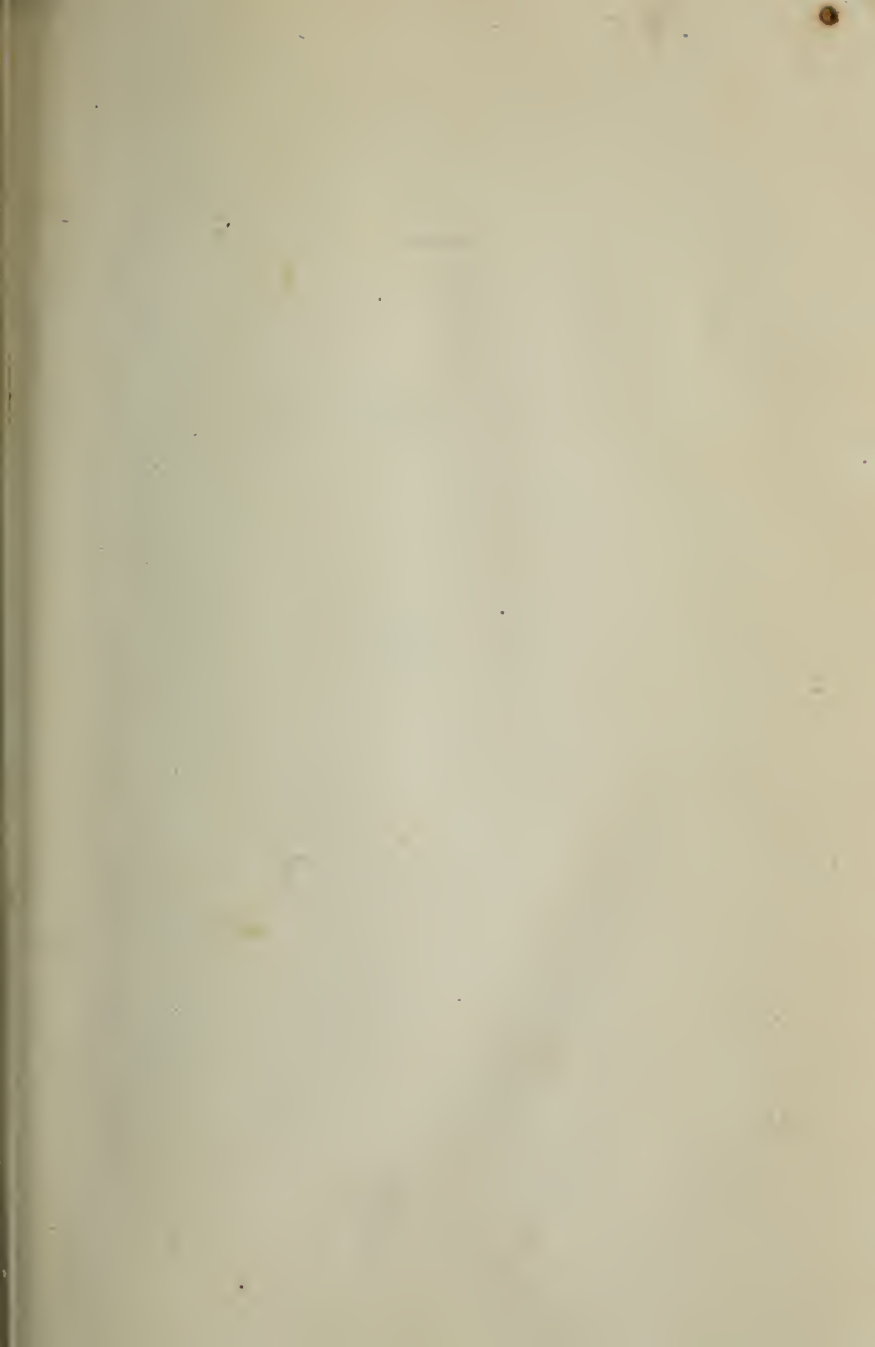
田原は一人笑ひもせず眞面目に鶴岡の方を見て、
「君はこの間からもう、別府に行くといつてゐたのだから、別府にいつたらいゝぢやないか、金を出してもらつて。」
「うむ、さうしてもいゝ。」
重役は見兼ねて、
「さうしてもいゝぢや困るなあ。君本當に別府に往くか。君が本當に往くなら今金を出してやるが、どうだ。」
「えゝ本當に往きます。」
「さうか、往くんなら、これから發ちたまへ。」といひつゝ、重役はポケットから時計を出して見て、
「下關ゆきの急行は何時だつたかなあ？」
「八時三十五分です。」向うにゐたおかみが云ふと、
「それなら丁度いゝ、今七時四十分だ。これから飯を食つてすぐ發つといゝ。」
「ほんなら御飯を上りますか。」とおかみが訊く。

「うむ、田原君は酒はいけないやうだから、僕も丁度いゝ。御飯にしてもらはう。」

それから御飯が來ると、重役は鶴岡を急がして、

「こちらは後でいゝから、あちらを早くして上げ。」と女中に指圖した。

飯が濟むと、重役は鶴岡を別室に誘うて、ついでに階段の下まで送つていつたやうであつたが、暫くして座敷に戻つて來て、笑ひながら、

「二十圓やつたら、もう十圓くれといつたが、遣らなかつた。汽車賃だけあればいい。餘計に持たすと、あの先生のことだから又途中でぐれるといけないと思つて。……爲樣のない奴だ。はゝゝゝ。」

靑草

大阪の春は瞬く間に押寄せて瞬く間に行つてしまつた。
東京の櫻花（はな）のやうに横繁吹（よこしぶき）に降る春雨に無殘な散り際も見せず、廣い住吉公園の老松の樹蔭を彩取つた櫻花（はな）も、しばらくは精あるものゝ如く靜かに咲き誇つてゐたが、それも七日と壽命を保たないで夕暮の風にほろ／＼散つて、洗つたやうな砂地の松の落葉の上に白く雪を敷いてゐた。

淺海は宿樓（やどや）の欄干に凭れながら風もないのに庭園の櫻花（はな）の散つて行くのを凝乎と眺めてゐた。せめて今しばしの春を惜む者にはまだ八重のあるといふことが、どんなに遣る瀨のない心に頼母しい感じを懷かしめるであらう。散り際の潔くないその八重も大方盛りを過ぎたけれど蜜蜂は殘る限りの花の精を吸はうとてか壯（さかん）な唸り聲を立てつつ花心に姿を隱してはまたほかの花にと移つていつた。蜜蜂の體が花を搖るたびに淺海の鼻に花の匂が漂うて來るかと思はれた。靑く澱んだ池の緣には山吹が黃色く水に影を翳して、蛙が時々音を立てゝ池の中へ飛んだ。名も知れぬ其處らの草木が見てゐ

る間にも鮮やかな色に芽を吹くかと思はれた。
紅の芽を付けた庭園の扇骨木垣の外を退紅色の日傘を翳した阿娜めいた年增が向うの鹽湯に入つて行つた。
淺海の宿樓の大廣間の欄間には、明治十七年に書いた鹽湯の效能を說いた大きな額が掲げてあつた。その時向うの鹽湯も此處の家も同時に新築せられて、初めに一軒の家で營業してゐたのが、汽車が出來たり、電車が通じたりして大濱や濱寺が賑やかになるに連れて此處は何代かの持主に讓り代られて、今では湯屋と料理屋とが別々になつたらしい。
淺海は今、紺の暖簾を潜つて入つたその年增を何處かで見た女のやうに思つて考へてゐた。するとそれは直ぐこの先の郵便切手を賣つてゐる家の主婦であつたことを思ひ起した。誰かゞ、あれは大阪の、方々に支店を持つてゐる牛屋の妾だと敎へたことを思ひ出した。
湯屋の大きな二階の欄によくけばけばしい色彩や、大柄の衣類が掛け擴げてあつた。障子の中で一日大きな話聲がしたり、廊下へ大きな丸髷の鬘を着けた女形や陸軍

將校の軍服を着けた男が出て立つたりしてゐるかと思ふと、やがて家扶らしい扮裝をした羽織袴の男や印半纏を引掛けた職人などゝ一緒に其家を出てぞろ／＼高燈籠の石段の處に行つて芝居染みた眞似をした。それを向うの方から寫眞を撮つてゐた。

淺海もそれに誘はれたやうに二階を下りて散步に出て行つた。自分の宿樓の外は何れも出來てまだ幾年にもならぬやうな別莊風の家などが多かつた。其處を本宅に、主人は每日便利な電車に乘つて大阪に通ふらしい家族もあつた。大きな鼠壁の土藏の建つた屋敷もあつた。

五六十年前までは此處等あたりまで海であつたらしい。淺い小溝を一つ越すと、其處からは公園の地內になつてゐて、その中に建つてゐる家はいづれも洒落た貸席や料理茶屋風な家ばつかりであつた。淺海はその溝に沿うて步いた。溝の緣には足の踏み場もないまでに盛に靑草が萌えてゐた。その小徑について行くと自然に公園の外を流れてゐる小川の岸に出た。花道を滑つてゆく「野崎」のお染の乘つたくらゐの大きさの、田舟が土を積んで後から／＼緩い水の上を滑つて、遠く濶けた野の方へと下つて行く。果しもない廣い麥畑も、向うの方の大きな堤も水彩畫の繪具で唯一色に塗つ

たやうな鮮かな青い色が眼に滿ちた。それでも處々にまだ黄色いのや白いのや菜の花が咲き殘つてゐた。その中に小く見えても大きさうな赤い煉瓦の工場の煙突が靜かに麗かな空に煙を吐いてゐる。

淺海はさういふ物に眼を樂しませながら、敷島を口に啣へたまゝ小川の岸に沿うて稍〻しばらく歩いてゐたが、危つかしい朽木の橋のあつたのを幸に公園の地内に入つた。其處にはまだ淺海の一度も足を踏み入れたことのない庭園の擴がりがあつた。東京の堀切の菖蒲畑よりもまだ古い池の水の中に青い杜若が盛に莖を伸ばしてゐる。處處にもう白いのや赤いのや、蕾の綻びかけて躑躅の繁つたその池の緣に沿うて行くと池は曲つても〱まだ擴がつてゐた。その大きな躑躅の繁みに隱れて、其處にも此處にも世を忍んだやうに瀟洒とした茶席がゝつた家が靜かに建つてゐた。太い藤の葛が柱のやうに二本突立つて、軒先に廣い棚を造つたその一軒のお茶屋の廻緣に行つて淺海は腰を下した。雅邦の繪に見るやうな白と薄紫の藤の花が長いのは地から二三尺の處までも垂れてゐた。

淺海は柱に背を凭せながら、小女の酌んで出した茶をすゝつてしばらく足を休めて

ゐると、何となく疲れたやうな心持がして來た。春は、今強い自然の力をもつて行くのが眼に見える。彼は默然として自分を思つた。

二

「あゝ、遊女に精神を奪はれてゐる間にとう〳〵折角の畿内の春をもしみ〴〵見ずに過してしまつた。」

嵐山や吉野の花信は早くから紅い繪びらになつて電車線路の驛々や大阪の街の辻々などに揭げられて、淺海の情を急き立てしたのであつたが、彼には今の場合、淡い無情の花よりもどうしても矢張り人間の方が好かつた。さうして嵐山や吉野に花を探ねるよりも、人も老いては共に再び戯れることの難い有情の春を趁ふに心急がれた。

彼は手にするほどの金は何時も氣に染んだ遊女の處に持つて行つて、僅かに最後の電車賃を殘すまでに使ひ果してしまはねば歸つて來なかつた。勿論彼はそれを決して悔いなかつた。悔ゆるどころではない、愛する遊女に存分の錢を蕩盡し得ぬことのみを唯り悲しんでゐた。

時としては、から自分のやうに愛人を思ひつめては苦しくつて遣り場がないと、思ひ返して見ることもないではなかつたが、さればといつて自分の今の生活から想つてゐる遊女を取り去つて了へばその後には只空洞な形骸が殘るに過ぎないのが眼に見えてゐる。

人は、紅葉山人の小説が肉體に基礎を置かない泡沫の人情を徒らに寫してゐるに過ぎない、生理學的心理學と步調を揃へてゐる近代の深い生命の泉から迸り出た藝術に比べて、大きな自然を背景にした永遠の運命といふやうなものを仄めかしてゐないといつて非難をするが、可矣、それは首肯するとしてそれなら現在の日本の小說家に一人の能く「金色夜叉」の間貫一や「多情多恨」の鷲見柳之助などの如く、切ない悲戀に身を慨き人を怨んでゐる人間を描き示した作家があるかと思つて淺海は前後を回想して見たが、せめて一人も紅葉山人くらゐな眞率な熱情を籠めて作品を公にしてゐるものは無かつた。淺海は獨り斷乎としてさう思つた。單にそればかりではない、近頃藝術の自然を說く者の作に、柳之助が理由もなく唯嫌つた友人の妻お種を只管懷しがるに到る、如何にも自然な前後の情景を宛がらに描いてゐるものも無かつた。

彼も常に筆を執つて机に倚つてゐる人間ではあつたが、無論自分にもさういふ物はまだ書けなかつた。けれども彼の心持だけでは紅葉の書いた人物の悲しい境涯だけは能く解するのであつた。さうして誰よりも自分は最もそれを能く解してゐるとさへ信じてゐた。

小說の中に議論を挾むことは、この作者も極力排斥する方であるが、一つは、この作者にまだ渾成した創作を以て凡ての讀者を首肯せしむるに足るほどの作が無いのと、一つは、多少それを表現してゐてもさういふ情緖と理解とを天性有ち得ない讀者がそれを理解することが出來ないのを殘念に思つて語るのであるが、「金色夜叉」「多情多恨」を通して見ても、故人の作者が人生の姿をも本質をも大半戀と愛との繫縛と觀じてゐたのが略ぼ察せられる。宮に背かれた貫一の悲憤の恨みと愛妻お類に死なれた柳之助の愚痴の恨みも、形こそ違へ皆なその奧底の戀と愛とその變形とを以て、人間の生命として人生の姿としてゐる點は同じであつた。さうしてこの人情と道理とは、眞個に能くモンナ・ヴンナを讀み得る者、「僧房の夢」を讀み得る者、アンナ・カレニナを讀み得る者、マダム・ボヴリイを讀み得る者、はた近松西鶴を讀み得る者

にはこの作者の今更らしい冗説を待たないで夙に解つてゐる筈なのである。唯泡沫の人情とや、その泡沫がやがてこの世の姿ではないか。少くとも貫一と柳之助との感情の眞率なる點に於て、紅葉は決して通俗作家ではなかつた。讀者の多いといふことは通俗作家といふ反證にはならない。

暗黒な未來の暗を辿りながら相擁して情死を遂げる者の心理には白熱した相愛の信仰があるからである。彼等の抱擁した瞬間には何物をも恐れず、何物をも放棄して意に介しない強い安心があるのだらう。心なき人よ、それを迷妄と斷ずる勿れ、凡ての物象、及び物象と物象との關係も亦迷妄ではないか。

三

淺海はこの間中、江口と共に遊び明した夜々の面白さに引換へて、持つ物を持たないでは逢ふことの叶はぬ昨日今日の悲しさ寂しさに、遣る瀨なく、過ぎ去つたことを思ひ佗びてゐた。

一體自分は、何時から遊女は江口でなければならなかつたであらう。……それは二

月の十九日に一緒に文樂座を觀に行つた時からであつた。

尤もその時からばかりではない。――彼がかうして大阪の土地に豫期したよりも永く滯留することになつたには種々な原因があつた。彼は今獨身である。五年前に七年の間同棲した妻に死別れたのだ。その妻は淺海に取つては實に第二の生命ともいふべき戀女房であつた。その妻に亡くなられた彼の歎き悲しみは傍の見る眼にも無殘でもあり、また可笑しいくらゐでもあつた。さうして五年の永い間、彼は亡くなつた愛妻のことを思ひ惱んで、佗しい月日を經て來た。小說に書けば、「多情多恨」の中の柳之助には、葉山誠哉のやうな深切と興味とに富んだ友達もあるのだが、――また文學者以外の、もつと廣い世間には穩かな常識に富んだ人間もあるのだが、生憎淺海には其樣な友達は一人もなかつた。偶〻古くから知つてゐる人間にはさういふ性情とは最も相違した人間が多かつた。彼は人と人との交友などといふ事に就いて表面は兎に角、內心信用をも依賴をも置いてゐなかつた。

五年前その妻の遺骨を故鄕の土に葬つて以來絕えて墓參もしなかつたので、彼には最早現世で唯一つの懸換のない親しい大切な者になつてゐる老母をも久し振りに見舞

つたし、一つは險しい文學者仲間の、うるさい蔭言の世界から遠退きたかつた爲に歸省を兼ねて京阪に漫遊を志したのであつた。京阪は淺海の郷里とは餘り距つてないのみならず東京と往復の途中になつてゐたが、二十年來屢ゝその間を往復しながら毎時京阪を素通りばかりしてゐたのであつた。

彼は、その五年の間獨りで欝屈してゐた心の寂しみを自から傷はらんとて旅行に出たのであるが、それには畿內の土地々々を見歩いて、かねて自分の私淑する日本の二大文豪の作中に大きな背景となつて表はれてゐる都會や田舍の風土人情の變遷を觀察したり、もし心の餘裕が許すならば、奈良あたりの寺院に隱れて、頽廢した古い時代の建築繪畫等を研究していくらか古典的な氣分を養うて、永い間に段々酷く破壞されてゐる感情を整へよう、さうしてその古い整つた建築美術などが與へる安らかな感覺の世界に中世紀の僧侶などが努めて試みたやうな隱退した生活がして見たかつたのだ。

けれどもさういふ禁慾的な生活は凡俗の身には、どうしても年齡といふ自然の力を待たなければ行ひ難いのであつた。淺海の肉體にはまだ〳〵若い血が流れてゐた。一夕ふと知り合つた遊女は最初から五年の間寸刻の間も絕えず彼の心の奧の何處かに姿

を留めてゐる亡くなつた妻の亡き影を斥けて、その後に強い鮮かな形を印してしまつた。彼はそれを殆ど自分にも不思議に思つて考へて見たが、永い間萎びてゐた自分の心が、刻々に希望のある歡びに潤うて來るのが、丁度穩かな春の夕暮れに波打際に立つてゐて、夕汐の次第に高まつて來る時のやうに感じられた。

「あゝ、自分にはまだ戀の出來る力が殘つてゐた。」

と、淺海は一人で後めたくさう思つたのであつた。幸に旅の空でのことであるし、人には包んで彼はそれを獨りの心の奧深く樂しく祕めてゐた。

四

その間には喧嘩をしてお茶屋の主婦が仲に入つて取りなしたこともあつた。

その仲直りの晩であつた。しん〳〵と更ける寒い冬の夜、平常は客を通さぬ奧の間の主婦の部屋に二臺の燭臺を燈して、男は淺海が一人、仲居などゝ火鉢の傍に寄り集うて濕かに酒を酌み交したこともあつた。

「もう喧嘩するんぢやありませんよ。」

主婦はわざと二人を叱るやうに東京口調で言つた。江口も東國育ちである。
「旦那はん。あなた方ぁんまり仲が好すぎるからやおまへんかいな。」仲居は酒をつぎながらいつた。
「ナニ、仲が好すぎる處かそんなことをいふとこの遊女が厭がるよ。私なんぞとは違つた好い人がちやんとついてゐるんやもん。」淺海は言葉尻を大阪言葉でいつた。
「あなたが自家の大事な／＼娘を啣へて餘處に行つた罰が當つたのや。自家やつたらもうこれからあなたに默つて挨拶に遣りやしめへん。さういふやうな時にはまたさういうてやることにします。」主婦は締めくゝるやうにいつた。
「お母ちやん、あの晩遂々この人何といつても寢ないの。」江口は子供のやうな鼻の詰つた聲でいつた。
「へえ？」主婦は呆れた眼で淺海の顔を見た。
大阪や京都の女は皮肉の味を解しないほど生な點があつた。
「お母ちやん、そりや皮肉よ、私呆れましたの。」
「なに、皮肉なわけでもないがね、一月に文樂座で南部太夫の夕霧を聽いて、炬燵の

場の人形が面白かつたから、私も一つ伊左衛門の眞似をして、この夕霧にすねて見たのよ。」

「はゝゝア。まあよかつた！」

主婦と仲居は聲を揃へて手を打つた。

「夕霧様、さあ一つお酌。」笑ひ止めると隙さず仲居は德利を取り上げた。

「伊左衛門様、さあ一つお酌。」

も一人の仲居も後れず德利を取り上げた。

「喧嘩した後は、一層好くなるといふのは眞實ねえ。」

二人だけになつた時江口は淺海の肩に手を卷きながらいつた。

五

籠の鳥なる江口とは喧嘩をするにも資本がかゝつた。

「此度何日來て？」

二階の關所で膝詰めの談判をせられて、
「若旦那、もうおかへり。……この次ぎ。何日。」
またもや階下の火鉢の關所でもう確定した事でも訊くやうな主婦の力籠つた言葉を
「必ず近日々々。」
と、芝居ぜりふで輕く受け流して歸つてから、心は矢竹に逸りながらも漸く二十日も過ぎてから淺海は行くことが出來た。
「もし若旦那、若旦那の近日は二十日だすかいな。えらう遠い近日がおまんな。」
主婦も仲居もとん／＼二階の淺海の傍に寄つて來て、聲を揃へての總攻擊に淺海は防ぎかねてゐる處へ江口も小走りに上つて來て、
「隨分長いわねえ、ねえお母ちやん？」
ひたと淺海に寄り添うてぺたりと坐つた。
「もう解つたよ。……だから今日はそのお詑びに文樂に行くよ。」
仲居の附いて行きたがるを、主婦が忙しいからとて遣らないのを、二人は結句仕合せと、囁き合ひつゝ、車の來るのを待ちかねて文樂座へと急がせた。

その時の狂言は前が義經千本櫻で、中に中將姫を挾んだ。
淺海は湯屋に行つて毎時明いてさへゐれば同じ棚に衣類を入れるやうな心持で、毎時買ひつけた南側の棧敷に通つた。彼はその高い處から下に並んでゐる大阪の婦女をば、毎時旅人の珍らしい心持で見るのであつた。その日は江口と膝を竝べて坐つてそこで食べるのを樂しみにして來た辨當を早速馴染の出方に命じた。小蔭で欲しくない物を取換へながら、小い辨當箱に入つた鮮麗な鯛のおつくりなどを食べつゝ、越路太夫の鮓屋を聽いた。
惟盛卿の彌助の人形は綺麗で、青い萠黄がゝつた着物に、紅い襦袢の襟を覗かしたお里は可愛かつた。
「あれ御覽なさい。可愛いお里？」江口は可愛い顏をして笑つた。
「…私は、お里と申して、此家の娘徒者、悄い奴と思召されん申分過つる春の頃、色珍らしい草中へ、繪に在る樣な殿御が御出、惟盛樣とは露知らず、女の淺い心から可愛らしい、いとほしいと思ひ初めたが戀の元、…縱令焦思れて死ぬればとて雲井に近い御方へ、鮨屋の娘が惚れられうか。…」

「あれ、お里が燒き餠を燒いてゐるのよ、可愛いお里が。はゝゝゝ。」

江口は興がつた。

淺海は唯、遊女をつれて文樂座の棧敷に來て、快い太夫の聲音や美しい情緒を奏でる太い三味線の音をわけもなく耳にしてゐればよかつた。さうして思ふまゝに、弛んだ心を音樂の音に連れて散亂せしめた。强ひて舞臺を見ようとも思はぬ。强ひて淨瑠璃の筋を辿らうと努めもせぬ。見るから昔を忍ばしめるやうな古く黴びた、天井の低い小さい芝居小屋の中に響いてゐる音樂は夢のやうな懷かしい心を唆つた。

幸ひ其處等に客がゐなかつたので、淺海は横さまに少し行儀を崩しながら、江口はと見ると、遊女は自分とは相違して殊勝にも熱心に舞臺の方を見入つてゐる。その横顏を盜み見てゐると、江口の小高い鼻筋の中程の處が線では描けないくらゐ心持ち高くなつてゐる。それは何代かの美しい男女の遺傳を證する顏に屢々見ることの出來る鼻であつた。その下にはさも柔かさうな脣が蕾のやうに結ばれてゐた。

「この女は夜の燈の下で美しいばかりぢやない、晝間見ても好い。」

淺海はさう思ひながら倘ほ見廻してゐると、多い髱が割れたやうになつて分れてゐ

る下から頭の後の方に白い禿げが見えるやうに思へた「おやッ」と思ひながらよく眼を留めて見ると、禿げ處かそれは白い頸筋であつた。頸筋が頭と思ひ誤られるくらゐ多い髱が拔き衣紋に着た襟の上に被ひかぶさつてゐたのであつた。

淺海はさういふ物を見てます〳〵心に美しい滿足を覺えた。

舞臺の上で狂言は進んで行つた。淺海は「中將姫」を好まなかつた。江口はそれをも飽かず見入つてゐた。

「あれは、浮船が惡いんだわ……だけど本當に惡いんぢやないのよ」

さうして降り積る雪の上に割れ竹を以て岩根御前の爲に絕え入るまでに打ち据ゑられてゐる中將姬を、興奮したやうな顏をして凝乎と見詰めた江口の眼に露が宿つた。淺海は殘酷な狂言を見てゐるよりもそれを見て女らしい同情をしてゐる自分の遊女を見てゐる方がよかつた。

「おい、蜜柑をくれ。」

江口は默つたまゝ薄皮まで綺麗に取つては一袋づゝ淺海の手に渡した。さうして時時自分も口の中に入れた。そんなことをしながらも矢張り舞臺に氣を取られてゐた。

やがてその殘酷な一場が終る。最後は南部太夫や源太夫が五人、それに三味線が六挺のつれ彈きで吉野山の靜別れの一幕が開いた。舞臺は一面爛漫たる櫻花の吉野山、遠見には青草の萠えたつ山をあらはし、東京や大阪の役者でも行ることとの出來ぬ可愛い美しい人形の靜が額一面眩いばかりの花簪を挿し、兩頰に長く黑い頭髮を切り下げて、賢さうな黑い瞳で舞臺の中程にゐる。そこにはこれも眼の覺めるやうな緋緘に金色燦然たる黃金の胴の鎧を着た忠信が從いてゐて、靜は金扇を翳しながら、忠信とからんでいろ〳〵な心持を表した身振りがある。調子の張つた三味線と、五人の太夫の合奏とで小い文樂座が暫く鳴り動搖めいた。美しい引脫ぎが脫いでも〳〵あつた。

二人は夢のやうな美しさと微妙な音樂の音とに一と仕切り耳と目を奪はれてゐた。

「もう歸らうか。」

「歸りませうか。」

「歸らう。」

出方が持つて來て置いた新聞包みの中から、銘々に履物を取つて外に出ると、二人はほつとなつた。

「静は好かつたわね。……早く歸りませう。」これから先を樂んでゐるやうに、遊女は淺海に身を寄り添ひながらいつた。

六

その夜、春になつたら一緒に東京に行く話が二人の間に初めて持上つた。

「私、半分持つわ。」

その言葉が何様なに淺海の心を動かしたらう。

さうして春々といつてゐる間に、その春は思つたよりも急に來た。三月になつてから淺海は、もう江口を自分の獨占にしたいといふまでに思ひ募つて來た。この邊で奈良の水取りまでといひ習はしてゐるその三月の中旬を過ぎると、遠く南の空を劃つた葛城山金剛山から和泉の方の山々も今までの險しい黒い色とは見違へるやう濕味をもつた淡い春靄を罩めて來た。大阪の郊外を南に走る電車の窓からは廣い麥の野が眼の醒めるほど青い色に變つてゐた。微溫湯のやうな春雨が、しと〳〵とその野や野の單色を亂した森を濡らしてゐた。

さうして四月に入ると、どうかするともう物憂いやうな強い日が照つた。難波から心齋橋筋にゆく賑やかな通りの軒頭に花傘を翳した紅提燈がずらりと掲げられた。不斷でさへ明るい難波新地の入口と出口の頭の上に高く紅い花行燈が點されて、大勢の人間はその下をぞろ〳〵往來した。葦邊踊や浪花踊が始まつた。

淺海は江口を連れてさういふ處を歩き廻つた。ついこの間まで炬燵を入れて寢てゐたのに、二人は蒸々して堪へられぬやうな夜を明かした。

「また汗を掻きませう。」

江口は、淺海の心持を段々深く知つて來た。淺海は、江口でなければ夜も日も明けないやうになつた。

靑草を蒸すやうな強い日が照つた。感情の疲れた淺海は、焦々する心地で思ひに任せぬ日を消してゐた。

七

淺海は默つて暫く休んでゐた腰を漸く緣側から持上げて、宿樓の方に歩みを運んだ。

歸るとすぐ晝飯になつた。筍と莢豌豆と鯛の甘煮、鯛の汁に澤山な蓴菜、これだけは毎日のやうに變化がなかつた。それが單調な強い、物憂い春の日のやうに淺海の食慾を鈍らすのであつた。

すると午後になつて電話が掛つて來た。その主は思ひ掛けもなく江口であつた。

「私、今晩あなたの處に遊びに行くわ。今日癪に障つたことがあるから……七時と八時との間。」

意外の電話に生き返つた淺海は、夕飯を濟して、やがて遊女の來る時刻を待ちかねてゐたが、心がそは〳〵して家の中に靜(ぢつ)としてはゐられなかつた。さうして早くから公園の中の電車の停留場に出掛けて行つた。七時と八時との間といふのに、まだ停留場の時計は七時にもなつてゐなかつた。彼はどうかして行き違ひになりはせぬかと、それを氣にしつゝも一刻も早く其時間の來るのをもどかしがつて、堪へ難い僅かの數十分を思ひまぎらす爲に暗の公園を獨りぶら〳〵歩いた。

大阪から、行く春に遊び遲れた多勢の男や女が尙ほ幾組も隊を組んで押掛けて、松の樹の間の料理茶屋で飮みつ歌ひつ花見手拭を頸に卷いて馬鹿騷ぎをしてゐた晝間の

賑かな人の聲、物の音は黄昏と共に寂しく靜まつて、宛ら山の中の一軒家のやうに離れて立つた家々は、何れも早くに戸締を急いで處々に突立つた電燈の明りの蔭は、暗の中に散り後れた櫻花が幽かに白く見えてゐた。

陰晴の定まらないこの頃の時候の常として、つい先刻まで星の見えてゐた空が何時の間にか一面の夕立模様の不穩な黒雲を以つて蔽はれた。

淺海は、どうかして少しも早く遊女をわが物とする身受の金を造るに、效なき心を焦してばかりゐるこの日頃の屈託をば、せめても今宵の逢瀨に慰めようとして、毎時の貸座敷で逢ふのとは異つた歡樂に松原の暗黒の中で彼自身でも驚かるゝばかり今更に心の稚なびた胸を躍らしてゐた。

停車場に戻つて來ると難波を出發した南海電車は勢ひよく走つて來て四五人の乘客を降すと、少しの猶豫もなく忽ち車掌の鳴らす笛の音と一緒に堺の方に向つて駛せ去つた。彼は不安な期待に惱みながら二三の電車を空しく遣り過した。

四つ目の電車が待つ間もなく走つて來て留つた。此度こそはと胸の躍つた豫感は果して違はなかつた。停車場の構外に立つて、遠くの夜目に頸を伸ばして眺めてゐる淺

海の眼に、ボギイ車の中央の乘降口の處から、狹い踏み段を恐れるやうに用心しいしい足許の方を俯向いたやうな姿勢をして降りて來る。纖細い一線に前髮の高い銀杏返しの横顏を暗の光に描き出した華奢な婦人は確かに江口に違ひない。

「此度は來た！」と淺海は心の中でいつた。

續いて降りた男と並んで歩きながら、小さいプラットホームを此方に向いて來る女は、先方でも早くも此方を認めたものか、

輕い驚きと喜びに身を搖るやうにして笑ひながら、

「あゝ彼處に來てゐる、來てゐる!!!」

と、女が覺えず高い聲を出したのが淺海の耳まで達いたのであつた。

連れの男は顏を上げて此方を探した。

「あれ、彼處に！」女は、此方を指で敎へた。

改札口を出て來ると、江口は急いで淺海の側に身を寄添へて、

「この人、自家の男衆をしてゐた人。今途中で會つたから丁度私一人で寂しかつた處だつたから、此處まで送つて來て貰つたの。……どうも御苦勞さま。もう歸つて下さ

い。ぢや切符だけ私貰つて置く。」

女は掌（てのひら）を出して切符を男衆から受取つた。

「どうも御苦勞さま。ぢや大丈夫だからね。大金の掛つたこの遊女（をんな）、確かに私が預つたよ。」

男衆を歸して、二人は電車の線路を向うに渡り、睦じさうに樹下暗（このしたやみ）に肩を並べながら砂の多い踏み心地の好い公園の坦道を眞直に花崗石の大鳥居の方に歩いて行つた。

「あの男、どうしたの！」

「この間まで自家（うち）の男衆をしてゐたのだけれど、餘り道樂が過ぎるもんだから暇を出されたのよ。…それで困るからツて、私に親方に謝罪（ちやま）つてくれと頼んでゐるのよ。」

「お前と何うかしてゐるんぢやないかえ。」

「憚りながらそんな江口さんと違ひますから御安心なさい。…私、も少し前に自家（うち）を出掛けたんだけれど、何だか暗くなつて寂しかつたから來るのを止さうかと思つて一旦引返したの。さうすると丁度あの男が私に頼んでゐた事はどうなりましたらうつて訊きに來たから、今から住吉に行く處だから送つてくれつて、此處まで送らして遣

つた意氣地のない奴なのよ、私なんかにもへいこら〳〵してゐるわ。」
遊女は、靜かに惡毒氣ない言葉でいつた。
「……また、ひどく暗くなつたわねえ。」さうして黑い空を仰いで見ながら、「私、恐いわ！　あなた私歸る時にも其處まで送つて頂戴。」
「あゝ、送つて遣るよ。だが、大阪の箱廻しや遊女の男衆は東京なんかと違つて馬鹿に丁寧で素直だなア。」
「さうよ、皆な溫順しいのよ。男の癖に女に頭を下げてばかしゐるんだもの、あの奴等。……あゝ曇つた、雨が降つて來たわ！」
遊女は、淺海の掌を自分の掌で握つたまゝ佇立まつてまた黑い空を見上げた。
「降りやしないよ。」淺海も、さういひながら空を見上げたが、「降つて來るかも知れないが、まだ降りやしないよ。さあ早く私の宿楼に行かうよ。」
「さう。降つてやしない？　でも今冷いものが顏にかゝつたよ。」
「ナニ、雨ぢやないよ。それは。」
「ぢや何だらう？」

「松か櫻花の露が落ちたんだらう。」

「さう、雨ぢやないの。雨が降ると困る。」わざと泣くやうな聲を出して甘垂れた。

「雨が降つたつて構はないぢやないか、傘もあるよ。でもお前の身體は紙で拵へてあるの？」

「でも、今日は好い着物を着て出て來たんだもの、濡れると困るわ。」女は、また甘えるやうな聲でいつて、頸を曲げて乳のまはりを見た。

彼女は、絣のよく揃つたはつきりした大島紬の小袖の上に匂ふやうな深い色の、紫紺の變り織の縮緬の羽織を、よくあれで滑つて落ちないと思はれるやうに輕く被つてゐた。

「本當に降らない？　降つてるわ！」

「降つてやしないよ。降つたら車でもあるぢやないか。」

「歸る時に、あなたまたステーションまで送つて頂戴よ。」

「あゝ〳〵送つてやるよ、男衆になつてもお前の傍についてゐたいんだから。先刻、お前よく私が居るのが眼に着いたねえ。」

「えゝ、直ぐ分つたわ！……あゝ、彼處に來てゐるナ、と、思つた。」
「俺にも、お前が電車を降りようとする時、その細い顏の形で直ぐ、あゝ來たナ、と分つたよ。」
「嬉しかつたわ。遠くから、あなたが立つてゐるのを見た時、丁度活動寫眞見たやうだつた。……これから二人で大阪へ行つて活動寫眞を見ようか。」
「そんなことをしてゐられないぢやないか。早く行かう。……もつとぴたりと寄り添へよ。」
　淺海はさう言つて握つてゐた掌で女を堅く引き寄せた。女は、はゝと笑ひながら、男の爲すまゝに從順に體を附着けて歩いた。
「あなたの處に何か甘いものがあつて？」
「あゝ、あるよ。お前もう夕飯は食べたんだらう。」
「えゝ。」
「甘い壽しが出來るの。それを拵へさすよ。」
　二人は緩く歩いた。

「あら犬が吠えてゐるわ。寂しいのねえ。誰も通つてゐないわ。あれは何？　白く見えるのは。」

「櫻花（はな）さ。」

向うから暗の中を、酒機嫌の人聲が近寄つて來た。

「此方へお廻りよ。」さういつて、淺海は江口を自身の左側に變らして、四五人の群れを遣り過した。

「あら、これが石の鳥居ねえ。私一遍來たことがあるわ。」

「お客と？」

「違ふわ！　自家（うち）のお母ちやんなどゝ一同（みんな）で一日遊んで行つたわ。」

大鳥居の處に、小溝の水が五六間の間道の上に溢れてゐた。

「あゝ、一寸お待ち、其處のところは水が流れてゐて歩き難いんだ。その下駄ぢや駄目だ。……私負（おぶ）つて遣らうか。」

「あゝ、負つて頂戴。」

「誰も見てゐるものはないだらうナ。」淺海は前後を見廻はした。誰も通つてゐる者は

なかつた。
「さあ、手を掛けた。」淺海は蹲みながらいつた。
江口は默つて、しなふやうな兩腕を靜と背後から男の頤の下まで深く卷き着けた。淺海は柔かい溫かい女の體溫を背に感じた。頸筋の處に女の鬢の毛が非常な魅力を以つて微かに觸れた。
「おゝ、重い。小さいと思つて負つて見ると隨分重い。……確乎捉へておいで、大きなお尻だから手が掛けられやしない。」
「噓！ 大きいもんですか。」
「いや、大きいよ。これ、かうして私の手が巧く掛らないくらゐだもの。」
「大きかアなくつてよ。」
「いや、大きい〳〵……そら！」
「はゝあ！ 擽つたい。」
女は、淺海の背の上で身悶えした。
「もう厭や！」

「そら、もう降りるんだ。」
淺海は背を低く屈めて、女の足を地に着けた。
其處まで來ると片側に立ち並んだ鄙びた茶店から覺束ない火影が泥濘んだ道を照らして、客もないのに、まだ表の一疊臺の上に色の褪めた赤い毛布が掛けて、パン菓子などを入れた硝子の蓋の傍に蜜柑や林檎が電燈を浴びて艶かに光つてゐた。鹽の塗れ附いたうで卵の鉢も並んでゐる。西洋御料理と白く抜いた長い紅提燈の軒先に吊された店にはうどんの看板や親子どんぶりの立て看板なども立てかけてあつた。
「あなたの宿樓まだ先き!」
「も少し行つて、彼處の處を左に曲ると直ぐだ。」
茶店の前を通り越すとまた道が少し暗くなつた。左側には別莊にでもするらしい屋敷に大きな花崗石で地形だけが仕放しにしてあつた。右手の廣い草原の彼方に遠く紡績工場かなんかの大きな煉瓦の建物が見えて、けたゝましい機械の響が夜の寂寞を破つてゐる。幾つも並んだ窓から潤味のない明りが射してゐた。
「あの高いのは何?」

「あれが住吉の高燈籠さ。」
「あゝ、さう〳〵。私何時か上つてよ。」
燈籠の火袋の中には大きな電燈が光つてゐた。

八

二人は、その高燈籠の少し手前の大きな硝子の箱の中に乾涸びたやうな鯛の切身を張り付けた角い大阪壽しを二つ三つ並べてゐる家の角を左に折れて、塀の外を廣く花崗石で疊んだ家の前を踏んで行つた。
櫻花の稚木のさき〴〵に植ゑられた庭園に來ると、向うに見える薄暗い玄關を指して、
「あすこさ。」
淺海は、旅の空の佗しく狹苦しい宿屋住居に堪へられない悲しさ寂しさを感ずるのであるけれど、江口ゆゑにはその旅の空の不自由や不便をも辛抱してゐるのである。
「あなた、この室にゐて獨りで毎日何をしてゐますの？」

「心細い事をいつて訊くぢやないか。俺は此處で物を書く仕事をしてゐるのぢやないか。さうして毎日々々お前の事ばかしくよ〳〵思つてゐるんだよ。……一緒になるといつてながら、お前にはまだ私の商賣が本當に飲込めないんだね？」

「そりや解つてゐるわ。小説を書くんでせう。」

「さうさ！」

「毎日々々お前の事ばかし、くよ〳〵思つてゐるツて。あはゝゝゝ。」

彼女は男のいつた通りの事を繰り返して、嬉しいのか、どうしたのか、にた〳〵笑ひながら、笑み溢れるやうな黒味の勝つた眼でまじ〳〵と淺海の顏を見守つた。小さく整然と坐つて、首を据ゑたやうな恰好をして此方を向いてゐる顏が分らぬやうに微かに振れてゐる。淺海が死別れたその妻にも何うかすると首を据ゑて顏を振る癖があつたことを今ふと思ひ出した。

思ふやうなおいしいお茶が出來上つて、それが幾種も餉臺の上に並べられて、煮き立ての白い御飯を茶碗に盛つて、いざ箸を取らうとする時に亡くなつた妻は、ちよいとその茶碗を額の處まで持ち上げて頂く眞似をしてそれから箸を着けた。その時餉臺

の向側に坐つてゐる淺海と視線が行き合ふと、彼の妻は唯眼に物をいはせながら心持ち顏を振つた。
「これは、私の癇の所爲ですよ。」妻はいつてゐた。
そこへ誂へて置いた、三つ葉の入つた壽しが出來て來た。
「おいしいのね。あはゝゝゝゝ。」
「澤山お食べ。」
「えゝ。……」
「何を笑つてゐる？」
「…本當に一緒になりませうね。あはゝゝゝ。」
伽藍とした家に滯在の客は淺海一人であつた。家は氣味のわるいほど森としてゐた。
小さい部屋の中で、電燈の光を浴びてゐる彼女の匂やかな白粉の顏が微かに振れてゐた。

九

「もう歸るわ。」
「ぢや電車まで送らう。」
先刻の廣い草原まで出ると、
「ちよつと待つて頂戴。わたい、此處に小用するわ。」
「ぢや、今自家でして來ればよかつたのに。」
「でもいゝわ、階下で屹度さう思ふもの。」
さういひつゝ、早くも闇の中に白い脛を捲くるのが見えてゐた。
翌朝淺海は、また其處を散歩すると、昨夕遊女が小用をした跡には輝く春の日の下に青草が仲々と萌えてゐた。

伊年の屏風

京太郎は、毎時の様に落着かない擧動で急々玄關から上つて來乍ら、
「おい、まだ來なかつたかえ？」
と、言つて奥の六疊で何か古切れの補綴物をしてゐる妻君の方へ行つて、向側にどかりと尻を落して兩足を投出して後の箪笥に背を寄かけて、
「あゝ〳〵！　疲びれた！」と、一つ大きな生欠伸をした。
細君は先刻から京太郎の云ふ事には返事をしないで默つて口唇を小さく引結んでゐたが、糸を噛み切るために初めて口を開いた。その序に京太郎の方は見ようとはせず、
「貴下、そんな當のない事ばかり待つてゐないで、少し落着いて、その日の用事をなさいな。先刻も家主と車屋とが來ましたよ……」
京太郎が急々して疲びれて戻つて來たのは、何もこれといふ用事があつて出て行つたのではなかつた。唯、家内に居て机の前に坐つてゐても何だか色々なる事に追ひまくられてゐる様な心持ちがするので、理由もなくその邊をブラリと一廻りして來たの

だつた。彼は自分で堅忍不拔に、しようと思ふ事をやり徹す事が出來ないで、獨りで悶々してゐる上に、細君がその弱點をも十分に知つてゐる事をも知つてゐるから、氣輕に訊ねた事には答へられないで、そこに坐るが早いか、頭から鋭くきめ付けられたのに脆くも浮いた氣勢を折られて、悄氣てしまつた。

「うゝ！」と云つたまゝ、稍々しばらく氣を兼ねた樣にして恐ろしい細君の顔を熟々見守つてゐた。さういふ時の京太郎の顔は、氣のいゝ犬が、自分を愛育してくれる主人に「くうゝ」と低い唸る樣な聲を出して纏ひかゝる樣に、何もかも投げ出して細君に依頼ると云つた樣に見えるのである。

京太郎よりも倘ほ以上に神經質な細君は、重ねて何か恐るべき事を警告するものゝ樣な弛緩の無い語調で、

「屛風々々つて、明けても暮れても同じ事ばかり云ひ暮してゐたつて、貴下自分で云つてゐる樣に、まだ來て見なけりや何樣物だかわからないぢやありませんか。……野島さんの方だつて、あゝして一と月近くも貴下の云ふ樣に月給を貰つて暇を貰つて、伊香保へ行つて思ふ樣に遊んで來たぢやありませんか。……先月の借錢がまだ片付い

てゐないのに、呆然してゐる間に貴下また雜誌の仕事に追はれますよ。」
最初に、軟かい氣分でゐる處を突然手酷しくたしなめられたので、暫く順直にだまつて聞いてゐた京太郎も、疊みかけてツケ／＼云はれるので、
「あゝ、もう可いよ／＼。」と痛い處に觸らうとするのを、押しのける様な調子で云ひ消しつゝ、立ち上つて隣の六疊に出て行き乍ら境の襖をガタピシ閉め切つた。さうして端然と行儀よく机の前に坐つた。さうして、唯題目を記したばかりのや、二三行書きかけてそのまゝにしたのや、幾枚と數の知れぬ原稿紙の書き潰しの重ねたのを机の上から取上げて、コトン／＼と音をさして端整に揃へて、その上に新しい用紙を重ねた。さうして稍々しばらく考へ込んでゐる様であつたが、ものゝ十分間もすると、兩方の臂を机の上に載せてその兩手の人指ゆびを兩方の顳顬に持つて行つて、強く押し廻す様に動かした。が、それも長くはさうしてゐなかつた。今度は「あゝッ」と、一つ大きな太息を吐いて、仰向に後方に倒れた。さうしてまじ／＼と、たゞ煤けた天井を眺めてゐた。すると京太郎は襲はれる様に、急に自分の身が悲しくなつた。さうしてあれつきりだまつて、ゐるのかゐないのか解らぬ様に靜かにしてゐる襖の彼方にゐ

る細君が、この依頼ない自分をたよりにして今日を生きてゐる者かと思ふと、それが世にも哀れなものゝ様に思はれて、何うしてゐるか、傷はしいものを見ないではゐられない様な心地になつて俄かに跳ね起きて、また襖を明けてその方へ行つた。

細君は依然として沈默を守つてゐるが、襖を隔てゝゐても京太郎が何うして〳〵ゐるかといふ事をば、長い平常の觀察から、チヤンと目撃してゐる様に承知してゐるのである。「あゝツ！　どうも頭が痛いツ。」と云ひ分けする様に照れ隱しを言ひ乍ら、また元の處に趺坐をかいた。

「でも最早來さうなもんだがなあ。……途中で若し間違ひでも出來ると大變だぞ！」

彼は對手が强ひて聞きたさうにもしてゐないのに、また自分でもそれを知つてゐるのに、心の雲霧を拂ひ除けようとする様な氣で、わざと快濶らしく聲を大きくして云つた。が、さう云ふと何だか、自分でッ、ト戯談に云つた事が本當の様に思はれて來て、途中で汽車がどうかなつて大事な貨物が鐵橋から大きな河の中にでも落ちて不明らなくなつて了はねば好いがと云ふ懸念が起つた。

二

先達中京太郎が伊香保の溫泉に行つてゐた時の事であつた。彼はその夏非常に夏まけした體を恢復しようと思つて力めて心を閑散にして、夏は雜沓してゐた客が退散した後の寂とした九月の溫泉宿の二階に夜も晝もなく、精神の髓まで湯に茹つた身體を縱に寢轉ばしたり、氣骨の折れない幾種かの新聞の記事を何度も繰返して目を通したり、さうかと思ふと突然起上つて、高い廊下に立つて遠くまで開展した吾妻の大きな谿谷を眺めたり、でなければ强い生樹の匂のする小暗い谿間の棧道を散歩したりして、色々な空想にばかり耽つてゐた。彼はそれらの空想に暖められて、時には長い時間快い心地になつてゐる事があるけれども、それが餘り長く續くと、後には思ひ覺めてしまつて、今まで我知らず醉つてゐた頭は、丁度惡い酒の醉が覺めた時の樣に、心が疲れて、獨りでに生欠伸が續いて、眼からは味のない淚が冷たく頰に流れ落ちるのである。さうして漸く現實の我に返ると、「かうして氣樂にしてゐられるのももう暫くの間だ。何時迄遊んでゐられる體ではない。近い內にはまたあの埃の立つ東京へ歸つて、

恐ろしい現實に接觸せねばならぬ。あゝ厭だ〳〵！　何うかして自分は人間を避け、世間を隱れ、凡ての競爭の環外に立つて生活したい。が、さうするには靜と遊んで居ても食ふに困らぬだけの資力がなければならぬ、どうかして金が欲しいな。西洋にはよく、餘りに深い因緣もない處から降つて湧いた樣に遺產を貰ふ事がある。バイロンなどはその最も好い例である。イブセンは生活の戰場で惡戰苦鬪した勇士であつたさうだけれども、イブセンの作つたリットル・アイヨルフの、何とか云つた男主人公はもと貧困な學者であつた。がその細君が靑々と繁茂した森林などを澤山持つて嫁に來たので、俄に氣樂な境遇になり、爲たいと思ふ著述も思ふ樣に出來、耽りたいと思ふ空想にも思ふ存分耽る事が出來、何でも何處かの高い山の頂點に上つて頻りに空想に耽つたさうである。あゝ！　自分にも何處からか持參金をウンと持つて細君に來てくれる者はないかなあ。と云つた處で自分には古ぼけた女房が一人ある。あゝ〳〵何かに金がないかなあ。」京太郎は本當にこんな事を思つて日を消してゐた。

「親父がも少し何うかして金を蓄めておいてくれたなら、自分はさぞ氣樂に遊んでゐられるだらうに……、からと、故鄕の自家には何か金になる樣な物はないか知らん。」

こんな事をも時々想ひ起して見た。

さうしてゐると、フト頭の隅の方に仕舞ひ込まれて、長い間忘れられてゐた古い記憶を想ひ起した。京太郎は獨り山の中をぶらつき乍ら覺えず、「あッ！　家には大變な物がある。あれがある〳〵！　あんな素晴しい物があるのに、今までそれを忘れてゐたとは、自分は何といふ馬鹿であつたらう。錢が欲しい〳〵と絶えず貧乏の苦勞をしてゐながら、あんな金の蔓があるのに、何故自分は氣がつかなかつたらう。」

彼はから思つて、人氣の絶えた樹影で覺えず、小躍りをして悦んだ。

それは京太郎がまだ子供の時分の事であつた。――二十年も昔の春の事である。亡くなつた父が、座敷に古い六枚折りの大きな金屏風を一雙立て並べて、之は伊年といふ大變に偉い畫家が描いた物で、これが果して本當の伊年に違ひないとすれば非常な寶物である、と、云つて見てゐたのを、彼も傍に居て見た事がある。それは子供心にも目のさめる樣な華美な顏料を用ひて椿の花だの、洒落な輕妙な筆法で描いた菫だの水仙だの色んな草花を以つて全幅を埋めてあつた。彼は今端なくも父がその屏風を開いて立つて見てゐた時の事を歴々と記憶から呼び起した。さうすると、續いてからい

ふ考が京太郎の頭の中に起つた。

餘り豐でない自分の家には資産として自分の讓つて貰ふべきものは何もない。父が亡くなつてから、殆ど長兄の手一つで、自分が東京に三年在學の間の學資を給してくれたのを恩とせねばならぬ。そればかりではない。兎も角卒業するまで續けて行つてゐた學校に居たのは僅かに三年であつたけれど東京にゐて學資を仰いだのは、三年や四年ではなかつた。胃腸が惡いと云つて二三ケ月も入院してゐたり、高價な本を買ふといつては金を取り寄せたり、試みにそれを總計に積つて更に普通の學資に換算して見たら月二十圓と見て、優に七八年間の學資に達するであらう。思へば父の亡い後もそれだけの費用を貰つてゐる。尤もこれ自分も養子に行つてゐる身ではないし、矢張り實家の姓を何處までも名乘つてゐる私だ。兄にして見れば、別に分けて遣る財とてはないのだから、これまでは、まあ不精々々ながらも云ふがまゝに金をくれてゐる。が、幾許、强請すればまだ幾分かは送つてくれる分とも、もうこの上に無心は云へないが、あれなら私にくれとは云へないまでも、どうかしてその利益の幾分かを分けまへする事は出來る。……十分に强請する事が出來る。親父の殘した僅かばかりの山林

田畑に就いては、何とも云ふ事が出來ないけれど、あの屛風だけは自分もその利益の幾分に與る事が出來る。…が、まあそれにしても、自家には飛んでもない豪儀な寶物があつたものだ。親父も兄も美術の鑑賞眼などはない人間だが、伊年の草花の屛風とは何と思つても素晴らしい品である。

專門家でない人には或は光琳は知つてゐても、伊年は知らない人があるかも知れぬ。伊年は光琳の先驅者であり、また琳派の開祖でもある。琳派の繪畫は光琳に至つて渾成し圓熟したけれども、凡ての藝術が一つの新らしい傾向を分化せんとする場合に見る純朴で生氣に富んだ潑剌たる風趣はむしろ光琳よりも伊年が優れてゐるとさへ云はれてゐる。彼は又俵屋宗達とも云つて、もと加賀の人であつたが、後に京都に出て大家の名を成した。それだけの事は、近年伊年の事を忘れてゐた京太郎も何かの序に美術史か畫人傳かで調べて見た事があつた。さうして上野の博物館の特別展覽會だとか、美術學校の記念日だとかに、帝室の御物として觀覽を許されたり、松平家だとか津輕家だとかの所藏として公衆の展覽に供せられたりする際、光琳とか伊年とかの屛風には彼は特別の注意を拂つて見てゐた。

尤も強ちそれは、亡父が伊年を所藏してゐたからばかりではなかつた。彼は一體日本在來の繪畫では、雪舟の流れを汲んだ墨繪よりも彩色の富麗な繪畫を好むのである。さうしてその中でも四條派とか狩野とか歌麿の浮世繪とか云つた樣な色々な繪風もあるが、特に琳派の繪を最も好んでゐる。彼は伊年や光琳や抱一の華麗人目を眩する樣な派手模樣の色彩を好いてゐるのである。

かういふ心持が繪畫に對して始終京太郎の頭に纏綿してゐたから、彼が何か博物館や美術學校で見たり、または「國華」の複製などで見たりした、この美しい幻影は直ちに京太郎の故鄕の家に藏してある筈の、子供の時分に見て美しいと思つた派手な伊年の屛風をも同じやうに美しいものと思つた。

さう思つて來ると、金色燦然たる六枚折りの屛風一雙にもつて行つて、氣儘に顏料を吝まず描いてある草花が眼に見る樣に思ひ浮んで來た。

「佳矣！　自分は僅かばかりの山林田畑は欲しくもない。自家に、あの、何々伯爵家だとか、何某氏所藏だとか、富豪の名を記して「國華」に複製せられて貴重せられ、或は博物館や美術學校で鄭重に取扱はれてゐる、あの宗達の屛風が一雙あれば、他に

は何物をも欲しくはない。……自分の家に伊年の屛風がある！」と、京太郎は幾度か心の內で驚喜の叫びを發しながら、一人で其處等の山路をはしやぎ廻つて珍らしく威勢よく浴舍の二階に戾り、その晚は、非常に興奮した氣分で長い長い手紙を故鄕の兄の處に書いた。

自家には、確か伊年の屛風があつた筈だ。あれは、もしそれが眞個の物だとすれば非常に貴重な品であつて、從つて頗る高價な物である。私は今から二十年ばかりも前、父上がそれを座敷に擴げて珍重してゐられたのを記憶してゐる。それから確か兄上が御婚禮の時にも座敷に立て聯らねてあつたのも記憶してゐる。私は東京で博物館などでも矢張り伊年の描いた物を見た事があるが、帝室の御物さへある位であるから大變な立派なものであるに違ひない。さういふ品であるから、眞個の物を所持してゐる以上は、今別に金に困つてゐるといふのでないから賣らなくつても宜しいが、もし賣却するとすれば、少くとも五六千圓、高ければ一萬圓にも賣れる事は受合ひである。私は自家に伊年の屛風があるといふ事をフト想ひ起して嬉しくつて堪へられぬ。これから、直ぐ歸國してあの屛風を取出して熟々と眺めたいくらゐに思つてゐるが、大きな

荷になつて厄介だけれど、鄭重な荷造りをして通運で東京に送つて見てはどうだらう？　此方にはまた眼の利いた人も多勢ゐるから、其等の人に見て貰つてもよろしい。といふやうな事を、足許から鳥の翅つ様な口調で云つてやつた。夜が更けてから、石段で出來た伊香保の町を暗い足許を探る樣にして歩いて、自分でわざ〳〵局までそれを出しに行つた。長い間ボショ〳〵音を立てゝ騒いでゐた女中までが、もう疾に上つて行つた。流しの板が乾いて了つて、濛々と、一坪の浴槽の見えぬまでに湯氣の立ち昇つてゐる寂然とした湯殿へ獨り下りて、冴えた頭がトロ〳〵と眠くなるまで五體を湯に浸けて尙ほも金屛風を思つてゐた。その晩京太郎は稀らしく幸福な氣分でグツスリ寢入つた。

三

それから三四日居て京太郎は東京へ歸つた。妻にも旨さうにその話を裾分けして聞かせた。故鄕からは早速返事を寄越したが、それは端書に簡單に、成程自宅には其様な物があつたが、今急にと云つては忙しくつて運びをする暇がない。まあその内序が

あつたら兎に角土藏から一度出して見よう。色々な道具の一番奥の方に仕舞つてあつて面倒だから。と、云ふ樣な至つて氣の無い文面であつた。

京太郎は、それを見ると躍起になつて、舌打ちをし乍らすぐさも此度は更に語勢を強めて、宛がら兄に向つて美術史の講義をする樣な調子で伊年といふ畫家の説明をしたり、鑑定をして貰ふには至つて都合の好い、博物館で多年重要な處にゐる信用すべき懇意な知人があるからといふ樣な事を書いたり、果てはこの廣い東京にすら大名華族か何かでなければ、珍藏してゐない樣なそんな天下の至寶が私共の家にあるといふのは夢に夢を見る樣な幸福ではあるまいか、それを何ぞや序があつたら土藏から取り出して見ようなどゝ、長閑になつてゐるのは、馬鹿だ。と、言はないばかりに罵つた手紙を書いた。

二度目に來た端書には、さういふ事なら近い内に送る樣にしようと、矢張り餘り乘氣のしない調子で書いてあつた。それから京太郎も辛抱して一週間ばかり溫順く待つてゐたが、また催促の手紙を出した。さうすると今度は向うからも長い手紙で、大切な物品を遠方へ送るのだから、先達から大工に新しい丈夫な箱を拵へさせようと思つ

てやかましく云つて急がしてゐるけれども、大工も暇がないのでまだ出來ない。昨日もまた他の仕事を休んでも早く拵へる樣に催促をしに遣つたら、ぢや、さうしませうと受合つてゐたから、箱が出來次第に送る。この間も土藏から取出して、奥の座敷に立てゝ大橋氏や下村村長など大勢來て貰つてよく見たが、成程お前が云ふ樣な立派な物に相違ない。一同感心してゐた、と、云つてよこした。大橋氏といふのは村一番の金滿家で、書畫骨董を弄つて遊んでゐる人間である。京太郎はその手紙を讀んで喜んだ。が、向うの方でも今度は本當に乘氣になつて來たらしいのを見て、彼は丁度潮がさして來る樣に段々樂しみに滿ちると同時に、何處か胸の底の方で自分が伊香保の山の中で夢みた夢を強ひて事實にせり上げたものゝ樣に思はれて、何となく心許ない責任を感じ初めた。それと共にまた樂しい物を焦れて待つ場合、喰られる樣な淡い杞憂を感ぜずにはゐられなかつた。

いよ／＼箱が出來たから、早速多勢の手の掛つた荷造りをして、下男に車力で、との手紙と一緒に停車場の運送屋に持つてゆかした。といふ通知が來てから、今日は既に五日になるのである。

細君は、相變らず、先刻から、彼が何と云つても堅く默り込んで、頸を折り曲げた樣にして仕事をしてゐたが、縫はうと思つてゐただけをして了つたのか、漸く顏を上げた「ホッ」と一とつ太息をして、片手で仕事を押遣り乍ら向うの方にころがつた煙管を二尺指で引き寄せ、煙草を摘み〳〵初めて京太郎の顏をまじ〳〵打ち見守つて眼だけ呆れた樣に笑ひ乍ら、

「貴下といふ人は本當に妙な人だ。此度山から歸つて來て屛風の事を云ひ出したが最後、もう何にも他の事は手がつかないんだもの……もう早く來てくれなければ困る。出してから今日で幾日になるんです？」

「だから五日になるつて云つてるぢあないか。」

「ぢやもう來ますさ。」

最初彼が山から戻つて來て屛風の話をすると、細君は一向親しみのない事なので、唯「さうですか。」と、冷淡に聞き流してゐたが、彼が明けても暮れてもその事ばかりを歌に唄つて、もう袋の中の物を取出すばかりの樣な氣分になつてゐるので、この頃では、細君も故郷の兄と同じ樣に、口では彼をたしなめ乍らも心の中では大いに乘氣

になつてゐるのである。細君は二三服立て續けに煙草を吹かしては、京太郎の顔を見乍ら、

「眞個にいゝ物であつたら、……貴方何うします？」と、云つて微笑つた。京太郎は先刻から興もない顔をしてゐた細君の氣持が漸く和いで屏風のことに意が向いて來たのを見て、自分も、また今更に眞個らしく思へた。で嬉しさうに言葉を强めて、

「さうだつたら旨いもんさ！　お前が欲しいといふ着物を拵へてやる。……五千圓や六千圓には誰でも買ふ。假りに今此處で一萬圓出すつたつててんで賣り手がないんだもの。今に來るから見て見な。あれが眞個だつたら、そりや大變だ。」

京太郎は、段々、自分で云つてゐること、想つてゐる事でそれが全く眞實である事を確證せられたかの樣に、虛實の意識が茫つとなつて了つた。さうして獨りでに膝を躍らす樣になつて來た。

「俺も一萬圓に賣れたら半分は兄貴から取るよ。唯、何でもなく持つてゐるものが不意にそれだけの大金になるんだもの……半分は取るよ。屹度請求するよ。さうしたら己、何より先きに好きな土地を買ふよ。先づ五千圓あれば……、さうだな……段々電

車の便の利く郊外の閑靜な處を見付けて買つておくよ。矢張大塚か目白の方が可い：：さうだ彼方が可い。何時かそれ、お前と櫻花の盛んに散る時分に大塚から王子の方へ歩いて行つた事があつた。あの方がいゝよ。」

「えゝ。」と、細君も、一昨年の春の末、京太郎と二人で大塚から菜種の花の吹き盛つた田圃道を歩いて飛鳥山、荒川堤と何處までゝも歩ける處まで歩いて行つた時の、好い天氣であつた事を思ひ浮べて、から合槌を打つた。

「俺、旨く行く樣だつたら、早速兄貴を東京に呼んで、序に兄にも土地を買はせよう全體一昨年日露戰爭の最中に、借金をしてゞも構はぬから東京郊外に土地を買つておいてはどうだ。と云つて、くれ〴〵も勸めて遣つたのだが、その時はうんともすんとも云つてよこさなかつた。本當に田舍の人間は馬鹿だ。今度は買はすよ。あの邊は今買つておくと好い値になる。まださうはしまいが假りに坪五圓として百坪で五百圓：：五百坪で二千五百圓か。五千圓で千坪買はう。五百坪は兄貴の分で、俺も一所に世話をする。さうして小さい四間ぐらゐの家で可いから六七百圓かけて家を造らう。空た處は皆庭にして、其處へ草花を植ゑるよ。ナニ金をかけて庭を造らなくつても可い。

己が自分で鍬を持つて土掘りをする。萩は萩、山茶花は山茶花、芙蓉は芙蓉、木犀は木犀と云ふ樣に、自分で植ゑるんだ。おゝそれから何時かの樣に、また茄子や胡瓜を作らうよ。此度は胡瓜を澤山作つて方々へ遣らう……」

「さうしたら、私も好きな豆を作るわ！」

「あゝ豆も作らう……」

「さうしたら貴下の、その頭の痛いのも治つて了ふ。」

「それや治るさ。」

京太郎は小さい生々した顏の、目をパチクリさして、自分の顏を見い〳〵樂しさうに話を聞いてゐる細君と、火鉢を挾んでそんな話をしてゐると、倍々色々な空想がそれからそれへと際限もなく彩絲を繰出す樣に續いた。東京の郊外の、遠く武藏野の眺望を恣にした、こんもりと小高くなつた丘の上に、南方に緩い勾配の傾斜を見下した小廣いかなめの垣などを繞らした、世間から物忘れをしたといふ風に見える小舍がある。その傾斜の地面には、まだ青々とした大根の葉が威勢よく秋の靜かな明るい光線を浴びて輝いてゐる。その畑の中を五六尺ばかり切り開いて生垣の入口まで道が附い

て、それを、眞赤に熟した唐辛子が縁を取つて植はつてゐる。その道を下りて大根畑を出ると、更に幅の廣い道路があつて其處には大分車輪の跡が出來てゐて、それをまだ先へ行くと郊外電車が見える。自分は今その小舍の庭園で秋の日を浴び乍ら逍遙したり、兩手を土塗れにして草花の土鉢を弄つたりしてゐた。

「オイ！」と先刻から少しだまつてゐた京太郎は、突然に細君に呼び掛けた。

「五千圓ぢや足りないねえ。本當だつたら二萬圓にだつて賣れるよ……併しさうなつたら俺はこんなに今の樣に甘味もそつけもない貧乏な暮しをしてゐても構はない。もうそれだけの物品があれば土地を持つてゐるのも同じ道理だ。土地の價が高くなる樣な時節になれば屏風だつて矢張値が出るに違ひない。さうしてお前、庭に草花を植ゑなくつても、その屏風に一杯、綺麗な草花を描いてあるんだからその方が好いよ。賣らないで持つてゐるよ。兄貴にさう云つて、あの屏風だけは亡父の遺品として俺の物にしておいてくれと、さういはうよ。」

京太郎はさう思ふと、またしても、沈んだ少し黑味を帶びた、微塵も俗惡の氣のない、品位のある金地にもつていつて月のさめる樣な鮮かさではあるが、燻んだ豐かな

朱の玉を瓔つた南天の實や、豪放な調子で描いた大きな瓣の椿の花だのを想像に浮べた。

「俺は、あの屏風が來たら、あすこの机の處に立てゝおくよ。さうしたらお前に急々云はれなくても、心に樂しみがあるからさつさと仕事が出來るよ。誰か俺の處に訪ねて來るだらう、さうするとこんな穢い家にゐても、二萬圓の伊年の金屏風に取卷れてゐれば豪氣ぢやないか、俺の周圍は光つてゐるよ。」

「でも故郷の兄さんだつて慾がありますよ。そんな物と知つたら、とても貴方に呉れやしませんよ。矢張價よく賣つて、その內のお金をいくらでも貰つた方が可うござんすよ。」

細君はそれから晩の支度が晩くなつたと云つて、絲屑を丸めて座を立つた。

四

その翌日であつた、京太郎が午後の散步から歸つて來て、ガラッと門を明けると、「貴下來ましたよ。」と、細君がうちから晴やかな聲で呼んだ。

「さうかい。」と彼は庭からすぐ廻り縁の方へ行つた。身體の小さい細君は、今全身に力を籠めて自分の帶の處まで高さのある縁の上の大きな白木の箱をずらす樣におして見たり引いて見たりし乍ら、

「貴下が歸つて來る一寸前に來たばかり、ほんの今運送屋が一と休みして歸つた處です。こんな大きな箱ですよ。」

「さうかい……愈々來たかなあ。どれ／＼……そのまゝ來たのぢやなからう。」

「えゝ、さうですとも、まだこの上を荒い板の箱で全然釘附けにして、その間に一面藁を入れてあつたんです。縁の下にあるでせう。御らんなさい。今お婆さんと二人でそんな大きな物を何處へおいていゝか、おき場所がないから、貴下が居ないでも、それは縁の下にでも入れておいたつて構はないだらう云つて、何れ急にはいらないんだから、まあ暫時そこへ仕舞つておいたんです。」

「うむ。成程大きな荷造りだなあ。」京太郎は縁の下を覗いて釘を放した粗木のまゝの不細工な箱を念入りに檢査した。彼はもうからうして來た以上は、それを明けて見るまでが樂しい樣でもあり、又心許ない樣な氣もするので、少しでもその心許ない樂しみ

をゆつくり樂しまうとするのであつた。尚ほも縁の下を覗き乍ら、

「成程これぢや故郷でも、出す時に騷動だつたらう。」

「運送屋が呆れてゐた、『中にあるのは一體何ですか大きな物ですね』と、言つて聞くから、『田舍から屛風を送つて來たんです、と云つたら、『へえ屛風ですか、大變に重いものですねえ』と云つて呆れてゐた。運送屋も一人では門の外から此處まで重くつて持つて來られないと云ふから、私とお婆さんと二人がゝりで此處まで漸と持上げた處です。今に貴下が戻るからと思つてそのまゝにしておいたんですけれど、おそいから又お婆さんと二人で、あの箱のまゝでは早速今晩から戸の開閉をするのにも邪魔になつて仕樣がないからと云つて、釘を外して漸とこさこれまでにした處‥‥また馬鹿に大きな箱なんですもの、田舍の人が荷作りしたんだから。運送屋も笑つてゐました。」

細君は呼吸をはずませて立て續けに、荷物の到着した時の模樣を、おちなく、京太郎に話し乍ら、矢張り白木の箱から手を離さずに、何方かへずらす樣に力を入れてゐる。京太郎は「さうだらう、大きな荷物だ。」と繰返し乍らにこ／＼して、「どれ‥‥これも大きな箱だな」と云つて、そのまゝ縁側から上つた。勿論六枚折りを一雙入れてあ

るのだから、長さは一間の餘なくてはならね。横もその半分。幅も一尺は入る。眞新らしい樅の白木を使つて、懸子にして被せ蓋にしてゐる。京太郎は今度はその箱を繋繁と見守り乍ら、自分の手紙で故郷の者をかうまで手數をかけさしたのだから、厭でも應でも最早箱の中の物が好くなくつてくれねば困る、と念じた。

「貴下、こんな大きな物を、これからまあ何處へ仕舞つておきます？　今、お婆さんと二人でさう云つてゐたんだ。何處へおいたらいゝだらうつて。……貴方の方の六疊ぢや彼處の隅へやると半分餘るから押入れの邪魔になるし、奥の間ぢや箪笥をおいてゐるから外におく處はないし、さうかと云つてこんなものだからあんな明けッ放しの玄關にや心配でおいとけませんよ。もしおいたつて立てればうちが暗くなるでせう。」

「あゝさうか、さあ何處へおいたら可いだらう。」京太郎にはさういふおき場の事まで今から考へてゐられなかつた。さういふ事は頓と氣が着かなかつた。が、細君はその餘りに馬鹿大きかつたのに面喰つたのと、故郷からそんな大切なものを預けられたのとに一方ならぬ負擔を感じて、もう置き場にヤキモキ氣を使つてゐた。

「まあ何處かへおけるだらう。」

「ぢや、おそいから明日の事にしてもいゝけれど、まあ一寸明けて見ませうよ。」細君は莞爾として。

「あゝ、明けて見よう：：：さあ、お前其方を持ちな。」二人で蓋を取り除けて、先づ下においた。「まあ！　古い物ですねえ。」細君は子供の様に呆れて叫聲を發した。「うむ。」と云つて、京太郎は熟々と箱の中を見渡し乍ら、「成程角々の傷まぬ様に繼切れを當てて、丁寧にやつてゐるな。：：：待て〳〵オイ！　さあ、この中が已の一生の浮き沈みの瀬戸際だよ。さう思ふと、親爺から傳つたこの屛風が生きてゐるものゝ様に思へてならぬ。」から云つたまゝ彼は何時までも古い屛風の折り重なつた緣の處を見續けてゐる。角には赤銅の錺を附けてあるのが古くなつて黑ずんでゐる。

「さあ貴下、そんな事を云つてゐないで早く。」

二人は重い〳〵と云ひ乍ら、四つの手の先に力を入れて深い箱からぎこちなささうにして漸とこさ引張り上げた。それを座敷に舁いで行つて押し立てた。彼は「可矣可矣」と一人で受取つて片手で倒れない様に支へ乍ら、右手の端を取つて、颯と一枚開いた。其處にあつた梅の枝が彼の目に映るや否や彼は忽ち電氣にでもかけられた様に

全身に痲痺を感じた。粗雜に畫きなぐつた栴には、一點一劃も名人らしい落著いた筆は認められなかつた。彼は、もうそれだけで樂しい夢の覺め際の失望を意識した。屛風を支へた腕が萎えた樣になつて默つて了つた。
「貴下、何してゐるんです。も少し披いて御覽なさい。」
「うむ……だけど此奴は駄目だぞ。」唸る樣に云つた。さういひ乍ら次を披いた。菫が出た。水仙が出た。例の椿が出た。萩もあつた。が、豫て空想に見てゐた物とは似ても附かぬものばかりであつた。落款を見ると、落款は成る程大きな茶碗の底か何かで押した樣に、とぎれ〳〵に丸い朱の輪廓があつて、その中に伊年と行書で誌してある
「うむ、この落款だけは好いが……」と云ひ乍ら京太郎は、その前にドカリと趺坐をかいて兩手を背後につツかひ「おい、此奴は駄目だよ……」と、細君に縋る樣に泣く樣な聲で云つた。
「何うして？　何處が駄目なんです？」そのわけの解らない細君は突立つたまゝ云つた。
「何うして？　といふ理由はない。唯この屛風はいけないよ。」

京太郎は心の中で、あんな騷ぎをして遠方に送つて寄越さした故郷に何と云つて遣つて可いか一目見て不可と思ふと直ぐ何よりもその事を考へずにはゐられなかつた。これでは博物館の紀さんに見て貰ふまでもない。自分が見てさへ駄目である。子供の幻影といふものはあゝも人を欺くものであつたか。と京太郎は今更に自分の豫想の餘りに大きかつたのに興醒めると共に、自分の鑑賞眼が何時とはなしに進んでゐたのを内心驚いたのである。さうしてそれは單に子供の時に比べて年齢を取つたからばかりではない、自分が東京に住つてゐるといふ事が自然に發達せしめたのである。何もかも前途を想つて樂しかつた子供の空想がこの屛風と一緒に凡て破れて了つた樣な氣になつた。

「まあ貴下、そんなことを云つてゐないで彼方の方をも披いて御らんなさいな。」

「あゝ。……併しもう披いて見たつて駄目だよ。」

京太郎は轉りと、今度は横になつたまゝ殘つた半雙を披いて見ようとする元氣もない。

「ねえあなた、そんなに駄目だ／＼と云つてゐないで、も一つの方を早く見て御らん

なさい。」細君は、彼があれ程永い間屏風々々と云ひ暮してゐたのに、漸と今待ち焦れたそれが届いて、披いて見る早々「だめだ／＼」と云つてゐるのが、一向道理がわからないで、此度は自分の方から京太郎を引立てる樣に、

「ぢや私が披いて見よう。」と云つて、一つに手をかけた。彼は、それを靜と見てゐたが、起上つて手傳はうとはしなかつた。此度披いたのを見ても何れも同じ樣に、調子の低い、唯淺はかに琳派の筆法を摸してゐるに過ぎない。狹い六疊の室は、夫婦を取卷いて十二折の屏風で一杯になつた。

「貴下、そんなにだめだ／＼つて何處が惡いんです？　この椿だの萩だの、能くかけてゐるぢやありませんか。」

「あゝ、でもだめだよ」彼は何度も同じ事を繰返すより他、言ふ事がなかつた。

「さうですか。何處がそんなに惡いのか、私なんかにはわからないけれど、私はいゝと思ふがなあ。ぢやまあ今日はこの儘仕舞つておいて、あなたその紀さんに一度見てお貰ひなさい。」「うむ、紀君にもこの間この話をして、來たら一遍見て下さい。と云つておいたんだが。何ぼ何でもこれぢや恥かしくつて見て貰へない。」彼は口先で唯氣

の無い返事をし乍ら、腹の中では、これは困つた事になつた。が、原はと云へば、皆自分が白晝夢を見たからである。故郷へ何と云つて遣つて可いか。それを思ひ返しては當惑するばかりであつた。

五

それから四五日たつて、紀氏には、早稻田大學に、日本美術史の講義に行つた歸りに寄つて觀て貰つた。「一寸見せて貰ひませうか。」と、云つて上つて來た。その結果は、京太郎の思つた通りであつた。この豫想の方は違はなかつた。氏の說に、伊年には草花を描いたものはなか〳〵多くある。併しそれは最初の伊年でないのが多いさうである。けれどもそれが巧く描けてゐて伊年の落款さへあれば伊年で通るのだが、それもかういふのよりか、もつと巧い。と、いくら劣いからと云つて、無暗に他家の物をケナさぬといふ樣な批評をした。この四五日每日の樣に「私、あの屛風には落膽して了つた。」と正直に云つてゐた細君も、茶を運んだ序に、襖の入口に坐つてその話を聞いてゐた。それでいくらか思ひ諦めたらしかつたが、その後、何時であつたか、榎

町の親類に寄つた時その話をして來たと思はれて、「あなた、あの屛風をどうするつもりです？　榎町でさう云つてゐた。改代町に、そんな事のよく解る道具屋があるさうですから、其處へ行つて話して見て貰つたらどうです。あゝして大騷ぎをして遠方から取りよせて、自分で一寸見ただけで、駄目だ〳〵と云つて仕舞ひ込んでゐたつて仕樣がないぢやありませんか。國の兄さんの方へも、たゞ屛風がついたといふ端書を出したばかりでせう……ですもの、故鄕だつて、何うなつたかと思つて此方から好い手紙の行くのを待つてゐますさ。」

「うむ、そりや待つてゐるだらうけれど、好くないんだから何うも何と云つてやつて好いか、云ひ樣がない。それに俺ばかり見たのぢやない、紀さんにも見て貰つたのだから。」「そりやさうですけれど、あゝいふものは、一人だけに見て貰つたんぢや解りませんよ。紀さんなどの樣に、學問の上からばかり見る人よりも、矢張り本當の商賣人の方がようござんすよ。商賣人なら少々好からうが惡からうが、そこは又何とでも云へるから……さう貴下や紀さんの樣に、正直に繪の善惡ばかり云つてゐたつて仕方がない。紀さんも善くないと云つたんだから、私などにはわからないけれども、そり

や善くないのが本當でせうけれど、善くないのだから何の事道具屋に見せた方が可いんですよ。……貴下が云ふ樣に五千圓の一萬圓のつて、そんな夢見る樣な事を云つてゐたつて仕方がない。唯の三百圓でも五百圓でも賣れさへすればいゝぢやありませんか。」

「いや！　とても三百圓も六ケ敷よ。紀君も八拾圓ぐらゐと云つてゐたぢやないか。」

京太郎も自分で毛を吹いて疵を求めたとはいひ乍ら、實はかういふ愛想のつきた代物を伊年で候のと行つて、ペタ〳〵落款を押して鑑賞眼の低い田舍者を騙した昔の旅繪師が熟々憎くもなつて來た。また父親は何處から手に入れたのか知らないが、何の鑑識もなく、かういふものを唯傳習的に伊年と思つてゐる田舍の者が氣の毒で堪らぬ樣な氣もして來た。で細君にも諭す樣に、

「うむ、そりやさうだけれどな、いくら道具屋に見せたつて却つて道具屋の方が紀さんなどより商賣根性でもつと踏みつけた事を云ふに定つてゐるよ。どうも兄貴に對して俺が濟まぬけれど、此方へ送らしたのが惡かつたのだ、もし眞物でないまでもまさかこれ程とは思はなかつた。」

「そりや貴方の物だから貴方が思ふ樣にすりやいゝけれど、私や道具屋に見せた方が可いと思ふ。唯見せたら可いぢやありませんか。」

けれども最早善くないと堅く信じた彼は遂に應じなかつた。でも時々殘念さうに披いて見てゐたが、「でも古い物にや相違ない。かうして見てゐると何となく氣が落ついて懷しい好い心弛がする。折角國から取り寄せたんだ。父親の供養にこれを立てゝ法事の眞似事をしようか。」「あゝさうしてもいゝ。お婆さんにさう言つて私達のお祖父さんの法事もしませう。榎町の子供を呼んで來ておこは蒸かしませう」

「あゝ、それが好い〳〵。」

一日お婆さんと、孫が三人と、その母親が二人、京太郎と妻とは屛風の蔭で蓮や慈姑の羹メを添へておこはを食べた。その日殆ど一人で世話を燒いてゐたお婆さんはフト感に迫つたか、おこはを食べ乍ら、「お祖父さんの因縁が惡いんだ。」と淚聲で突然にそんな事を云つた。娘達は「ハゝゝゝゝお婆さんが古い事を想ひ出して」と淺果敢に笑つた。暗い屛風の蔭には蠟燭の火が搖々と燃えて、線香の香が薫つた。

果して田舍からは「何うだ〳〵」と度々催促をして來た。自分が種を蒔いておいて

今更素氣なく好くないとも云ひ切れないので、その度毎京太郎は返事に窮した。すると後には、お寺の坊さんにも、その話をしたら、あの屛風なら何時か法事の時に見た事がある。あれは伊年だ。立派なものだ。と云つてゐた。東京で可けなければ田舍者にだつて五百圓位の買手はいくらもある。と、お前が好い物を都合で、何うも好くない好くないと噓を云つてゐるのだらうと云はぬばかりに迫つて來た。

さう云ひかけられても京太郎の方からは強い事は云へなかつた。で、それでは送り返さうと云つて遣つたが、荷造りをするが億劫なのでその内に／＼と延して遂々三年越し押入れの奥に仕舞込んでゐた。

その三年目の年末に迫つて、京太郎は自分の都合し得る限りの金策に窮した苦しまぎれにフト忘れてゐた屛風の事を思ひ浮べた。せめて三百圓に行けば、何とか云つて田舍を納得させよう。さうして自分は今の場合唯の五拾圓でも欲しいと思案をして、窮餘の窮策に、あの時細君の頻りに勸めた改代町の古道具屋を細君には内密に訪れた。

紺地に赤く古道具刀劍書畫骨董賣買と散らして染拔た暖簾で全然間口を掩うた店前に、大きな眞鍮の火鉢を抱へて悠然と坐つてゐた六十を大分越したらしい主人は、京

太郎の漂然と入つて來たのを見て、錆びた聲だが、年に似合はぬ威勢の好い調子で、
「いらつしやい。」と抑へるやうに云つた。
その店前は、古くから往來して京太郎には眼馴染みの猩々緋の毛氈の様なものを折り掛けたり、大きな長持の様な何とも名の知れぬ古道具類を積み重ねたり、所々に軸物を掛け連ねたりして、内福さうに店を飾つてゐる。他に云ひ様がないから、
「一つ屛風を賣つてもいゝんですが、見て貰へませんか。」老主人は云ふ事だけ鄭重に
「有難うごす。拜見いたしませう。……誰ですか？」「伊年ですが……」と思ひ切つて云つたが、自信がないのだから冷りとした。
「あゝ伊年ですか、大層結構な物をお持ちです。……あゝ伊年の物を。もうあんな物は大抵持つてゐる方は定つてゐますな。あれや大名のお屋敷に定つた物です。松平様とか、南部様とか。……結構な物をお持ちです、もう拜見さして戴いたも同じでげすから……有難うごす〳〵……」道具屋は自分一人で教へる様な口吻で、威勢よく立續けに喋べつて京太郎には何にも云はせない。さうして云つて了つて平然として外の方を眺めてゐた。

京太郎は無據笑ひを含み乍ら、

「どうも見て貰はなけりや、まだ解らないんです。」と、何とも附かぬ事を云つた。

「いやもう拜見さして戴いたも同じでげす。……どうもありがたうごす。また何か御用が……遠く江戸時代の昔からこの商賣に腕を鍛へ、この商賣で身上を仕上げて來たといふ樣な落着き拂つた態度で何處までも商人らしい鄭重の口を利いてゐながら、少し氣の狂つた樣な客を追ひ出す樣に云つた。

京太郎は、俺も年の暮で少し馬鹿になつてゐるんだ。と、思ひ乍らブラ〳〵自家に戻つた。

その晩、細君に道具屋に行つて見た事を話すと、細君は、

「あなた、この年末で皆な忙がしがつてゐる時分に、まだそんな屛風の事など思つてゐるんですか。」

解説

宇野浩二

『二人の獨り者』は、大正十二年、（一千九百二十三年）秋江が四十八歳の年の作で、一月から四月まで「國民新聞」に連載された、秋江としては、珍しい、長篇小説であり、ユウモアのある作品である。猶、この小説が珍しいのは、例の遊女のために京都に滞在中の生活を書きながら、遊女との戀のいきさつを従として、二人の、中年を過ぎた、ただ獨り者といふ事が共通するだけで、その他は氣質も境遇も文學の仕事も總て全く對蹠的な文學者が、違つた目的をもつて放浪してゐる先きの京都でふと廻り逢つてからの何ケ月間かの、世にも風變りな交際を、さまざまの風變りな場面を描きながら、可なり客觀的に書いてゐる事である。

假（かり）に、この小説の二人の主人公のうちで、田原を秋江とすると、鶴岡は、この世の中で取り分け酒と讀書を最も好むといふ、風變りな文學者であつた。酒と讀書を好む文學者は他にも多くあるかも知れないが、私がほんの少し知つてゐる鶴岡はかういふ人であつた。

たしか大正十二年の關東の大地震前まで銀座の尾張町の角（三越の、服部時計店でない方の、向ひ）にあつた『ライオン』といふ洋酒（が主）兼喫茶店に鶴岡は毎晩現れたが、彼は、決して普通の客席に腰をかけた事はなく、俗に『かぶりつき』といふ所でビイルかウイスキイかを殆ど立て續けに飲んで、殆ど誰とも口をきかずに十分か十五分かで姿を消した。

この鶴岡は、本當の名は安成といふので、容貌は、『二人の獨り者』の中で委しく書かれてゐるやうに、赤ら顔で髭武者であつたが、體（からだ）も顔も丸丸と太（ふと）つてゐるのに一種の愛嬌があつた上に、笑ふ度（たび）に見える齒並（はなみ）の揃つた白い大形（おほがた）の齒が、髭武者の赤ら顔のために目立つばかりでなく、何（なん）ともいへぬ親しみを人に感じさせた。その上、顔だけでなく、體（からだ）ぢゆうが毛深（けぶか）かつたことさへ何ともいへない善良さを現してゐるやうに

思はれた。それでゐて、『二人の獨り者』の中にもちよつと書かれてあるやうに、安成は、その頃の社會主義の本を澤山讀んでゐたらしかつたが、讀書好きで貧乏で無造作な彼は、いつも懐に二三册の本を入れてゐたが、それさへ氣障の反對に見えたばかりでなく、いつも懐の中には本が這入つてゐても金は殆ど這入つてゐないやうに思はれて、それだけでも、どんな嚴しい役人にも憎めない感があつた。

安成が『ライオン』に現はれた頃、「生活と藝術叢書」といふ、一册金參拾五錢の、菊半截の新しい叢書が發行された。それは私が二十四五歳の頃であつたが、私は、その叢書を愛讀したので、今でもその叢書の中の一册を持つてゐる。それは荒畑寒村の『逃避者』といふ小説集で、その叢書の中には、その本の外に、大杉榮の『勞働運動の哲學』、石川啄木の未完の長篇小説『我等の一團と彼』、上司小劍の隨筆集、『金魚のうろこ』、その他五册の外に、この安成貞雄の『文壇與太話』といふ本もある。

また、安成が夜毎に『ライオン』に現れた頃、ちやうど同じ頃、新派の座附作者の瀬戸英一が毎晩ほど『ライオン』に現れた。瀬戸は、幾つかの『花柳一筋道』といふ藝妓を中心にした脚本を代表作としただけあつて、その外見は、安成と全く反對で、顔

も形も共に新派の然も女形の俳優のやうに見えた。しかし、私の贔屓目でなく、ときどき同時に『ライオン』に現れた安成と瀬戸とは、遠くから見たところだけでは、一等俳優と俳優の男衆ほどの違ひがあつた。無論、安成の方が一等俳優である。が、いづれにしても、安成も瀬戸も四十の聲を聞かずに永眠したのは惜しい。或ひは安成はちやうど四十歳の年になくなつたかと思ふ。しかし、安成にしても、瀬戸にしても、若し今まで生き延びてゐたら、必ず世を果なんでゐたであらう。

『二人の獨り者』は、かういふ住み好かつた時代にも拘らず、共に主人公である、獨り者の、田原も、鶴岡も、それぞれ、その世を樂んでゐたにも拘らず、その住み好い世の人人がこの二人を餘り歡待しなかつたといふ話を小說にしたものであるが、秋江はそれを實に明るくユウモアのある作品にしてゐる。人によると、秋江の作品は一體に暗い感がすると云ふが、假にその事が本當に近いとすると、『二人の獨り者』は秋江の全作品の中で最も明るい小說の一つである。

猶、この小說は、大正十二年八月末に發行されたので、發行されると直ぐ、あの關東の大地震のために、殆ど本がなくなつたから、私も、この選集で、この小說が十四

五年ぶりで讀み返せるを樂んでゐる。

『靑草』は、大正三年、(一千九百十四年、) 秋江が三十九歳の年の作で、「ホトトギス」の四月號に出た。

この小說は最も秋江らしい作品の一つである。さうして、この小說は、私だけの考へでは、大阪の遊女を題材にした幾つかの小說の中で、すぐれた作品でもあり、最も特色がある。しかし又多くの讀者の中にはこの小說を或ひは餘り好まないと云ふ人があるかも知れない。

私は近松秋江論のやうな文章を二度書いた。最初のは大正八年で、二度目のは昭和九年であるから、その間十五年たつてゐる譯である。その十五年目に書いた文章の中に『靑草』に就いてかういふ事を述べてゐる。

(前略) さういひつつ、早くも闇の中に白い脛を卷くろのが見えてゐた。

翌朝、淺海は、また其處を散歩すると、昨夕遊女が小用をした跡には靑草が伸伸と萠えてゐた。

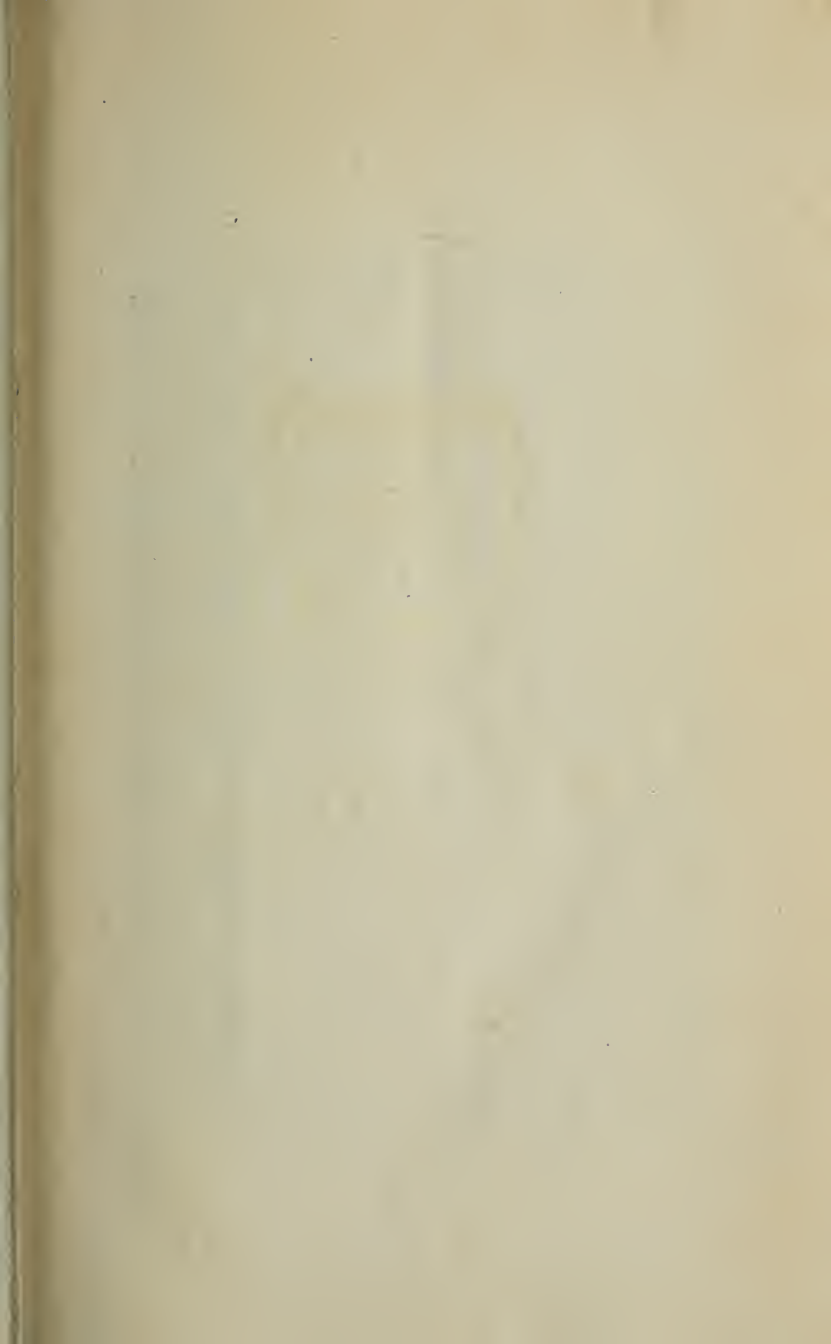
これは『靑草』の結末の一節である。この一節を今から十五年前に書いた『近松秋江論』の中にも引いたが、その時と今の意見とは正反對であるから、ここで訂正しておく。それは、最後の「小用をした跡には靑草が伸伸と萠えてゐた」といふ所であるが、「純粹の自己の直接經驗を有體に記錄しようと覺悟」してゐる作者には作者の意見があるかも知れないけれど、私は、この靑草が一夜のうちに「伸伸と萠え」る事を、前の文章で「苦笑せざるを得ない」と書いたのを、この文章で「脫帽する」と書き改めたい。それは、一夜のうちに靑草が伸伸と萠えるといふ事は、現實には全くあり得ないことであるけれども、この場合、現實にあり得るとかあり得ないとかは問題ではないので、これは、最も拙劣な譬であるが、最も巧みな象徵或ひは『畫龍點睛』の妙であると考へるからである。

いづれにしても、『青草』は最も秋江らしい小説の一つである。

『伊年の屛風』は、明治四十五年、(一千九百十二年)秋江が三十七歳の年の作で、「太陽」の五月號に發表された。

この小説は、秋江の全作品の中で、特殊のもので、明るいユウモアのある作品であるばかりでなく、秋江には珍しい客觀的の形式の短篇小説としても、褒めていふと、完璧に近い。

多くの讀者の中には『二人の獨り者』のやうな作風の小説を好まない人があるとすると、(さういふ讀者は滅多にないと思ふが、若しあれば、さういふ讀者は)『伊年の屛風』の方を買ふかも知れない。又、もしかすると、作者も、今は六十半ばに近くになつて、『別れた妻に送る手紙』や『黑髮』などを餘り好まなくなつて居られると聞いたが、さういふ理由だけでなく、この小説に愛著を持つて居られるかも知れない。

しかし、私だけの考へでは、『伊年の屛風』は、好短篇であるが、秋江らしい特色が餘り出てゐないので、餘り高く買へない、しかし又、やはり捨てがたい短篇でもある。

昭和十四年八月二十日印刷
昭和十四年九月一日發行

近松秋江傑作選集 第二卷

定價 一圓七十錢

著者 近松秋江

發行者 木田開
東京市麴町區丸ノ内二丁目二番地

印刷者 堀修造
東京市牛込區榎町七番地

發行所
東京市麴町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルデイング五八八區
中央公論社
振替口座東京三四番
電話丸ノ内 五三五番 五三六番 五二七番 五二八番

大日本印刷株式會社榎町工場印刷